深　川　市

内　園　2　遺　跡

──北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書──

昭和62年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

深　川　市

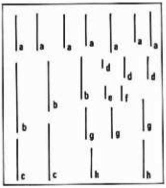
内　園　2　遺　跡

――北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書――

昭和62年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

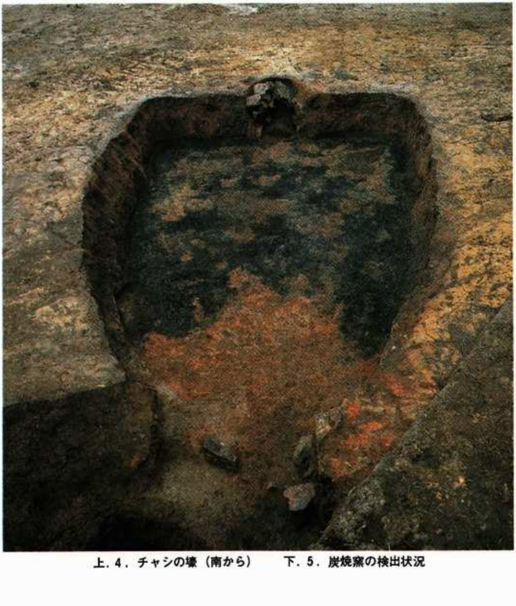
1. 石器・石質



a：黒　曜　石
b：片　　　岩
c：緑色泥岩
d：頁　　　岩
e：滑　　　石
f：滑　　　石
g：安　山　岩
h：砂　　　岩

2．チャシの丘全景（北地区から）

3．チャシの壕、検出作業



上．4．チャシの壕（南から）　　下．5．炭焼窯の検出状況

6．遺跡周辺の空中写真（1980年11月撮影）
（これは、日本道路公団札幌建設局提供のものを複製したものである）

例　　　言

1．本書は北海道縦貫自動車道建設用地内のうち、深川市における内園2遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．調査は、財団法人北海道埋蔵文化財センター調査部調査第3課が担当した。

3．本書の編集は調査第3課の西田茂が担当した。文責者は次のとおりである。

　Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅴ－2、Ⅵ－1・3西田　茂、Ⅳ－1森　秀之、Ⅳ－2・3、Ⅵ－4田中哲郎、Ⅴ－1、Ⅵ－2中田裕香。

4．鉄器の保存処理は、調査第2課三浦正人が担当した。

5．本文・図表中では柱穴様ピットを略号ＳＰで表わし、確認順に番号を付した。

6．石器等の大ききさは、長さ×幅×厚さ、単位cm、破損品は（　）で示した。

目　次

例　言

I　調査の概要

1．調査要項……1

2．調査体制……1

3．調査に至る経緯……1

4．調査の概要……2

II　遺跡の位置と環境、周辺の遺跡

1．位置と環境……12

2．周辺の遺跡……14

III　調査の方法と遺物の分類

1．調査の方法……19

2．遺物の分類……27

IV　遺構と遺構出土の遺物

1．炭焼窯跡……31

2．チャシ跡……34

3．竪穴状遺構……42

V　遺　物

1．土　器……43

2．石器等……52

VI　成果と問題点

1．成果の要約……133

2．縄文時代晩期の土器について……134

3．炭焼窯について……140

4．チャシ跡について……141

写真図版I……85

II……94

III……97

IV……104

V……119

Ⅰ　調査の概要

1．調査要項

事　業　名　北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査
事業委託者　日本道路公団札幌建設局
事業受託者　財団法人北海道埋蔵文化財センター
遺　跡　名　内園（うちぞの）2遺跡（北海道教育委員会登載番号：E—10—28）
所　在　地　深川市音江町字内園674、669ほか
調査面積　11,850㎡
調査期間　昭和62年4月1日～昭和63年3月31日
（発掘調査：昭和62年6月15日～7月25日）

2．調査体制

財団法人　北海道埋蔵文化財センター　理事長　植村　敏（昭和62年6月25日まで）
澤　宣彦（昭和62年6月26日から）
専務理事　山本　慎一　常務理事　藤本　英夫（昭和63年2月3日まで）
業務部長　間宮　道男　調査部長　中村　福彦
調査第3課長　鬼柳　彰
文化財保護主事　西田　茂（発掘担当者）　熊谷　仁志　田中　哲郎
嘱　託　和泉田　毅　森　秀之　中田　裕香

調査にあたっては、深川市教育委員会の協力を得た。また、次の機関及び人々の指導・助言をいただいた（順不同、敬称略）。

深川市郷土史研究協議会：田中利一、サッポロビール博物館：鈴木省二、浦臼町郷土史料館、神竜土地改良区、斎藤　傑、瀬川拓郎、杉浦重信、佐藤訓敏、北沢　実、大塚一美、杉村京子、小竹英司、近藤長一、近藤俊一、片山忠雄、片山新一、村中澄雄、宮田正雄、川合泰公、寺下良一、野村　崇、若築・新谷共同企業体：平　安雄・菊地　毅

3．調査に至る経緯

北海道教育委員会は、昭和54年10月及び昭和60年8月、北海道縦貫自動車道建設用地（函館～稚内）のうち滝川から旭川間の埋蔵文化財所在確認調査を行なった。この調査によって深川市内では周知の遺跡2か所と新発見の遺跡4か所が建設用地にかかることが明らかになった。

財団法人北海道埋蔵文化財センターは、北海道教育委員会の指示により、これらの遺跡について昭和59年から昭和62年にかけて事前発掘調査を実施した。

深川市内園2遺跡は、昭和60年8月に所在確認調査が行われ、翌昭和61年6月と昭和61年10月の二回にわたって遺跡の性格・範囲を知るための事前発掘調査が実施された。発掘

調査は昭和62年６月～７月に実施され、調査予定の全区域11,850㎡をすべて終了した。

4．調査の概要

発掘区の設定

現地調査の基本図は、北海道縦貫自動車道工事予定図（1,000分の１平面図）を使用した。発掘区の設定は、昭和61年５月の試掘調査で設定したグリッドにならって、以下のようにおこなった（図Ⅰ－2·5）。まず、工事予定地センターラインのSTA156、STA157をそれぞれM－60、M－70とする。これを基軸線として10mの方眼を設定する。この10mの方眼は、北西端の交点のアルファベットと数字との組み合わせで呼称される（例：L―76）。さらにこの10mの方眼は、５m四方に分割されて小発掘区となり、反時計回りに北西端から順次a、b、c、dと呼ぶ（例：L―76―a）。

なお、基軸線に用いた点は平面直角座標系の第XII系で、STA156がX＝－31971.590、Y＝－6786.944、STA157がX＝－31894.555、Y＝－6723.227である。

地　形

図Ⅰ－２は、工事予定図をもとに作成した地形図である。これによれば、調査区域は石狩川に面した台地と、この台地を刻んだ沢地部分である。台地は標高70m程の高さであり、沢は幅30m深さ５mほどで石狩川に開口している。

なお図Ⅰ－3·4は今回の調査で作成した地山の地形図である。これは縄文時代の遺物を掘り終えた段階での図であり、より自然地形に近いものと考えられるが、耕地造成時の削平等の痕跡も見てとれる。

遺跡の概要

図Ⅰ－2·5にも明らかなように、調査区域は大きく南と北の２か所に別れている。この南の方を南地区と呼ぶ。さらに北の方は沢（これを沢地区と呼ぶことにする）を挟む３か所の台地に別れている。これらを南側から順に中地区、東地区、北地区と呼ぶ。

南地区、中地区、東地区は耕地造成時の削平や耕作による攪乱、表土の移動などのために遺物の残りは良くなかった。中地区からは炭焼の窯跡、東地区からはチャシの壕が発掘された。これらは地中深く埋れていたために削平を免れたものである。沢地区からは、台地の上から投げ込まれたか、流れ込んだと考えられる遺物が検出された。北地区は農耕地になることもなく遺物の包含状態は良好であったが、調査したのは傾斜地のうちわずかな範囲であり、少量の遺物が検出されたにすぎない。

遺　構

炭焼の窯跡　構築時期は開拓初期と推定される。床面の奥行4.1m、最大幅2.6mの大きさで、焚き口と煙道部分は角礫をもって作られている。1886年（明治19年）に開始された上川仮道、（現国道12号）開さくに際して、使役された樺戸集治監の囚人がこの内園地区で木炭を焼いた

という伝承がのこっている。今回検出されたものがこれに該当するならば、上川仮道につづいて工事が行なわれた上川道路が1889年（明治22年）秋に竣工していることから、時期を限定しうる開拓初期の遺構といえる。

チャシ跡　石狩川岸と沢とで区切られた台地の先端近くに、底面の幅0.6m長さ26.5mの壕を検出した。壕の西端から4mほどのところには、通路部分かと考えられる掘り残し部分が確認され、壕の西端肩付近と東端底部とから、それぞれ鉄鍋の破片が出土している。壕の内側には竪穴住居や柵列を推定させるような遺構をいくつか検出したが、耕地造成時の削平などにより表層部の消滅したところが多く、その規模・形状について詳細を明らかにすることはできなかった。

遺　物

縄文時代、続縄文時代、擦文時代の土器・石器等やチャシの時期及び開拓期の鉄片・陶磁器などが出土している。

土　器　出土した土器は少量で、しかも表面が摩耗した小破片がほとんどである。したがって土器の型式を判別し、時代や時期を判定しうるものは多くないが、縄文時代中期・晩期、続縄文時代、擦文時代と推定しうる若干の資料がある。

中地区や東地区の斜面から出土した遺物には比較的摩耗の少ないものが認められた。これらは台地の上からもたらされたもので、農耕作業等による破壊消滅を免れたものであろう。

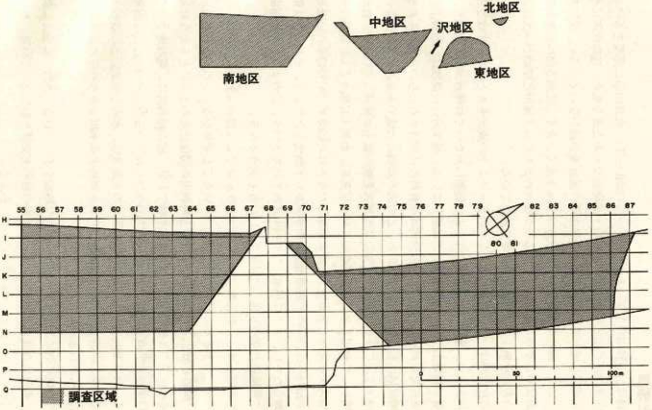
石器等　縄文時代や続縄文時代の石器は、石鏃・ドリル・つまみ付きナイフ・スクレイパー・石斧・石のみ・たたき石・すり石・砥石・台石・石皿などである。これらの石器のうち出土状態からみて土器との共伴関係が明らかなものは、L・M—80・81区などから出土した縄文時代晩期〜続縄文時代前期のものである。このほかの場所から検出されたもののなかには、その形態的な特徴から時期を推定できるものもある。

剝片石器の素材は黒曜石が多いが、安山岩・頁岩・珪岩などもある。出土遺物の大半は、片岩の石斧・石斧片である。素材の片岩礫を石狩川の川原からもってきて、石斧製作を行なったものと考えられる。

鉄　器　チャシの時代と考えられる鉄鍋の破片が2点ある。そのうちの一つは、胴部から底部におよぶ比較的大きな破片で、器形を推定復元すると底部の直径33.4cmの大きさになる。

陶磁器等　明治時代の開墾期以降のものと考えられる三平皿・飯茶碗がある。ほかに蓋・徳利・すり鉢・蒸留瓶などの破片もある。

図Ⅰ－1　内園2遺跡の位置（この図は、国土地理院発行の5万分の1地形図『深川』を複製したものである）



図Ⅰ—5　調査区域とグリッド設定、地区名称

Ⅱ　遺跡の位置と環境、周辺の遺跡

1．位置と環境

内園２遺跡は、石狩川の左岸にある（図Ⅰ－１・図Ⅱ－３)。大雪山系に源流をもつ石狩川は、上川盆地でオサラッペ川・牛朱別川・忠別川・美瑛川などの支流を集め、盆地西側にそびえる山並みを刻んで西に流れている。そして神居古潭の渓谷を急流となってくだり、深川の平野部にいたって、大きく南に向きを変える。さらに２km下流で、大きく北西方向へむきを変えるあたりから流れはゆるやかとなる。このゆるやかな流れがもたらす河川堆積物が一面に広がり始めるところの左岸台地上に、内園２遺跡が立地している。

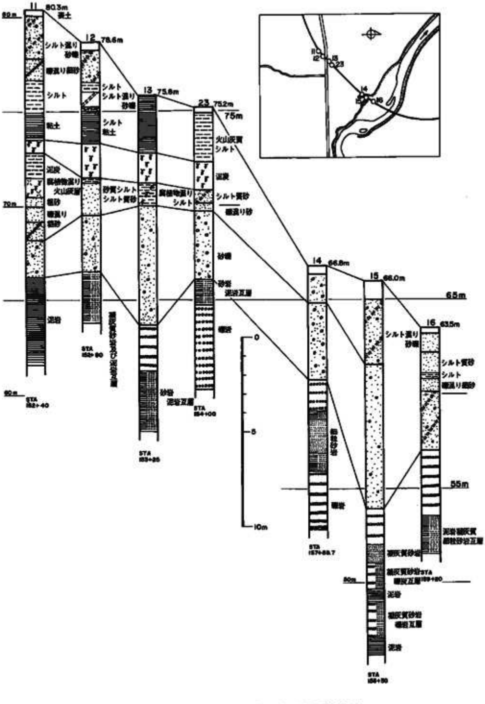
図Ⅱ－１の柱状図は、道路建設にさいしてのボーリングの成果をもとにして作成したものである。これによると、遺跡のある台地には、広い範囲にわたって砂礫層が厚く堆積し、その上部には泥炭層や粘質土、シルト質土などが堆積している。縄文時代の遺物は、地表下約40cmほどまでの深さに見られることから、この台地は地質時代に形成されたものと考えられる。

今回の調査区域は石狩川に開口する沢と、この沢の両側の台地である。標高は65ないし73ｍである。道路予定地になるまえは、沢部分は落葉広葉樹の雑木が繁茂していたが、台地上は広い区画の水田として利用されていた（巻頭カラー写真６)。台地上に広々とした矩形の水田が広がるのは、機械力を使った造田施工と用水の確保がなされた1968年（昭和43年）以降ということである。水田耕作は1959年の内園地区開田事業から本格化したもので、それ以前は用水を得ることが困難なために、おもに畑地として利用されていたという。このような土地利用の様子は、1948年８月撮影の空中写真（図版Ⅱの１）からも読みとれる。

この空中写真によると、現在幅30ｍ、奥行が150ｍほどしか認められない沢地形が、幅に幾分かの広がりをもってさらに南東方向へと続いていたことが分かる。この空中写真を部分拡大してみると（図版Ⅱの２)、自然地形と当時の土地利用の関係は次のようにとらえられる。

沢口にある小区画の３枚の水田のほかは雑木林である。崖の傾斜面は、荒れ地であろう。樹木の消える付近から沢の支流のひとつが南西方向へ分かれているが、沢の主流路は南東方向へと続いている。南東方向へと伸びる沢地形の凹地の大部分は、水流と崖地形とに制約された区画の谷水田である。南西方向から沢に流れ込む水を利用する水田とみられるところは、小さな方画の地割になっている。

沢の両側の台地は畑地となっていて、対照的な地割を示している。西側は整然とした大きな方画、南側と東側は方画をもととしながらも地形の制約を受けた形になっている。もっとも南側の国道12号よりには、民家、果樹園（リンゴ）がある。



図Ⅱ－1　機械ボーリングによる土層柱状図

2．周辺の遺跡

図Ⅱ—2·3は、北海道教育委員会作成の埋蔵文化財包蔵地カードと『旭川市埋蔵文化財包蔵地分布調査報告』（1983、旭川市教育委員会）をもとにして作った深川市内とその周辺における遺跡の分布図である。これらによると、丘陵斜面や河川付近に多くの遺跡がみつかっている。

これらの遺跡の時代・時期・立地の特色は、発掘調査等によりその内容が比較的明らかなものをもとに推定すると、次のようになる。

旧石器時代の遺跡は、確認されていない。縄文時代早期の遺跡は丘陵上の国見２遺跡、川沿いの納内６丁目付近遺跡などがある。縄文時代前期の遺跡は、丘陵上の内園峠遺跡、納内３遺跡、丘陵斜面の神居古潭８遺跡、川沿いの納内６丁目付近遺跡など。縄文時代中期の遺跡は、丘陵上の内園峠遺跡、向陽２遺跡、国見２遺跡、納内３遺跡、丘陵斜面の音江２遺跡、神居古潭８遺跡などのほかに、川沿いの納内６丁目付近遺跡、納内５丁目付近遺跡がある。

縄文時代後期の遺跡は、丘陵上の音江の環状列石、神居古潭５遺跡のほか、川沿いの東納内２遺跡、納内５丁目付近遺跡、納内４丁目付近遺跡などである。縄文時代晩期の遺跡は東納内２遺跡、神居古潭Ｃ遺跡、内園２遺跡、納内４丁目付近遺跡、メム川遺跡など川沿いに多い。続縄文時代の遺跡は、縄文時代晩期の遺跡と同じように川沿いに多いと推定されるが、明らかなものは少ない。東広里遺跡、内園２遺跡、納内４丁目付近遺路、大排水遺跡などがこの時期の遺跡である。

擦文時代の遺跡は石狩川沿いの竪穴群が多い。東納内遺跡、神居古潭Ｂ遺跡、東広里遺跡、納内遺跡、一已水源遺跡、納内６丁目付近遺跡、納内５丁目付近遺跡、納内４丁目付近遺跡、納内３丁目付近遺跡、納内２丁目付近遺跡、一已12丁目付近遺跡、神居古潭１遺跡など。このうち納内６丁目付近遺跡では、円墳から蕨手刀が出土したという記録がある。

チャシ跡は、丘陵上の内園チャシ跡、独立大岩塊上の神居岩チャシ跡、台地端部の音江のチャシ跡の他は石狩川に面している。北内園チャシ跡、納内５丁目チャシ跡、納内４丁目チャシ跡、出会沢チャシ跡、納内３丁目チャシ跡、納内北チャシ跡、納内南チャシ跡などがこれにあたる。本書に報告する内園２遺跡のチャシ跡もまた石狩川に面している。

石狩川の川沿いの遺跡のほとんどは明治時代から知られていたが、耕地の造成に伴う種々の工事によって、一部が消滅したり表面の消失したものが多い。

深川市の遺跡

番号	遺跡名	所在地	概要
1	国見遺跡	音江町国見2－1	円形土まんじゅう型墳墓の記録あり。現状は水田。縄文時代中期の北筒式土器、尖頭器も出土している。
2	中島遺跡	音江町広里河川用地557	擦文時代かと考えられる竪穴があり、土器、釘、マキリなどが出土した記録あり。造田工事・耕作のために大部分消滅か。
3	向陽遺跡	音江町向陽75の2	中央に炉のある竪穴があり、余市式土器が出土している。石槍、石斧、砥石破片も出土している。
4	内園遺跡	音江町内園175	河岸段丘に竪穴の凹みがたくさん見られたが、造田工事により大部分は消滅か。擦文式土器、土師器、砥石などが出土。
5	音江のチャシ跡	音江町音江227	北にのびるほそい台地を東西に切った壕がある。チャシのなかには竪穴が認められる。昭和50年地形測量。
6	内園峠遺跡	音江町内園431	縄文時代前期・中期・後期・晩期、続縄文時代、擦文時代の遺物が出土している。道路工事のために一部消滅。
7	旧スママナイ川遺跡	音江町稲田	竪穴があったという。縄文時代中期とみなされる土器、石器が出土している。
8	音江の環状列石	音江町向陽171の1	国指定史跡。明治時代から広く知られている。縄文時代後期・晩期の墓。昭和26年～31年発掘調査。
9	東納内遺跡	納内町5区4168	擦文時代の集落跡。土師器、須恵器も出土している。造田工事により大部分消滅。一部は深川市指定文化財の史跡。
10	音江Bの環状列石	音江町向陽164の1	国指定史跡『音江の環状列石』の南約300ｍのところ。
11	北内園チャシ跡	音江町内園175	内園遺跡のなかに二条の壕が半円形に残る。チャランケチャシの伝承あり。
12	内園チャシ跡	音江町内園440	標高140ｍの段丘上。二条の壕がある。
13	神居岩チャシ跡	納内町	二条の壕がある。自然崩壊により一部消滅。内耳鉄鍋も出土している。昭和31年調査。
14	納内5丁目チャシ跡	納内町5丁目	壕と竪穴の記録があるが、耕地造成・耕作のため表面消失か。
15	納内4丁目チャシ跡	納内町4丁目	三条の壕と竪穴の記録があるが、耕地造成・耕作のため表面消失か。
16	出会沢チャシ跡	音江町国見	道路工事により先端の一部は消滅。耕作のため表面消失か。壕の痕跡らしきものがわずかに認められる。
17	神居古潭B遺跡	納内町7号	竪穴あり。擦文式土器、須恵器のほかに石斧、砥石、石錘なども出土している。用水路工事等により一部消滅。
18	北広里遺跡	音江町広里125	竪穴の記録あり。耕地造成・耕作のため表面消失か。
19	東広里遺跡	音江町広里19－9ほか	多数の竪穴があり、日本刀、鐙、紡織等出土した記録あり。続縄文時代、擦文時代の遺物が出土。昭和62年発掘調査。
20	中川台地チャシ跡	納内町3902	縄文時代の石器多数出土。遺構については判然たらず。
21	東納内2遺跡	納内町7号	昭和51年発掘調査。配石のある土壙墓検出。縄文時代後期・晩期、続縄文時代、擦文時代の遺物出土。
22	中の沢A遺跡	一已町中の沢1281	石斧、剥片が出土している。
23	中の沢B遺跡	一已町中の沢1280	近くに湧水があり、丸のみ形石斧が出土している。
24	湯内遺跡	多度志町湯内5985ほか	昭和10年頃の造田工事のとき、多数の土器片や石斧が出土したという記録あり。
25	東尚武山遺跡	納内町12区	湧水があり、縄文時代の石器が多数出土している。
26	神居古潭C遺跡	納内町7号	縄文時代中期・後期・晩期の遺物が出土している。
27	神居古潭D遺跡	納内町7号	土器が出土している。
28	内園2遺跡	音江町内園674ほか	縄文時代後期・晩期の遺物が出土している。耕地造成・耕作のため表面消失か。昭和62年発掘調査。本書。
29	向陽2遺跡	音江町向陽171ほか	昭和61年発掘調査。縄文時代中期・後期の遺物が出土している。
30	国見2遺跡	音江町音江567ほか	昭和61・62年発掘調査。縄文時代早期・中期・後期の遺物が出土している。
31	納内遺跡	納内町納内5937ほか	約200の竪穴との記録あり。耕作・河川浸食のため一部消失か。縄文時代、擦文時代の遺物のほかに鉄刀、兜が出土。
32	一已水源遺跡	一已町水源	110余の竪穴との記録あり。耕地造成・耕作のため表面消失か。擦文式土器、剥片等が出土。
33	内園3遺跡	音江町内園433ほか	耕地造成・耕作のために表面消失か。剥片等出土。
34	更進1遺跡	音江町更進140	耕地造成・耕作のために一部消失か。剥片等出土。
35	更進2遺跡	音江町更進140	耕地造成・耕作のために一部消失か。剥片等出土。
36	ピラタンネ遺跡	音江町	昭和34年国道拡幅工事のとき、石斧7点がまとまって出土した。道路工事、河川工事のために消滅か。
37	納内3丁目チャシ跡	納内町納内	二条の壕と竪穴の記録があるが、耕地造成・耕作のため表面消失か。
38	納内北チャシ跡	納内町納内	半円形一条の壕の記録があるが、河川浸食のため崩壊消失か。

表Ⅱ－1 周辺の遺跡（その1）

番号	遺跡名	所在地	概要
39	納内南チャシ跡	納内町納内	半円形一条の壕の記録があるが、河川浸食のため崩壊消失か。
40	納内６丁目付近遺跡	納内町納内	約30の竪穴と、蕨手刀出土の円墳の記録あり。耕地造成・耕作のために表面消失か。東端の一部を昭和62年発掘調査。
41	納内５丁目付近遺跡	納内町納内6083ほか	50余の竪穴との記録あり。耕地造成・耕作のために表面消失か。縄文時代中期・後期の土器、石器も出土している。
42	納内４丁目付近遺跡	納内町納内6315ほか	20余の竪穴との記録あり。耕地造成・耕作のために表面消失か。縄文時代後期・晩期、続縄文時代の土器、石器が出土。
43	納内３丁目付近遺跡	納内町納内737ほか	200余の竪穴との記録あり。耕地造成・耕作のために表面消失か。擦文式土器などが出土している。
44	納内２丁目付近遺跡	納内町納内160ほか	30余の竪穴、チャランケチャシの記録あり。大正３年人骨、太刀の検出あり。擦文時代の紡錘車も出土している。
45	一已12丁目付近遺跡	一已町一已6918ほか	50余の竪穴の記録あり。耕地造成・耕作のため表面消失か。縄文時代の土器、石器も出土している。
46	納内２遺跡	納内町納内5232ほか	石鏃、剝片が採集されている。
47	納内３遺跡	納内町納内1196ほか	昭和62年発掘調査。縄文時代前期・中期・後期の土器、石器が出土している。
48	音江１遺跡	音江町音江474ほか	縄文時代の丸のみ形石斧などが採集されている。
49	音江２遺跡	音江町音江419ほか	昭和62年発掘調査。縄文時代中期・後期の土器、石器が出土。竪穴住居跡を３か所検出している。

妹背牛町の遺跡

番号	遺跡名	所在地	概要
M１	メム川遺跡	妹背牛4978	昭和44年発掘調査。縄文時代晩期の土器、石器が出土している。水田の基盤整備事業のため表面消失。
M２	大排水遺跡	妹背牛258	造田工事のとき、炉跡が見つかったという。古い小川の近くから縄文時代、続縄文時代の土器、石器が出土している。
M３	メム川２遺跡	妹背牛	土器片あり。

秩父別町の遺跡

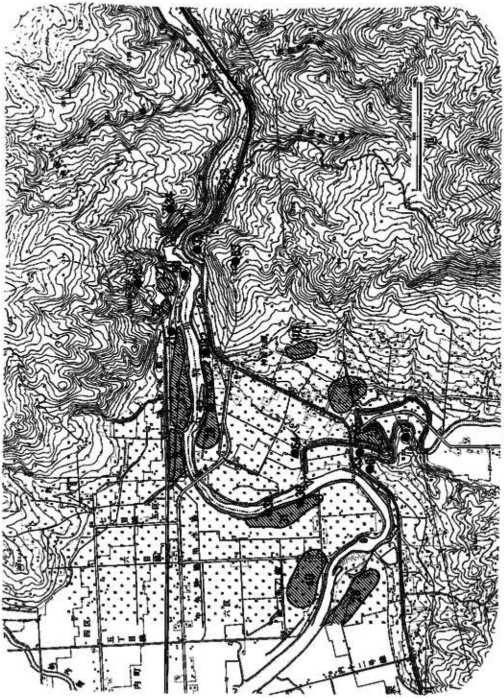
番号	遺跡名	所在地	概要
T１	中山１遺跡	中山109の101ほか	畑から石器が多数出土したという。
T２	中山２遺跡	中山109の61ほか	縄文時代の石斧、石鏃が出土したという。
T３	中山３遺跡	中山4199	縄文時代の石斧、石鏃が出土したという。
T４	秩父別２遺跡	秩父別1571	石鏃が出土している。
T５	秩父別第１遺跡	秩父別1204	石鏃が出土している。
T６	滝の上遺跡	中山109の776ほか	擦文時代の住居跡があったという。

旭川市の遺跡

番号	遺跡名	所在地	概要
23	神居古潭８遺跡	神居町神居古潭70	昭和53年発掘調査。縄文時代前期・中期の土器、石器が出土している。
26	神居古潭１遺跡	神居町神居古潭112地先	北海道指定の史跡。200以上の竪穴群。擦文式土器、紡錘車、鉄器などが出土している。
32	神居古潭チャシ跡	神居町神居古潭113地先	北海道指定史跡内にある。一条半円形の壕が認められる。
33	神居古潭左岸チャシ跡	神居町神居古潭19	チャシコツとの地名が伝えられているところ。昭和48年確認された。
34	神居古潭右岸チャシ跡	江丹別町春日199地先	チャシコツとの地名が伝えられているところ。昭和48年確認された。
50	神居古潭２遺跡	江丹別町春日197地先	昭和41年発掘調査。石狩川の川べりに竪穴が残っている。
51	神居古潭３遺跡	江丹別町春日201地先	昭和55年範囲確認調査。縄文時代の土器、石器などが出土している。
52	神居古潭４遺跡	神居町神居古潭15	縄文時代の土器が採集されている。
53	神居古潭５遺跡	神居町神居古潭89	昭和27年発掘調査。標高213ｍの山頂にストーン・サークルがある。
54	神居古潭６遺跡	神居町神居古潭150	縄文時代の土器、石器などが採集されている。
55	神居古潭７遺跡	神居町神居古潭74	
110	神居古潭９遺跡	神居町神居古潭49	縄文時代の石斧、石鏃などが採集されている。
182	神居古潭10遺跡	神居町神居古潭	

表Ⅱ－２　周　辺　の　遺　跡（その２）

図II－2　周辺の遺跡（その1）



図I−3 周辺の遺跡(その2)

Ⅲ　調査の方法と遺物の分類

1．調査の方法

(1)　事前発掘調査の成果

昭和61年5月と10月の2回、以下の方法で事前発掘調査（以下、試掘調査という）を行なった。

調査予定地の全域に10m方眼を設定し、その方眼のなかで1m×2mあるいは2m×2mの試掘溝を掘削して遺物、遺構の検出をおこなった。耕地として表土の耕耘を受けたところでは遺物の二次的な移動が予想されたので、もともとの遺物包含層と推定される土層の残存状態の把握につとめた。また、河川敷や沢など湧水が予想されるところは、重機を使用して掘開作業を行なったところもある。

この試掘調査によって知りえた遺跡の状態は、次のようなものであった（図Ⅲ—2）。

南北約500mの試掘調査範囲は、概略つぎの三つの地形に区分される（図Ⅰ—2）。北のほうから、イ：石狩川の河川敷、ロ：石狩川にそそぐ沢、ハ：河岸段丘である。

土層柱状図の代表例を図Ⅲ—1に示した。これによるとイの部分（88～95）は水田の部分も含めて砂層、礫層が繰り返し堆積している河床堆積物である。J—89・90区から黒曜石の剝片が検出されたが、有意の遺物包含層を確認することはできなかった。ロの部分は湧水が激しく十分な調査はできなかったが、重機を使って掘りあげたM—78区から縄文時代後期と推定される土器片が検出された。

ハの部分は造田の有無や程度により遺物、遺物包含層の残存状況に大きな違いが見られ次の①～⑤に分けられる（図Ⅰ—5）。①北地区：沢口の西側、傾斜地である。ほぼ自然状態に近いと考えられる土層が、Ⅰ—86区で検出されている。②東地区：沢口の東側、段差が顕著な2枚の水田である。造田により遺物包含層の残存状態はわるく、島状に点在している。縄文時代早期と見なされる土器のほかに黒曜石の石器・剝片などが出土している。M—81区には遺構らしきものがあった。③中地区：沢の南西側。3枚の水田に分かれているが、ほぼ平坦である。造田の影響が少なくほぼ全面に遺物包含層が残っていたと推定されるが、ごく最近の耕作土搬出の結果、遺物が表出している。黒曜石の石器、剝片や片岩製の石斧などが検出されており、石器の形態から推定して縄文時代後期～続縄文時代の遺跡と考えられる。

④：中地区の南側、Ⅰ—67区とP—62区とを通る農道までのところ。3枚の水田は段差がある。造田により、遺物包含層が全面的に消失している。P—70区の畔の表面から黒曜石製のスクレイパーを検出しているのみで、ほかに遺物の出土はない。激しい湧水のために土層柱状図には明示できなかったが、現地表下1mほどには南地区で確認した泥炭層に連続するであろう泥炭層を検出した。

⑤南地区：調査区のうちもっとも南側。7枚の水田はかすかな段差があるが、ほぼ平坦である。造田とごく最近の耕作土搬出のために、遺物包含層は残存不良で、うすく島状に認められ

る。遺物の出土は少ない。L—56区、K—64区、I—67区には遺構があったことを推定させるような土層がみられた。K—56・57・58・61区にみられる泥炭層は段丘上にひろく拡がっているものと推定されるが、その形成時期を明らかにできる資料は得られなかった。

以上のような試掘調査の成果から、つぎのような理解が得られる。

縄文時代、続縄文時代のものとみなされる遺物が出土しているが、遺物包含層の残りは良くない。本来的な遺跡はハの段丘上に拡がっており、これと関連する遺物がロの沢から検出されたものと推定される。このうちハの④の部分は、造田により遺物包含層そのものが失われている。また沢のなかについては遺物包含層の深さ厚さとも未確認であるが、滞水土層には木製品等の出土も予想しうる。

(2) 調査のねらい

昭和62年度の試掘調査にもとづき、次の5点を重点的な目標において調査を行なうこととした。

ⓐ造田等に伴う表土の削平のために遺構・遺物の残り具合は悪く、予測される遺構の数はすくない。表土移動の程度をとらえながら、遺構・遺物の検出をおこなう。ⓑ土器の出土はあまり期待できないが、その出土状態等を詳細に観察することによって、遺跡の時代・時期の確定につとめる。ⓒ試掘調査では擦文時代の遺物は検出されていないが、周辺には擦文時代の遺跡が多く知られていることから、これらの遺跡と関連するであろう遺物の出土にも十分留意すること。ⓓ沢のなかの滞水土層については不確定要素が多いことから、安全対策も含め十分な配慮のもとにおこなう。木製品等の出土にさいしては、その保存処置等を考慮した取り上げを行なう。ⓔ出土する石斧等は、神居古潭変成岩地帯に由来する片岩を素材にしたものが多い。これら石斧等の原材料やたたき石・砥石等は、石狩川の河床礫が用いられたことが予想されるので、これの検証に寄与できる野外観察をおこなう。

(3) 発掘の手順と遺物のとりあげ

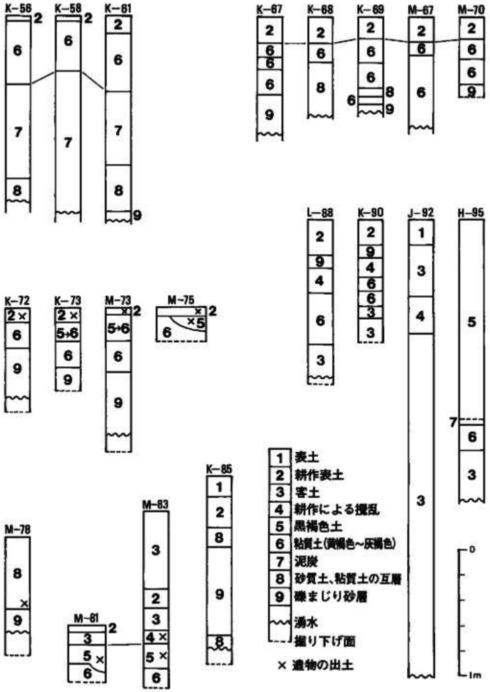
遺物の出土状態は、地区により大きく異なることが予想された。造田時の明らかな客土は、重機を使って搬出した。その後、スコップ、ツルハシ、山鍬、移植ゴテ、竹ベラなどで掘り下げた。5m四方の小発掘区ごとに掘り下げ、遺物の多寡、土層の変化をみきわめながら作業を進めた。そして遺物は出土の状況に応じて、位置や土層を記録してから発掘区ごとに取り上げた。とりわけ本来的な遺物包含層から検出される遺物については、出土状態の詳細な記録化をおこなった。微細遺物の密集部では、土壌を水洗いして取り上げたところもある。

(4) 土層の区分

明らかな客土と自然堆積土層とを区別した。土層の詳細な観察結果の一部は、図Ⅲ—3・図版Ⅲの4・5のとおりである。段丘上の東地区・中地区には黒褐色土の遺物包含層がわずかに残っているにすぎない。南地区は中地区とほぼ同じ様な土層が堆積しているが、黒褐色土の残り方はさらに少ない。沢のなかは砂礫層のあいだに砂層や粘質土の堆積があり、流木も見られる。

(5) 整理の方法

出土した遺物は、野外調査と並行して現地で水洗・注記作業をおこなった。小片あるいは微細なものを除いて、大多数の遺物には発掘区と出土層を注記してある。遺物台帳作成、遺物の分類ののち、土器の接合・復元、石器や片岩類の接合、土器・石器の実測・製図、集計およびその他の記録類の整理をおこなった。



図Ⅲ−1　試掘調査時の土層柱状図

2．遺物の分類

遺物は、出土の状況や形態的な特徴などをもとに、縄文時代、続縄文時代、擦文時代、チャシの時代に分類した。縄文時代、続縄文時代、擦文時代の遺物の分類は、従来、当埋蔵文化財センターが使用しているものによった（註1）。このうち土器については、縄文時代中期に属する資料をⅠ群、晩期をⅡ群、続縄文時代をⅢ群、擦文時代をⅣ群とした。

石器等については、定形的な石器をⅠ群～Ⅷ群に分け、石器の作り方にかかわる石核、剝片類をⅨ群とし、定形的な石器としては認定しがたいものを、加工痕や使用痕のある剝片、礫としてⅩ群をもうける。その他の礫、石製品などには分類記号はない。

（註1）　北海道埋蔵文化財センター編　1982『吉井の沢の遺跡』

石　器

＜Ⅰ　群＞　石鏃・槍先類

A：石　鏃

1：石刃鏃

2：細身で薄いもの、基部が内湾するもの

a：柳葉形のもの

b：五角形になるもの

c：大きめのもの

3：三角形のもの

（基部にえぐりのあるものを含む）

4：茎が明瞭にみられないもの

（ひし形のもの、基部が丸くなるもの）

5：茎をもつもの

8：破片など

9：今後分類を必要とするもの

B：槍先・ナイフ

1：茎をもつもの

2：茎が明瞭にみられないもの

（ひし形のものも含む）

8：破片など

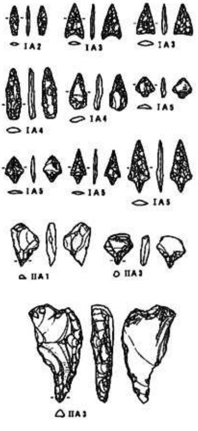
9：今後分類を必要とするもの

＜Ⅱ　群＞　石錐類

A：石　錐

1：刺突部をつくりだしたもの

（刺突部が複数のものもある）



石器分類模式（その1）

2：棒状のもの

3：棒状のものにつまみ部がつくりだされたもの

8：破片など

9：今後分類を必要とするもの

<Ⅲ 群> ナイフ・スクレイパー類

A：つまみ付きナイフ

1：二次加工が片面全体に施され、その面の右側縁に急角度の刃部をもつもの

2：二次加工が片面全体に施されるもの

3：二次加工が周辺に施されるもの

4：両面加工のもの

5：横形のもの

8：破片など

9：今後分類を必要とするもの

B：スクレイパー

1：石べらと称されるもの

2：まる形のもの（ラウンド・スクレイパー）

3：エンド・スクレイパー

4：幅広い茎をもつもの

8：破片など

9：今後分類を必要とするもの

<Ⅳ 群> 石斧類

A：石 斧

1：擦り切り手法によって製作されたもの

2：敲打痕（ペッキング）のみられるもの

3：打ち欠きによる整形がみられるもの

4：素材を大きく変形することなく、刃部のみ磨きがみられるもの

5：全面磨製のもの

8：破片など

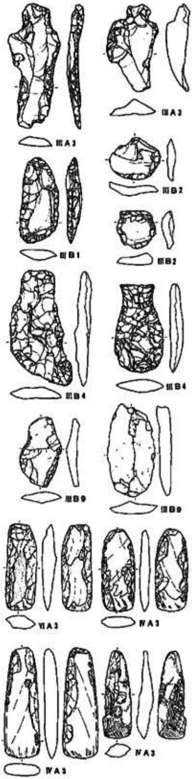
9：今後分類を必要とするもの

B：石のみ

1：刃部が直線的なもの

2：刃部が弧状のもの（丸のみ形石斧）

8：破片など



石器分類模式（その2）

9：今後分類を必要とするもの

<Ⅴ　群>　たたき石、台石類

A：たたき石

1：棒状の一端、もしくは両端にたたき痕がみられるもの

2：扁平礫の周辺にたたき痕がみられるもの

3：扁平礫の腹、背面にたたき痕がみられるもの（くぼみ石と称されるものを含む）

4：円礫状のもの

8：破片など

9：今後分類を必要とするもの

B：台石（石器製作、その他の作業でテーブルとなったもの、出土状態などの状況証拠を重視）

1：平坦面に使用痕がみられるもの

8：破片など

9：今後分類を必要とするもの

<Ⅵ　群>　すり石、石皿類

A：すり石

1：断面がすみまる三角形の礫の稜をすったもの

2：扁平礫の側縁をすったもの

3：扁平礫を半円状に粗く打ち欠き弦をすったもの

4：北海道式石冠と称されるもの

5：円礫状で、すり面が曲面のもの

8：破片など

9：今後分類を必要とするもの

B：石皿（すり面のあるもの）

1：平坦面に広くすり面がみられるもの

8：破片など

9：今後分類を必要とするもの

<Ⅶ　群>　石鋸、砥石類

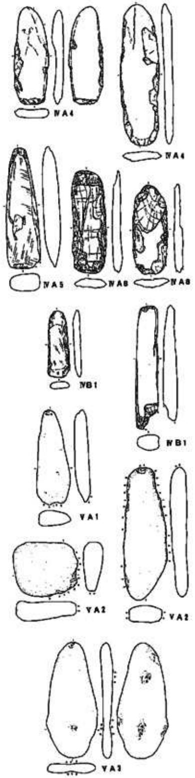
A：石　鋸

1：石鋸（刃部が直線状になるもの）

8：破片など

9：今後分類を必要とするもの

B：砥　石



石器分類模式（その3）

1：研磨面に溝があるもの

2：板状のもの（破損したものが多い）

3：角柱状のもの（4面を使ったものが多い）

8：破片など

9：今後分類を必要とするもの

＜Ⅷ 群＞ 石錘類

A：石 錘

1：打ち欠きを4か所にもつもの

2：長軸の両端に打ち欠きをもつもの

3：短軸の両端に打ち欠きをもつもの

8：破片など

9：今後分類を必要とするもの

＜Ⅸ 群＞ 石核・剥片類

A：石核（剥片石器の素材となる原石等も含む）

B：剥片・砕片

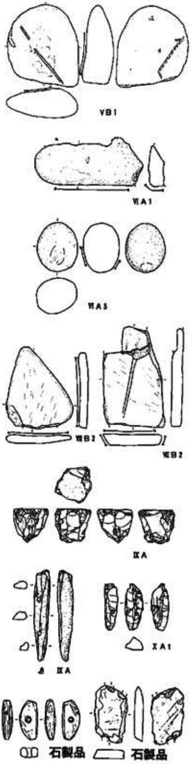
＜Ⅹ 群＞ 加工痕、使用痕のみられる剥片・礫など

A：加工痕、使用痕のみられる剥片

1：剥片に加工痕がみられ、今後、分類を必要とするもの（定形的な石器としては認定されていないもの。彫器、ピエス・エス・キーユと呼称されるもの。それらの削片などを含む。）

2：剥片に使用痕がみられるもの

B：礫に加工痕、使用痕がみられ、今後、分類を必要とするもの。



石器分類模式（その4）

Ⅳ　遺構と遺構出土の遺物

1．炭焼窯跡（図Ⅳ－1、図版Ⅳの1～4）

調査区N－74－cに位置している。耕地造成のときに埋められた小さな沢の傾斜面に接して作られている。炭化室の平面形は、長方形の一辺が張り出した形で、煙道は奥壁の中央部に1か所ある。規模は焚き口から奥壁まで4.1m（約13.5尺）、奥壁の幅2.6m（約8.6尺）、焚き口の幅0.8m（約2.6尺）である。

粘質土を掘り込んで作られており、平坦な床と側壁とは、燃焼にともなう焼結により非常に堅固である。天井崩落後、耕地となったときに投げ込まれたと考えられる礫が、奥壁に近いところの3層中からまとまって出土した（図版Ⅳの2）。この円礫や角礫の混じった礫群には縄文時代のものと考えられる石斧や黒曜石・片岩なども含まれていた。

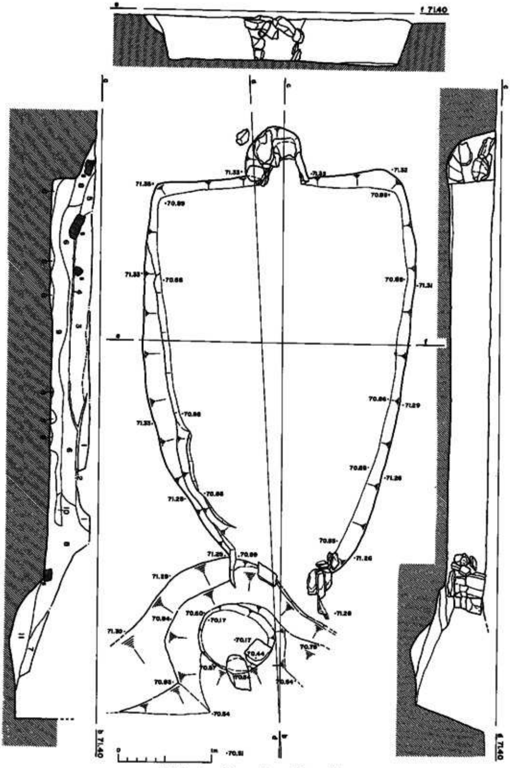
焚き口と煙道は、珪岩の板状礫をつかって構築されている。煙道部分は穴を掘ったあと板状礫を積み上げて煙道の空間を確保し、炭化室との境界は大きな板状礫でふさいでいる。

前庭部の左袖寄りに、円形の土壙を検出した。「水溜」に利用したものと推定される。右袖寄りは、調査区域外にある。また、焚き口の外側7層直上には、カワシンジュ貝の殻皮が投げ捨てられた状態で検出された。さらに、これよりも下位から『大日本麦酒株式会社製造』の銘をもつガラス瓶が出土した（図Ⅳ－2、図版Ⅳの4）。

このガラス瓶は、少量の気泡を含んでいるが無色透明で、容量は0.36リットルである。肩には『DNB』の文字を図案化したものが3か所、底部には『五稜星』を図案化したものと『4』の文字とがある。『大日本麦酒株式会社』の系譜に連なるサッポロビール株式会社総括事業部の鈴木省二氏の御教示によれば、この瓶は清涼飲料『シトロン』用のものという。『大日本麦酒株式会社』は1906年（明治39年）～1949年（昭和24年）に使用された社名で、シトロンの製造販売は1909年（明治42年）に始まった。『五稜星』は開拓使の官営工場以来使用されているものという。『DNB』は『大日本麦酒』の略称である。

同社の『ビール博物館』の資料をみると、『シトロン』瓶の形や色調・銘などには年代によっていくつかの種類がある。また『五稜星』や『DNB』を含む銘の図案も時代により微妙に変化しているが、それぞれの新旧はよく分かっていないため、今回出土した瓶の年代を明らかにすることはできない。

註．炭焼窯各部分の名称は、紺谷憲夫・山本雄三・小山成基　1975「炭焼き技術と焼き子」、『北海道の伝統的生産技術に関する調査　－昭和49年度中間報告－』（『北海道開拓記念館調査報告』第10号）によった。



図Ⅳ－1　炭　焼　窯　跡

層　位

1層：耕作表土
2層：明黄褐色粘質土
3層：塊状粘質土と黒色土が混る。埋め戻された土。
4層：炭化物の薄層
5層：樹木根による撹乱部分
6層：粘質土と黒色土が混る（天井が崩落したもの）
7層：焼土・炭化物混じりの軟質黒褐色土
8層：粒状赤褐色土と黒色土が混じる
9層：焼結土の塊（天井が崩落したもの）
10層：焼結土
11層：青灰色砂質土（川砂か）

図Ⅳ－2　炭焼窯跡の出土遺物

2．チャシ跡（図Ⅳ－3～6）

発掘されたチャシ跡は水田造成によって大きく削平されているが、壕のほか柵列とみられる柱穴が検出された。このチャシ跡に伴うことが明確な出土遺物は鉄鍋片2点である。このほかに本遺跡では、金属製品・陶磁器など出土しているが、多くは明治時代以降のものと考えられる。

チャシ跡は、石狩川左岸の段丘崖と石狩川に開口する沢にはさまれた標高71mほどの台地の先端部に立地している。チャシ跡付近での台地の幅は30mほどである。

現在、この台地は水田として利用されている。開墾以来畑作が営まれていたが、昭和30年代後半になると石狩川からの揚水が可能になり、小区画の水田が営まれるようになった。とくに昭和43年以降の圃場整備では、沢の一部を埋めて水田の大型化を行い、現在の土地利用状況となった。

調査区が水田であったことから、調査の開始にあたって排水のため台地東端部を深く掘り下げたところ、黒色土の落ち込みを発見した。西端部では農道のため切り取られた崖面に、深さ1mほどの黒色土の落ち込みがみられた。さらに旧水田の床土を掘り下げたところ、K－83区からM－84区へ続く台地先端部を区画した一条の壕の輪郭が捉えられたため、チャシ跡であると判断するに至った。

チャシ跡の西側と東側の一部は農道造成のため削られており、旧時は今より幾分広かったもの（注）と考えられる。

壕：チャシを区画する一条の壕の西端近くには、主体部への入口（チャシアパ＝chasi-apa：チャシの入口；宇田川洋　1980）と考えられる幅0.9mの橋状の部分（「橋状遺構」；後藤秀彦1980）がある。したがって、東西2つの壕で構成されていることとなる。以下、東壕・西壕と呼ぶ。

西壕は長さ3.5m、深さ1mほどである。壕底はほぼ平坦で、横断面の形は上方がひらくU字状である。また、崖方向にいくにしたがい、上幅が広くなるとともに壕底も傾斜している。この壕西端の主体部側の肩のところで、鉄鍋片（図Ⅳ－6の2）1点が出土した。

東壕は弧状で、長さ22.1m、最大深（東端部）1mである。橋状遺構から直線状に13mほど続き、崖にむかって弧を描いている。台地中央部は造田のため著しく削平されており、30～35cmの深さを残すのみである。旧地表面からの壕の深さは、西端でみると1mほどあったものと考えられる。横断面形は、ほぼ平坦な底部から緩やかに壁が立ち上がるU字形になっている。壕底には多少の凹凸が認められるが、橋状遺構付近から東にいくにしたがって徐々に高くなっている。そして、弧を描き始める部分でピークとなり、崖にむかってまた低くなっている。

壕底の等高線からみて少なくとも7段階の掘削工程が想定される。これに西壕を加えると、このチャシの壕の掘削には少なくとも8工程があったと考えられる（図Ⅳ－5）。掘削方向については捉えることができなかった。

東壕東端の底部から鉄鍋片1点（図Ⅳ－6の1）が、礫の上にのった状態で出土した（図Ⅳ－3、

図版Ⅳの9)。

(注) 重機で水抜き溝を掘削したところ、壕壁の一部を掘りとった。図Ⅳ—3の破線はこれを復元したものである。

土層:壕内の土層堆積状況はa～dの4ヵ所で観察した。b～dは水田下で、グライ土壌化が進んでおり、発掘当初は全体に強い青味をもっていた。それぞれについては細分されるが、基本的には壕東端(畦畔として残る部分)のaの土層と同様である。

1層 茶褐色土が主体で、2層との間に黄褐色ローム質土を挟んでいる。

1′層 水田床土の黒色土。この上面に造田の際のものとみられる重機のキャタピラー痕があった。

2層 暗茶褐色ないし茶褐色土で、3層との間に炭化物の間層がある。畑作のための整地時に埋没したものと考えられる。炭化物層は、開墾時の野焼きによって形成されたものであろう。

3層 黒色腐植土。しまりがある。

4層 茶褐色土。しまりがある。

5層 暗黄褐色ローム質土。底部には灰色砂がたまっている。

台地西半には、1′層上位に現在の水田面に相当する黄褐色ロームが厚く堆積していた。内園地区開墾時からの畑作(2層)、昭和30年代後半の水田化(1′層)、昭和43年以降の圃場整備の経過が土層の観察からもあとづけられる。したがって、3層上面が開墾以前の地表面と考えることができ、開墾時には窪みとして壕が残っていたものと推定される。これは、西壕中央に暗渠の排水パイプが埋設されていたことからも窺える。また、壕内からも縄文時代の遺物が出土しているが、すべて3層より上位にあったものである。

柱穴様ピット:チャシ跡主体部に、13個の柱穴様小ピットが検出された。これらのうち水田部分にあったSP—2～7・13は、上部が削られていた。とくにSP—3～6は、径5㎝ほどの痕跡しか残っていない。覆土は黒褐色土が主体である。断面形はSP—10・13を除き、先端が尖っている。杭状の木を打込んだものと考えられる。

SP—1～10は壕に沿って並んでおり、柵列跡の可能性が高い。削平されたものもあるとみられることから、個々の間隔を知ることはできないが、SP—7～10はほぼ1.4mの間隔である。SP—1～6列の西端とSP—7～10列の東端は約1mの間隔をおいて平行している。ここには橋状遺構につらなる通路があった可能性が考えられる(図Ⅳ—5)。

チャシ跡出土遺物:ここでは、チャシ跡で出土した2点の鉄鍋片のほか、M—85区斜面(チャシ跡東段丘崖)や沢地区などで出土した金属製品・陶磁器を一括して説明する。

鉄製品(図Ⅳ—6)

鉄鍋片(1～4) 1はチャシ跡の東壕東端の底部から出土した。胴部から底部にかけての破片。底径は推定で33.4㎝、胴部の厚さ0.5㎝。底部は丸味をもち、中心にむかって厚くなっている。底部の最大厚は0.6㎝。湯口や足部分は残っていない。2はチャシ跡西壕の肩部分で出

土した。胴部から口縁部にかかる部分で、明瞭な段差がある。厚さ0.5㎝。1・2は厚さや胴部のカーブからみて、同一個体の可能性がある。3・4はM—85区斜面出土のもの。厚さ0.3㎝、1・2に比べ薄手のものである。3は破損した吊耳部。中央に径1.6㎝の孔がある。破損後にあけられたものとみられる。4は口縁部破片。3・4はチャシ跡に伴うものか否かは不明である。

釣針(?)(5)M—84区斜面から出土。径0.3㎝ほどの鉄くぎ状のものを釣針状に曲げているもの。先端は、切断したうえ尖らしているようにみえる。チャシ跡に伴うものか否かは不明。

その他の出土遺物

上記のほか金属製品には、M—83—bの旧水田床土から出土したキセルの吸口(6)や沢地区から出土した蹄鉄(7)・農具の握り部分(8)などがある。明治以降のものであろう。

陶磁器(図Ⅳ—7)はM—85区斜面や沢地区で出土したものが多い。型紙や銅版による「印判手」といわれるものがほとんどである。三平皿(1)や飯茶碗(6〜9)、碗(3・4・10)の類が多い。ほかに蓋(2)・徳利(11)・すり鉢(12)・蒸留瓶(13)の破片がある。これらも、明治以降のものとみられる。

金属製品の保存処理について

金属製品の一部について、保存処理を以下の手順で行なった。

1.処置前の調査:実測、写真撮影による現状把握。泥・銹の付着が著しく、現状把握の困難なものについてX線撮影を行なった。

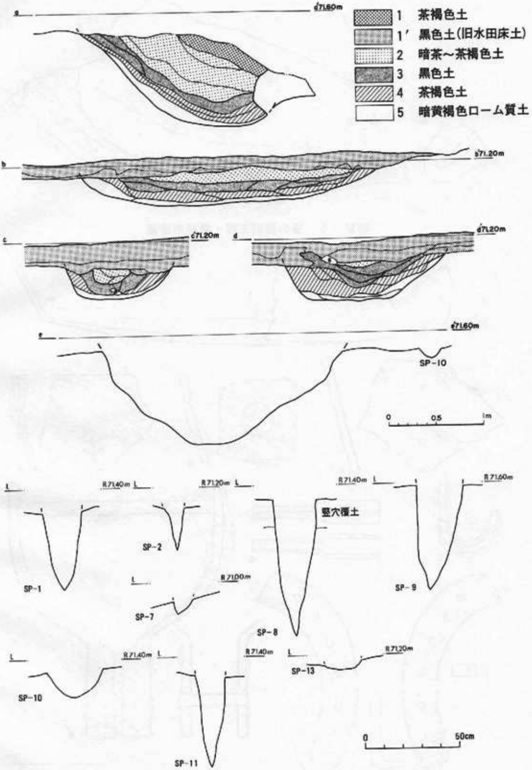
2.クリーニング:機械的方法(ニッパ・タガネ・彫刻機などを使用)とエチルアルコール洗浄による泥・銹の除去。

3.強化:アクリル樹脂エマルジョン(商品名:プライマルMV—1)の真空ポンプによる減圧含浸。余分な樹脂の除去および常温乾燥。なお今回は、樹脂含浸・乾燥後、防銹剤のベンゾトリアゾール入りアクリル樹脂(インクララック)を塗布した。キセルの吸口は、インクララックの塗布のみである。

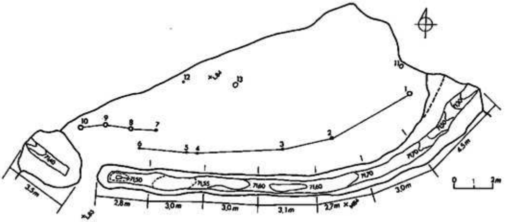
4.処置後の調査:実測図の補正・写真撮影による処置後の記録作成。

処置を行なった遺物はシリカゲル入り密閉容器で保管している。

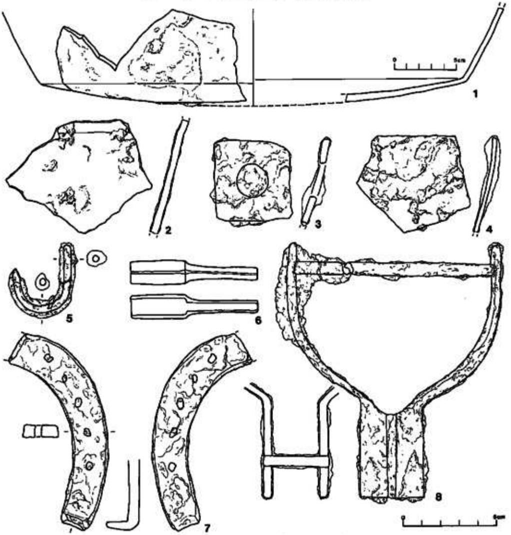
(金属製品の保存処理工程については、三浦正人「金属製品の保存処理について」『ユオイチャシ跡・ポロモイチャシ跡・二風谷遺跡』1986を参照)。



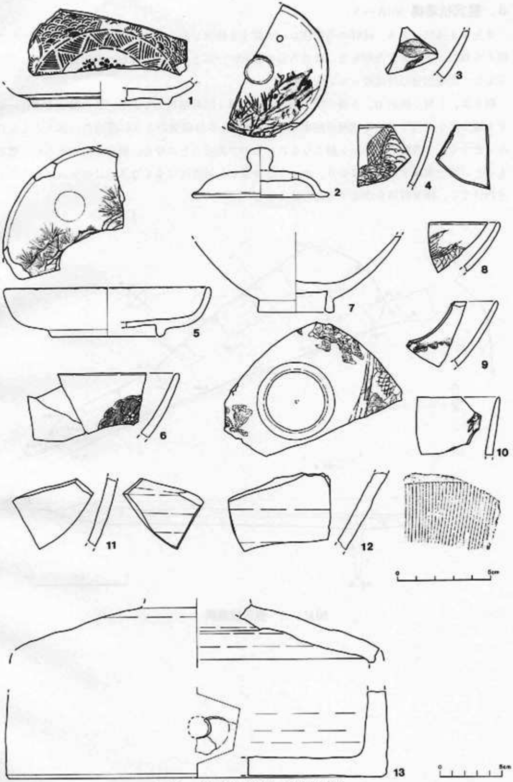
図Ⅳ—4 壕の土層断面・壕および柱穴の断面



図Ⅳ－5　壕の掘削工程・柵列の位置



図Ⅳ－6　出土遺物（金属製品）

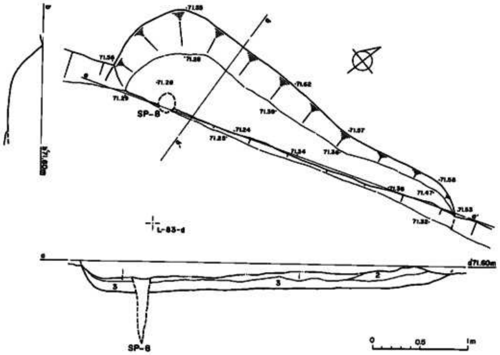


図Ⅳ－7　出土遺物（陶磁器類）

3．竪穴状遺構（図Ⅳ－8）

チャシ主体部にある。畦畔の黄褐色ローム質土を除去したところ、黒色土が残る窪みとして捉えられた。平面形が方形あるいは長方形の竪穴の一部と考えられるが、水田造成によって削平され、北壁部分以外は残っていない。

覆土は、1層：黒色土、2層：暗茶褐色土、3層：暗黄褐色土である。この覆土をSP－8が1層上面から切っている状況が捉えられた。SP－8は前述のように柵列の一部と考えられることから、この竪穴はチャシ跡よりも古いものであることになる。竪穴を仮に正方形と想定すると、壕と重複することになり、チャシと併存した可能性はなくなる。この竪穴からの出土遺物はなく、構築時期を決定することはできない。



図Ⅳ－8　竪穴状遺構

Ⅴ 遺　　物

1．土器（図Ⅴ－1～5、図版Ⅴの1～3）

中地区の斜面と東地区から1,840点の土器片が出土した（図Ⅴ－4・5）。内訳は、縄文時代中期5点、晩期1,381点、続縄文時代33点、擦文時代75点、不明346点で、縄文晩期のものが75%を占める。小片が多く、器形を復原することができたものはわずかである。

縄文中期の土器（図Ⅴ－1－1～5）

1は横走する縄文が施されたもので、口唇部には縄の圧痕がある。胎土には小礫・砂粒を多量に含む。3は半截竹管状工具によると思われる細い沈線が放射状に施されている。4は肥厚部に縄の圧痕がつけられ、その直下には無文帯がある。5は底部円板のまわりに粘土を巻きつけたもので、無文である。これらは、中期後半の土器と思われる。

縄文晩期の土器（図Ⅴ－1－6～35、図Ⅴ－2、図Ⅴ－3－63～68）

深鉢形土器・浅鉢形土器が多く、舟形土器・壺形土器も少量出土した。

晩期中葉から後葉にかけてのものがほとんどである。

深鉢形土器（6～36）

縄線文をもつもの（6～20）　6は短刻線の下に縄線文や縄端圧痕文がみられるもので、口唇部には縄の圧痕がある。7・8はやや太い縄線文が口縁に平行して施文されている。これらは、縄線文をもつもののうちでも若干古い時期のものであろう。

9は縦位の縄線文と横位の縄線文が組み合わされたもので、それらの下には縄端圧痕文がある。口縁部の断面形は四角形で、爪によると思われる刻み目が密につけられている。10の縄線文は曲線状である。11～20は口縁に平行な縄線文が施されたものである。口唇部には、刻み目(11・13・14)、縄の圧痕(15～18)、撚糸の圧痕（19）がみられる。12は内面が磨かれている。13は内面にも縄文が施されている。14はゆるやかな波状口縁をもつものと思われる。15は口縁部に縦位の突起が張り付けられている。16～18は縄文をすり消した後に縄線が施文されたものである。17・18は同一個体である。17は口縁部に縦位の細い刻み目がつけられており、横位の縄線文の下には山形の縄線文がある。18の内面には3本一組の細い沈線で山形文が施されている。

刺突文をもつもの（21）　先の丸い工具を使用して、二段の刺突文が施されている。

沈線文をもつもの（22～25）　22は地の縄文をすり消した後に3条の浅い平行沈線を施文したものである。口唇部には刻み目がある。23・24は無文地に曲線的な文様を施したものである。23の文様は弧線文の一部かもしれない。23の口唇部には縄端圧痕、24には刻み目がある。25は縄文地に曲線的な文様が描かれている。

縄文のみのもの（26～36）　縦走気味の細かい縄文をもち、口縁部の断面形は四角形のものが多いようである。26・27・31・34・35は内面が磨かれている。28・31は口唇部に刻み目がある。29・30は小型・薄手の土器である。32の口唇部には二列の刻み目の間に縄線文が施されて

いる。36は大型の土器の胴部で、肩部が張っている。内面の調整は粗雑で、凹凸が激しい。

浅鉢形土器（37～55）

直線的に立ち上がる器形で、外面は縄文のみ、口唇部や内面に縄の圧痕（38・51・52）、刻み目(39・40・44・47・48・55)、縄文(43)、縄線文(45・49)、沈線文とそれらを組み合わせた文様のつけられたもの（46・50・53・54）が多い。46・53・54は扁平な突起をもつ。内面がみがかれたもの（37・42・47）や調整痕の残るもの（45・46・48）がある。

37は口唇部が平らに調整され、内面はみがかれているが、指おさえのあとも残っている。38～40は口縁端部が肥厚するものである。38は口縁が折り返されている。39は口唇部に外面と内面の両方から刻み目が施されている。口縁部には2個の貫通孔がある。40は口縁部に突起があり、突起上には先の丸い工具による刺突文がある。41は皿状の器形になると思われるもので、口縁直下の1.5㎝ほどは無文である。42は口縁部の断面形が切り出し状になっている。43・44は大型の浅鉢と思われる。43は内面にも縄文が施されている。45は口唇部に格子目状の縄線文がある。内面は丁寧に調整されている。47は口縁部が直立する小型の土器である。49は内面に3条の縄線文が施されているが、その下には縄文がまばらにあるようである。50は内面に4条の縄線文を施した後、縦方向の沈線を配したものである。51は口縁直下が2㎝ほど無文になっている。53の内面には波状の沈線文がみられる。54は突起部分の内外面に沈線文が描かれている。55は無文で、貫通孔が穿たれている。

壺形土器（56）

細かい縄文の施された肩部の破片が1点出土している。薄手で、内面には凹凸がある。

舟形土器（57～60）

57・58は縦長の突起が貼り付けられたものである。57の突起上には貫通孔が穿たれており、口唇部の内面側には短い沈線がある。突起の左右には平行沈線がめぐる。胴部のくびれた部分は無文になっている。58は突起のわきに縄線文と貫通孔がみられる。口唇部には縄の圧痕がある。59はV字をさかさにしたような形の突起が貼り付けられている。突起のつけねの部分に貫通孔がある。60は上げ底状の底部に沈線で斜格子状の文様が描かれている。

61～68は底部の破片である。61は無文地の胴部に刺突文がつけられたもので、底部にも放射状に刺突文がある。62～66、68は底部に縄文が施されたものである。62・63は平底で、63のたちあがりの部分は無文になっている。64・65・68は丸底気味になると思われる。66は胴部と底部の境目に縄の圧痕が施されている。67は無文で、胴部と底部の境目が外側に張り出している。68は底の中央部付近に縄文がわずかにみられる。胴部と底部の境目には刺突文がある。内面は調整され、平滑になっている。

続縄文時代の土器（図Ⅴ－3－69～77）

69～73は撚糸文の施された土器である。69・70は同一個体、中地区の斜面から出土した。ほぼ直線的に立ち上がる器形の土器と思われる。69はゆるやかな波状口縁をなす。口縁には平行する撚糸文が2条めぐり、その下は撚糸文が全面に施文されている。口唇部にも撚糸文がある。

71は上げ底になっている。これらに類似したものは、夕張郡栗山町鳩山第2地点（野村 1964）から出土しており、宇津内Ⅱa式に併行するものと思われる。

74～76は口縁がほぼ直立する器形で、無文地に断面三角形の微隆起線が縦横につけられており、それらの間には横位の縄線文がある。口縁部の断面形は三角形である。75は口縁部に山形突起があり、その上には微隆起線で楕円形文がつけられている。これらは宇津内Ⅱb式に相当するもので、空知地方では初の出土例と思われる。類例は、稚内市オンコロマナイ貝塚（大場・大井編 1973）や礼文郡礼文町東上泊遺跡 ㈶北海道埋蔵文化財センター編 1985）にみられる。77は無文の底部で、高台をもつものである。

擦文時代の土器（図Ⅴ－3－78～86）

深鉢形土器が出土している。内面は、みがかれた後に黒色処理のなされたもの（78・79・82・83）が多い。

78は口縁部が大きく外反するもので、外面には右下がりの粗いハケ目が施されている。79は内外面ともみがかれている。80は口縁部の隆帯上に先のとがった工具で沈線をひいたものである。頸部には縦方向のハケ目がある。内面はナデ調整と思われる。81は口縁部の沈線の内部に刺突文があり、その下には細い横走沈線をめぐらした後に斜位あるいは縦位の沈線を配している。内面調整はミガキである。82は胴部下半が欠損した甕形土器で、中地区の斜面からほぼまとまった状態で出土した。器形はゆるやかに外反しながら立ち上がり、口縁部はやや内彎している。口縁部には3条の沈線がめぐり、その内側にはヘラ状工具による刻み目が並ぶ。主体となる文様は、横走する多数の浅い沈線上に2ないし3本一組の縦位の沈線と斜位の短い沈線を加えたものである。文様帯の下部にはヘラ状工具による刻み目が2列ある。胴部の調整は、磨滅のためはっきりしないが、ナデと思われる。内面は、横方向のミガキがなされた後、黒色処理が行われているようである。83は2本一組の沈線で曲線的な文様が描かれ、その下部には刻み目がある。84の外面は縦方向にみがかれている。85は外面に縦方向のハケ調整がなされ、内面は横方向にハケ調整を行った後、黒色処理が行われている。86の調整は磨滅と剝離のために不明である。底部に葉脈らしいものの圧痕がみられる。

これらは、宇田川洋氏の編年（宇田川 1980）の中期後半に相当するものが多く、一部に後期の資料がある。

引用文献

宇田川洋 1980 「7 擦文文化」（野村崇・菊池俊彦編『北海道考古学講座』、みやま書房）

大場利夫・大井晴男編 1973 『オンコロマナイ貝塚』（『オホーツク文化の研究』1、㈶東京大学出版会）

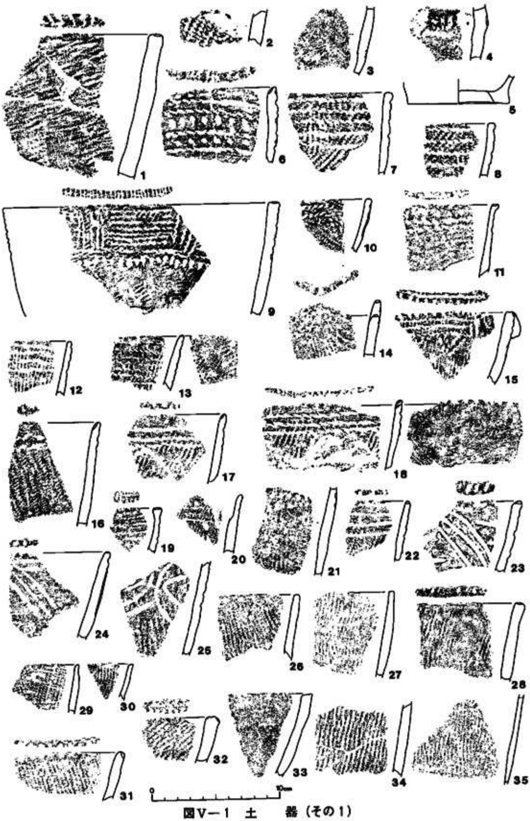
野村 崇 1964 「第2部 栗山町鳩山遺跡発掘調査報告」（栗山町社会科サークル編『栗山町の文化財―北海道夕張郡栗山町の遺跡― ―北海道夕張郡栗山町の文化財―』、栗山町教育委員会）

㈶北海道埋蔵文化財センター編 1985 『礼文島幌泊段丘の遺跡群 東上泊・上泊3・上泊4遺跡―

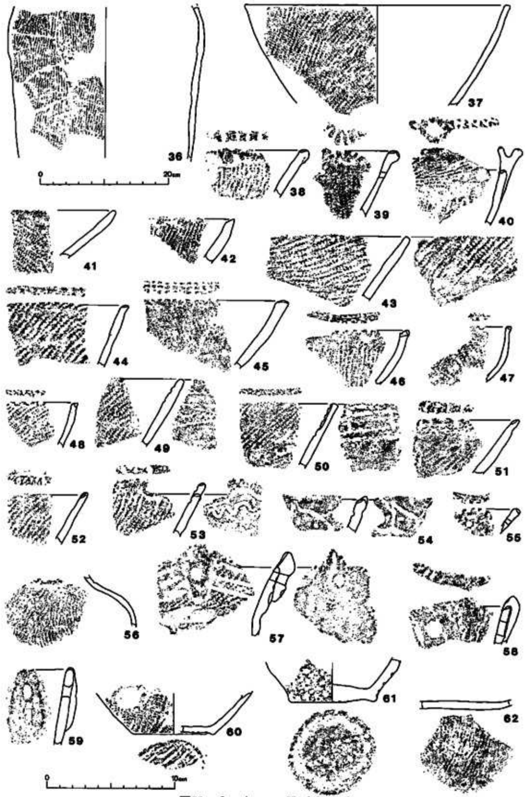
道々礼文島線特改一種工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告―』『㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告書』第19集）

番号	分類	発　掘　区	備　　考	番号	分類	発　掘　区	備　　考
1	Ⅰ群	L―80―b		44	Ⅱ群	L―80―b	内・炭化物付着
2	〃	M―76、N―76		45	〃	M―81―d	
3	〃	M―79―d		46	〃	L―81―b	
4	〃	M―70―d		47	〃	M―80―a	
5	〃	L―81―b		48	〃	L―81―a	
6	Ⅱ群	N―77―a		49	〃	L―80―d	
7	〃	L―81―b	内・炭化物付着	50	〃	K―74―a	
8	〃	L―80―d		51	〃	K―81―b	
9	〃	L―78―c		52	〃	K―81―b	
10	〃	L―80―d		53	〃	K―80―c	
11	〃	K―83―b		54	〃	N―77―a	
12	〃	L―80―d		55	〃	L―81―a	
13	〃	M―78―d	内・炭化物付着	56	〃	L―81―a	
14	〃	N―77―a	外・炭化物付着	57	〃	M-76、N-76、N-77	
15	〃	M―80―d		58	〃	M―81―a	
16	〃	M―78―a	内・炭化物付着	59	〃	L―76―c	
17	〃	M―80―d		60	〃	M―76、N―76	
18	〃	M―80―d		61	〃	M―81―d	
19	〃	L―81―b		62	〃	M―80―d	
20	〃	N―77―a		63	〃	M―80―a	
21	〃	J-79-d、J-80-a		64	〃	K―81―b	
22	〃	K―78―a		65	〃	M―80―a	
23	〃	N―77―a		66	〃	K―75―c	
24	〃	M―80―d		67	〃	M―76、N―76	
25	〃	M―76、N―76		68	〃	L―81―a	
26	〃	L―81―a	内・炭化物付着	69	Ⅲ群	N―77―a	内・炭化物付着
27	〃	L―81―b		70	〃	N―77―a	内・外・炭化物付着
28	〃	N―77―a		71	〃	K―81―b	内・炭化物付着
29	〃	L―80―b		72	〃	M―80―d	内・炭化物付着
30	〃	L―80―b	内・炭化物付着	73	〃	M―76、N―76	
31	〃	M―81―a		74	〃	M―81―d	
32	〃	M―80―a		75	〃	M―81―d	
33	〃	J―80―c		76	〃	M―81―d	
34	〃	L―80―d		77	〃	L―80―d	
35	〃	J―79―a		78	Ⅳ群	M-76、N-76、N-77	
36	〃	M―76、N―76		79	〃	M―76、N―76	
37	〃	L―80―d		80	〃	K―80―d	
38	〃	N―76―b		81	〃	L―85	
39	〃	L―80―d		82	〃	M―76、N―76	
40	〃	M―81―a		83	〃	L―78―d	
41	〃	L―80―d		84	〃	K―70―d	
42	〃	M―81―a	外・炭化物付着	85	〃	J―80―a	
43	〃	M―81―a		86	〃	J―80―b	

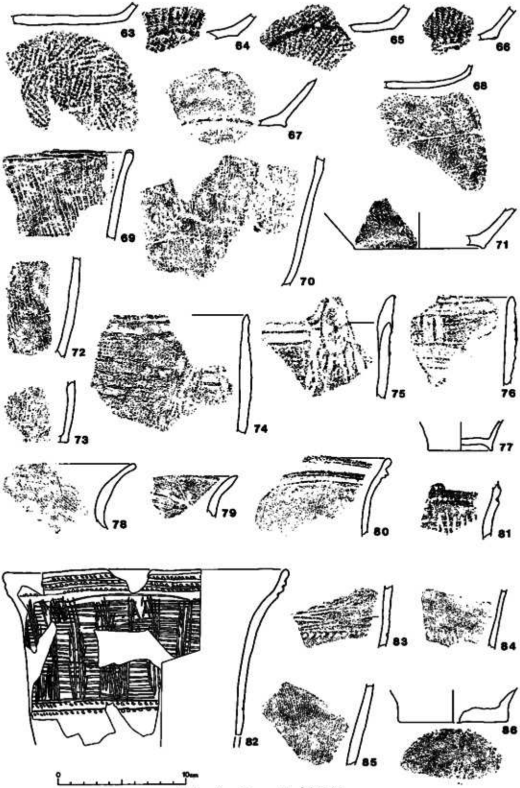
表Ｖ－１　掲載土器一覧表


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
0
10cm

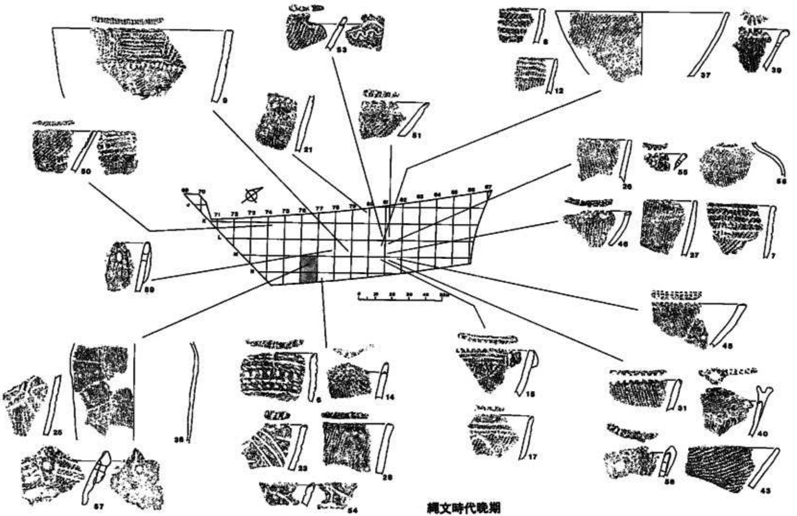
図V－1　土　　器（その1）


36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62

図V－2　土　　器（その2）


63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
0
10cm

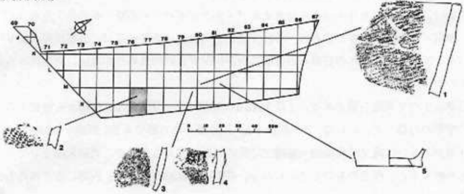
図V－3　土　　器（その3）



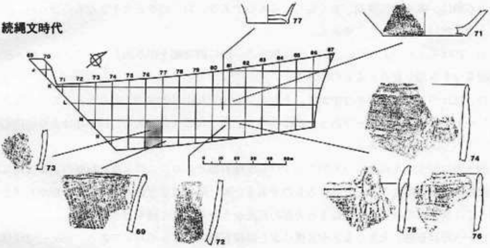
縄文時代晩期

図V−4　土 器 の 分 布（その1）

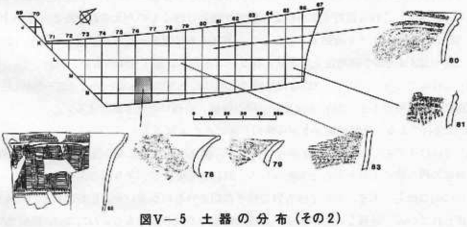
縄文時代中期



続縄文時代



擦文時代



図V－5　土器の分布（その2）

2．石器等（図V－6～28、図版Vの4～14）

石器は、石鏃・石きり・つまみ付きナイフ・スクレイパー・石斧・石のみ・たたき石・すり石・砥石・台石・石皿などである。その分類ごとの数量は表V－2に、分布状態は図V－29～33に示してある。いずれの石器も包含層の残存状況が比較的良好な中地区、東地区から出土したものが多い。

石鏃はすべて黒曜石製である。1はⅠA2bに分類した石鏃である。形態から推定すると縄文時代早期の石器と考えられる。2～37はⅠA3に分類した石鏃である。形態から推定すると縄文時代前期あるいは縄文時代晩期～続縄文時代の石器と考えられるが、周辺に出土している土器から判断すると、後者のものと考えられる。基部は直線的なものと、内側にえぐれたものとがある。

38～43はⅠA4に分類した石鏃である。44～62はⅠA5に分類した石鏃である。このような形態の石鏃は、縄文時代晩期に多く見られるものである。44、45などの小さなものから61、62のような比較的大きなものまである。

63～70は石きりである。63、64、66は剥片の一部に刺突部を作り出したもの、65、67～80は明瞭なつまみ部が見られるものである。

71、72はつまみ付きナイフである。ともに二次加工が片面の周辺に見られるものである。

73～170はスクレイパーである。73は石べらと称されるものである。74～79はまる形のもので、すべて黒曜石製である。

80～99は幅広い茎部をもつもので、すべて黒曜石製である。このような形態の石器は縄文時代晩期～続縄文時代に多くみられるものである。80、81、87などのように刃部の形が左辺と右辺とでは異なっており、使用による刃部の減退をうかがわせる例もある。

100～159は形態、大きさなどが変異に富む黒曜石製のスクレイパーである。160～162は珪岩製である。163～170は安山岩の剥片の周辺を二次加工したものである。

171～234は石斧、石のみである。ここには製作途中の破損品と思われるものも含めて図示した。174、178、234は小さく、幅が狭いことから石のみに分類した。石斧は片岩や泥岩で作られたものが多く、これらは打ち欠きによる整形が顕著に残るものが大多数である。193～195、218、227は素材礫を大きく変形することなく、刃部のみに磨きが見られるものである。209～217、219～223は刃部の研磨仕上げが見られないことから、加工途中のものと判断した。

235～241はたたき石である。237は棒状礫の一端にたたき痕があり、236、239～241は扁平礫の周辺にたたき痕がある。235、238は扁平礫の腹面、背面にたたき痕がある。

242は台石である。比較的扁平な河床礫の一面にたたき痕がある。

243、244はすり石である。243は破片であるが、縄文時代早期に多く見られる断面がすみまる三角形の礫の稜をすったものと判断される。244は円礫状で、すり面が曲面をなしている。

247～260は砥石である。すべて砂岩製で粒子の細かいものが多いが、比較的粒子の大きなものも使われている。破損したものが多い。板状のものが大多数である。247、254、255、260は

比較的厚手のものである。

261～272は石核類である。すべて黒曜石で、打面や打点などが明瞭に認められるものと不明瞭なものがある。それぞれの最終的な剝離面と見なされる部分は、いずれも小さい。

273～280は黒曜石の棒状原石である。角柱状で、ざらざらした礫表皮が残っている。273、274のように剝離面が広く見られるもの、277のように両端に剝離面が残るもの、そのほかの顕著な剝離がないものなどがある。

281はピエス・エス・キーユである。上下両端からの微細な剝離が見られる。

282は滑石製の垂飾である。両面からの穿孔が認められるもので、全面がていねいに研磨されている。

283は片岩に類似した板状の滑石である。糸懸け用の孔がないので垂飾とは考えられない。扁平な両面には仕上げの研磨痕としては深すぎる擦痕（条痕）があり、上辺下辺の４か所に穿孔の痕跡が残っている。

名称・分類	点数	名称・分類	点数	名称・分類	点数
石鏃ⅠA2	1	石斧ⅣA3	43	砥石ⅦB3	2
3	36	4	5	8	2
4	6	5	2	石核Ⅸ A	48
5	19	8	59	黒曜石棒状原石	8
8	108	石のみⅣB1	4	剝片Ⅸ B	
石錐ⅡA1	3	たたき石ⅤA1	5	片岩	1,628
3	5	2	4	黒曜石	11,663
つまみ付きナイフⅢA3	2	3	2	安山岩	50
スクレイパーⅢB1	1	台石ⅤB1	1	珪岩	43
2	6	すり石ⅣA1	1	頁岩	36
4	20	5	1	石製品	2
8	641	石皿ⅥB1	1		
9	288	砥石ⅦB2	12		

表Ⅴ－２　石器等の分類別点数

番号	名　称	分類	発掘区	大きさ（cm）	重さ(g)	材　質
1	石　鏃	ⅠA2b	M-82-a	1.9 × 0.6 ×0.2	0.2	黒曜石
2	〃	ⅠA3	M-82-b	(1.9)× 1.3 ×0.4	(1.0)	〃
3	〃	〃	M-75-a	2.2 ×(1.1)×0.2	(0.6)	〃
4	〃	〃	N-75-a	(2.7)× 1.5 ×0.3	(1.5)	〃
5	〃	〃	L-76-a	3.0 × 1.8 ×0.3	1.7	〃
6	〃	〃	K-76-c	3.7 × 1.3 ×0.2	1.3	〃
7	〃	〃	L-74-a	2.8 ×(1.4)×0.4	(1.0)	〃
8	〃	〃	N-74-c	(3.2)× 1.4 ×0.4	(2.6)	〃
9	〃	〃	M-73-d	(3.6)× 1.9 ×0.5	(2.9)	〃
10	〃	〃	L-83-d	2.0 × 1.1 ×0.4	0.5	〃
11	〃	〃	K-78-b	2.0 × 1.2 ×0.3	0.6	〃
12	〃	〃	L-81-a	2.3 × 1.2 ×0.2	0.5	〃
13	〃	〃	L-83-c	2.2 × 1.0 ×0.2	(0.5)	〃
14	〃	〃	J-76-b	2.6 × 1.4 ×0.3	0.8	〃
15	〃	〃	N-74-c	2.7 × 0.9 ×0.3	0.5	〃
16	〃	〃	J-76-c	3.6 × 1.2 ×0.3	(0.8)	〃
17	〃	〃	L-76-c	1.9 ×(1.5)×0.4	(0.9)	〃
18	〃	〃	M-75-b	2.4 × 1.2 ×0.4	1.1	〃
19	〃	〃	K-76-c	3.1 × 1.3 ×0.3	1.2	〃
20	〃	〃	L-75-d	(2.3)× 1.4 ×0.4	(1.6)	〃
21	〃	〃	M-82-c	(1.6)× 1.2 ×0.2	(0.7)	〃
22	〃	〃	L-81-a	(2.0)× 1.1 ×0.2	(0.6)	〃
23	〃	〃	L-76-c	2.5 × 1.5 ×0.4	1.2	〃
24	〃	〃	J-78-c	(2.4)× 1.3 ×0.2	(1.0)	〃
25	〃	〃	M-81-a	2.6 × 1.3 ×0.2	0.8	〃
26	〃	〃	L-81-a	2.8 × 1.4 ×0.4	1.1	〃
27	〃	〃	L-80-d	(3.1)× 1.8 ×0.4	(1.6)	〃
28	〃	〃	M-73-d	2.9 × 1.4 ×0.2	1.0	〃
29	〃	〃	M-76-d	(3.2)× 1.4 ×0.3	(1.4)	〃
30	〃	〃	M-75-a	3.1 × 1.5 ×0.2	1.1	〃
31	〃	〃	J-77-b	2.8 × 1.4 ×0.4	1.0	〃
32	〃	〃	L-81-b	2.2 × 1.3 ×0.2	0.8	〃
33	〃	〃	L-75-d	(3.6)×(1.3)×0.3	(1.3)	〃
34	〃	〃	J-74-b	4.0 × 1.5 ×0.2	1.7	〃
35	〃	〃	K-81-b	4.1 × 1.5 ×0.3	2.3	〃
36	〃	〃	J-77-c	3.6 × 1.6 ×0.4	1.9	〃
37	〃	〃	L-81-b	4.4 × 1.5 ×0.4	2.2	〃
38	〃	ⅠA4	M-76-b	(1.8)× 1.0 ×0.4	(0.5)	〃
39	〃	〃	K-76-c	2.3 × 1.2 ×0.3	0.9	〃
40	〃	〃	L-83-c	2.6 × 1.1 ×0.4	1.0	〃
41	〃	〃	M-76	2.8 × 1.4 ×0.3	1.6	〃
42	〃	〃	M-75-c	(3.1)× 1.4 ×0.3	(1.3)	〃
43	〃	〃	M-74	3.4 × 1.0 ×3.5	1.3	〃
44	〃	ⅠA5	K-76-c	1.3 × 1.2 ×0.2	0.3	〃
45	〃	〃	L-76-c	1.7 × 1.2 ×0.2	0.4	〃
46	〃	〃	M-82-b	(1.8)× 1.3 ×0.4	(0.7)	〃
47	〃	〃	L-83-b	(1.9)× 1.5 ×0.3	(0.7)	〃
48	〃	〃	M-76-d	2.0 ×(1.5)×0.4	(0.7)	〃
49	〃	〃	J-79-d	2.3 × 1.6 ×0.3	1.0	〃
50	石　鏃	ⅠA5	M-82-d	(2.1)× 1.5 ×0.5	(1.1)	黒曜石
51	〃	〃	M-75-b	2.3 × 1.4 ×0.3	0.8	〃
52	〃	〃	K-73-d	2.2 × 1.3 ×0.4	0.7	〃
53	〃	〃	L-81-a	(2.2)× 1.0 ×0.2	(0.3)	〃
54	〃	〃	M-75-d	2.4 × 1.2 ×0.2	0.6	〃
55	〃	〃	L-81-b	2.2 ×(1.2)×0.2	(0.6)	〃
56	〃	〃	K-65-b	2.8 × 1.3 ×0.3	0.8	〃
57	〃	〃	K-78-e	3.4 × 1.4 ×0.3	1.2	〃
58	〃	〃	L-84-a	(2.3)× 1.5 ×0.5	(0.9)	〃
59	〃	〃	L-83-d	(2.1)× 1.3 ×0.4	(0.6)	〃
60	〃	〃	M-81-a	(2.4)× 1.3 ×0.4	(1.0)	〃
61	〃	〃	L-75-b	(2.6)× 1.7 ×0.5	(1.9)	〃
62	〃	〃	M-81-d	(2.6)× 1.4 ×0.4	(1.6)	〃
63	石　鏃	ⅡA1	M-83-a	1.8 × 0.9 ×0.2	0.6	〃
64	〃	〃	M-83-b	2.7 × 2.0 ×0.4	2.3	〃
65	〃	ⅡA3	J-78-c	2.1 × 1.9 ×0.3	1.8	珪　岩
66	〃	ⅡA1	M-78-d	2.9 × 1.8 ×0.3	2.1	黒曜石
67	〃	ⅡA3	M-83-b	2.8 × 2.3 ×0.3	3.6	〃
68	〃	〃	M-75	6.5 × 3.5 ×0.5	27.0	〃
69	〃	〃	K-77-d	(4.3)× 2.9 ×0.6	(8.5)	〃
70	〃	〃	J-79-b	3.4 × 2.1 ×0.2	4.2	〃
71	つまみ付ナイフ	ⅢA3	J-79-b	8.2 × 3.5 ×0.6	16.5	〃
72	〃	〃	L-83	6.2 × 3.5 ×1.0	15.3	〃
73	スクレイパー	ⅢB1	K-76-b	6.5 × 3.0 ×0.8	20.4	〃
74	〃	ⅢB2	M-84	3.0 × 2.9 ×0.9	7.7	〃
75	〃	〃	M-74-d	3.0 × 2.8 ×0.8	9.7	〃
76	〃	〃	J-79-a	2.8 × 3.9 ×0.7	8.5	〃
77	〃	〃	N-75	2.7 × 3.3 ×0.6	5.4	〃
78	〃	〃	K-74	2.4 × 2.8 ×0.6	4.1	〃
79	〃	〃	L-75-b	3.0 × 2.8× 0.7	5.0	〃
80	〃	ⅢB4	N-74-e	8.7 × 4.7 ×0.9	34.1	〃
81	〃	〃	N-74-c	8.2 × 4.4 ×0.9	34.6	〃
82	〃	〃	J-79-d	6.8 × 3.7 ×1.0	24.5	〃
83	〃	〃	M-76-c	7.4 × 3.1 ×0.8	18.0	〃
84	〃	〃	J-79-d	7.5 × 3.7 ×1.0	19.4	〃
85	〃	〃	M-84-d	(6.7)× 3.0 ×1.0	(21.8)	〃
86	〃	〃	L-84-d	8.2 × 3.4 ×0.8	26.1	〃
87	〃	〃	M-76	8.5 × 3.4 ×1.0	23.6	〃
88	〃	〃	J-78-c	8.6 × 2.5 ×1.2	25.0	〃
89	〃	〃	M-77-d	4.7 × 2.3 ×0.7	7.6	〃
90	〃	〃	M-75	6.2 × 2.7 ×0.8	12.7	〃
91	〃	〃	J-77	5.8 × 2.6 ×0.7	9.7	〃
92	〃	〃	K-75-e	6.6 × 2.3 ×0.7	10.2	〃
93	〃	〃	J-79-a	7.2 × 3.4 ×0.8	19.1	〃
94	〃	〃	J-81	6.4 × 3.0 ×0.7	12.9	〃
95	〃	〃	M-75	4.4 × 2.3 ×0.7	7.2	〃
96	〃	〃	L-76-b	5.0 × 2.6 ×0.9	11.1	〃
97	〃	〃	M-75	3.5 × 2.8 ×0.7	6.6	〃
98	〃	〃	M-74	(3.4)× 2.6 ×0.7	(6.2)	〃

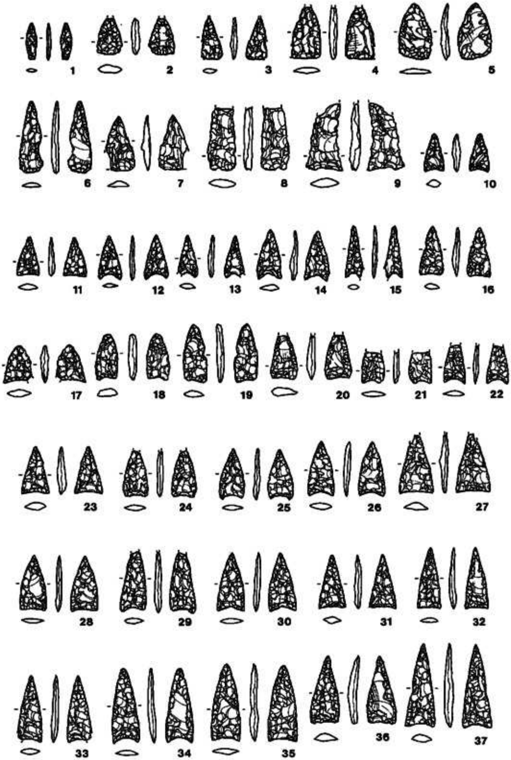
表Ⅴ－3　図示した石器の説明（その１）

番号	名　称	分類	発掘区	大きさ (cm)	重さ(g)	材　質
99	スクレイパー	ⅢB4	K—75	3.7 ×2.2×0.8	5.4	黒曜石
100	〃	ⅢB9	J—76—b	4.5 ×3.1×0.9	13.0	〃
101	〃	〃	L—73—c	4.9 ×3.2×0.6	10.2	〃
102	〃	〃	M—74	8.9 ×4.1×1.4	37.0	〃
103	〃	〃	L—81—b	4.4 ×2.7×0.8	12.8	〃
104	〃	〃	J—77—b	5.0 ×2.8×0.9	15.8	〃
105	〃	〃	L—78—d	4.4 ×3.2×1.1	12.4	〃
106	〃	〃	M—75—d	3.9 ×2.1×0.6	4.0	〃
107	〃	〃	L—84—d	4.5 ×2.8×0.4	6.4	〃
108	〃	〃	L—75—a	5.1 ×3.1×0.6	12.2	〃
109	〃	〃	P—70	4.1 ×3.6×0.6	9.6	〃
110	〃	〃	K—78—e	4.7 ×2.7×0.8	10.2	〃
111	〃	〃	M—75	2.8 ×2.3×0.3	1.9	〃
112	〃	〃	I—58—a	2.6 ×1.7×0.4	1.7	〃
113	〃	〃	K—75	5.2 ×2.3×0.7	8.0	〃
114	〃	〃	K—74	3.5 ×2.3×0.9	6.4	〃
115	〃	〃	M—74	2.2 ×2.1×0.4	2.0	〃
116	〃	〃	K—75	2.0 ×2.0×1.0	3.5	〃
117	〃	〃	J—81	4.5 ×7.0×1.7	39.4	〃
118	〃	〃	J—76—c	6.2 ×4.3×1.0	26.3	〃
119	〃	〃	K—74—c	4.5 ×5.9×1.3	35.3	〃
120	〃	〃	N—76—b	4.3 ×4.0×0.8	15.9	〃
121	〃	〃	L—77	4.6 ×5.1×1.4	23.7	〃
122	〃	〃	K—74—b	5.7 ×5.0×1.4	32.1	〃
123	〃	〃	J—78—d	7.7 ×2.9×0.7	15.4	〃
124	〃	〃	J—79—d	8.6 ×3.3×0.7	23.6	〃
125	〃	〃	J—79—d	6.8 ×2.2×0.9	19.8	〃
126	〃	〃	L—76—d	7.7 ×2.6×0.7	29.8	〃
127	〃	〃	M—79—a	5.8 ×1.8×0.6	9.0	〃
128	〃	〃	N—75—d	(5.5)×3.3×0.8	(16.9)	〃
129	〃	〃	J—80—b	1.5 ×4.5×0.6	5.4	〃
130	〃	〃	N—75	4.9 ×2.3×0.9	10.4	〃
131	〃	〃	J—79	5.5 ×2.3×0.9	12.7	〃
132	〃	〃	J—79—a	3.5 ×1.6×0.6	5.6	〃
133	〃	〃	M—78—a	3.9 ×2.1×0.4	5.1	〃
134	〃	〃	L—83	6.5 ×3.7×0.9	30.8	〃
135	〃	〃	J—80—a	5.1 ×1.8×0.5	5.7	〃
136	〃	〃	K—73—c	5.3 ×3.8×0.8	19.4	〃
137	〃	〃	M—75—a	4.9 ×2.7×0.8	12.7	〃
138	〃	〃	M—73—d	6.6 ×3.4×1.0	20.3	〃
139	〃	〃	N—75	3.9 ×3.1×1.1	13.8	〃
140	〃	〃	K—73—a	3.7 ×3.2×0.5	8.3	〃
141	〃	〃	N—75	3.5 ×2.1×0.8	4.9	〃
142	〃	〃	L—75	3.6 ×3.4×0.9	11.3	〃
143	〃	〃	K—80—d	4.8 ×3.7×0.6	14.7	〃
144	〃	〃	M—83—a	4.1 ×3.0×0.9	13.8	〃
145	〃	〃	J—79—d	4.9 ×4.2×1.1	25.1	〃
146	〃	〃	N—78—c	3.9 ×3.5×0.8	12.4	〃
147	〃	〃	M—75	2.5 ×2.0×0.6	3.2	〃
148	スクレイパー	ⅢB9	K—79—c	3.9 ×4.0 ×0.9	16.9	黒曜石
149	〃	〃	L—73	4.9 ×3.5 ×1.4	16.8	〃
150	〃	〃	K—73	2.2 ×3.1 ×1.0	5.9	〃
151	〃	〃	J—77—a	(2.2)×2.9 ×0.8	(6.1)	〃
152	〃	〃	J—70—a	3.7 ×2.2 ×0.6	5.4	〃
153	〃	〃	J—80—a	4.0 ×2.3 ×5.0	6.2	〃
154	〃	〃	J—77	3.7 ×2.5 ×1.0	5.6	〃
155	〃	〃	K—76—d	2.5 ×2.6 ×0.4	5.5	〃
156	〃	〃	K—74	2.2 ×2.1 ×1.0	5.5	〃
157	〃	〃	M—75	2.1 ×3.2 ×0.9	5.0	〃
158	〃	〃	J—77—a	3.1 ×2.1 ×0.6	3.1	〃
159	〃	〃	M—81—b	2.0 ×1.8 ×0.4	1.4	〃
160	〃	〃	J—75—b	(5.7)×4.5 ×1.0	(25.8)	珪　岩
161	〃	〃	K—74—b	4.8 ×3.3 ×0.7	11.8	〃
162	〃	〃	L—74—d	5.4 ×4.0 ×0.8	14.9	〃
163	〃	〃	M—84—d	5.6 ×6.7 ×1.6	64.4	安山岩
164	〃	〃	J—80—a	6.2 ×6.6 ×1.3	50.8	〃
165	〃	〃	J—79—a	6.8 ×4.7 ×1.1	38.1	〃
166	〃	〃	M—81—a	5.1 ×9.8 ×1.4	77.0	〃
167	〃	〃	L—75—b	7.3 ×4.4 ×1.2	32.4	〃
168	〃	〃	L—81—b	7.6 ×4.7 ×1.1	36.6	〃
169	〃	〃	J—79—a	6.8 ×3.6 ×0.7	22.6	〃
170	〃	〃	M—84—d	(6.4)×3.8 ×0.8	(27.7)	〃
171	石　斧	ⅣA3	N—77—d	10.9 ×6.0 ×1.3	99.8	緑色泥岩
172	〃	〃	N—74—c	(11.4)×4.5 ×1.9	(127.8)	黒色片岩
173	〃	〃	J—80—a	(10.9)×4.0 ×1.1	(71.4)	緑色片岩
174	石のみ	ⅣB1	M—85	9.4 ×3.1 ×1.0	(55.8)	黒色片岩
175	石　斧	ⅣA5	M—78—a	8.9 ×4.9 ×1.7	115.5	緑色泥岩
176	〃	ⅣA3	L—81—a	11.3 ×6.0 ×1.9	253.8	黒色片岩
177	〃	〃	M—81—a	9.0 ×4.0 ×1.0	56.6	〃
178	石のみ	ⅣB1	L—78—a	7.8 ×3.4 ×1.3	48.8	〃
179	石　斧	ⅣA3	J—79—a	7.3 ×3.0×(0.7)	(23.8)	〃
180	〃	〃	L—83	(12.4)×5.0 ×1.5	(130.4)	〃
181	〃	〃	J—79—a	12.8 ×4.6 ×0.8	94.4	〃
182	〃	〃	K—80—d	12.2 ×4.4 ×1.8	147.8	緑色片岩
183	〃	〃	M—81—b	10.4 ×4.0 ×0.9	(85.5)	〃
184	〃	〃	J—77—c	11.7 ×4.7 ×1.5	124.8	黒色片岩
185	〃	〃	L—85	12.2 ×4.4 ×2.1	(200.6)	緑色片岩
186	〃	〃	M—85	17.6 ×5.9 ×3.1	559.3	黒色片岩
187	〃	〃	表　採	15.8 ×5.0 ×2.0	281.1	〃
188	〃	ⅣA5	I—65—a	17.1 ×4.7 ×2.4	(331.3)	緑色泥岩
189	〃	ⅣA3	J—80—a	12.9 ×4.0 ×2.6	182.0	黒色片岩
190	〃	〃	J—79—a	12.6 ×4.0 ×2.1	(123.5)	〃
191	〃	〃	J—79—a	(10.0)×4.2 ×0.9	(56.3)	〃
192	〃	〃	L—83—c	11.3 ×5.7 ×1.0	(110.8)	〃
193	〃	ⅣA4	K—78—b	13.3 ×4.7 ×1.1	159.2	緑色片岩
194	〃	〃	M—81—a	21.5 ×6.0 ×1.9	435.3	黒色片岩
195	〃	〃	M—84—d	20.0 ×5.6 ×1.3	250.2	〃
196	〃	ⅣA3	K—79—a	9.0 ×3.7 ×1.0	39.6	緑色片岩

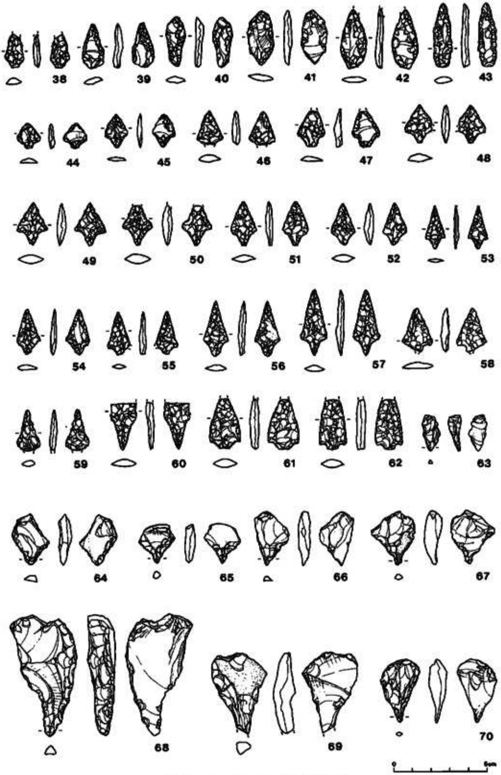
表Ⅴ－4　図示した石器の説明（その2）

番号	名 称	分類	発掘区	大きさ（cm）	重さ(g)	材 質
197	石斧	ⅣA3	J—79—b	(8.8)×4.1×1.2	(76.8)	黒色片岩
198	〃	〃	K—79—d	8.6×4.9×0.9	(65.4)	緑色泥岩
199	〃	〃	M—84—d	11.2×4.0×1.0	57.8	黒色片岩
200	〃	〃	M—81—a	10.6×4.5×2.2	154.8	〃
201	〃	〃	J—79—b	12.2×5.3×1.1	115.0	〃
202	〃	〃	J—79—b	9.9×5.6×2.7	138.9	緑色片岩
203	〃	〃	J—78—c	12.1×4.9×1.3	(134.0)	黒色片岩
204	〃	〃	L—81—b	14.7×6.3×2.2	297.6	〃
205	〃	〃	N—74—c	(13.1)×5.8×1.7	(206.5)	緑色片岩
206	〃	〃	K—78—c	9.4×4.4×2.1	110.8	緑色泥岩
207	〃	〃	L—81—d	10.8×5.0×1.3	116.4	黒色片岩
208	〃	〃	J—78—c	8.9×4.7×1.4	90.6	緑色片岩
209	〃	〃	M—81—d	11.4×5.2×1.8	203.6	黒色片岩
210	〃	〃	M—75—a	(12.6)×4.9×1.2	(121.2)	〃
211	〃	ⅣA8	J—80	7.6×3.3×0.8	29.8	〃
212	〃	〃	N—74—c	11.8×4.3×1.2	93.7	〃
213	〃	〃	J—78—c	13.6×4.2×1.7	153.9	〃
214	〃	〃	J—62—c	14.4×4.8×1.3	161.1	〃
215	〃	〃	M—78—a	(11.2)×5.3×1.6	(162.5)	〃
216	〃	〃	K—78—d	(10.4)×4.5×1.3	(89.3)	〃
217	〃	〃	J—78—c	(14.6)×6.5×3.1	(492.2)	緑色片岩
218	〃	ⅣA4	M—81—a	15.1×6.6×2.9	454.1	黒色片岩
219	〃	ⅣA8	J—79—b	15.9×5.7×2.0	236.9	〃
220	〃	〃	J—79—a	14.6×6.7×2.0	282.3	〃
221	〃	〃	J—79—b	16.7×6.0×1.9	324.7	〃
222	〃	〃	J—78—c	(15.7)×7.4×1.7	(311.5)	緑色片岩
223	〃	〃	L—83	12.1×5.3×1.7	149.4	黒色片岩
224	〃	ⅣA3	M—74—c	(12.1)×5.0×1.7	(169.3)	〃
225	〃	〃	L—76—a	9.9×3.8×1.4	(46.5)	〃
226	〃	〃	M—85	(10.1)×6.0×2.0	(149.2)	〃
227	〃	ⅣA4	M—80—c	(10.1)×4.2×0.9	(68.9)	〃
228	〃	ⅣA3	L—73	(4.7)×3.2×0.6	(16.4)	〃
229	〃	〃	L—83	(6.2)×10.1×1.5	(124.8)	〃
230	〃	〃	I—64—b	6.7×4.5×1.1	(56.9)	〃
231	〃	〃	M—76—b	(4.3)×(4.2)×(1.5)	(35.2)	緑色片岩
232	〃	〃	J—79—b	(6.9)×4.2×1.4	(75.8)	〃
233	〃	〃	J—78—d	(8.9)×5.1×2.5	(149.2)	黒色片岩
234	石のみ	ⅣB1	M—80—a	(17.5)×3.0×2.2	(207.3)	〃
235	たたき石	ⅤA3	J—79—b	16.5×7.2×1.8	311.8	緑色片岩
236	〃	ⅤA2	L—78—a	15.6×5.5×2.6	220.4	〃
237	〃	ⅤA1	N—74—c	13.1×4.8×2.1	(209.3)	黒色片岩
238	〃	ⅤA3	M—81—d	(12.6)×4.0×1.9	(89.6)	砂岩
239	〃	ⅤA2	M—75—b	18.5×6.2×2.4	433.7	緑色片岩
240	〃	〃	J—78—c	12.5×6.0×1.9	188.8	緑色泥岩
241	たたき石	ⅤA2	M—81—d	7.8×9.1×2.8	298.1	花崗岩
242	台石	ⅤB1	M—75—d	16.6×14.6×5.7	1900	安山岩
243	すり台	ⅥA1	M—81—d	(13.4)×(6.0)×(2.4)	(202.6)	〃
244	〃	ⅥA5	L—78—a	6.1×5.0×4.5	177.1	〃
245	石皿	ⅥB1	N—77—d	(19.2)×11.7×4.6	(1300)	〃
246	〃	〃	M—84—d	(14.6)×8.9×3.0	(625.0)	砂岩
247	砥石	ⅦB9	N—74—c	19.1×13.6×6.6	1500	〃
248	〃	ⅦB2	J—79—a	(7.3)×(6.7)×2.0	(133.3)	〃
249	〃	〃	J—79—a	(12.6)×7.8×1.4	(205)	〃
250	〃	〃	L-81-c, d	(13.0)×10.4×1.9	(319)	〃
251	〃	〃	K—78—b	(5.5)×4.7×2.1	(64.0)	〃
252	〃	〃	J—79—a	10.8×(7.0)×2.1	(219.2)	〃
253	〃	〃	J—79—d	(10.2)×8.3×1.1	(115.6)	〃
254	〃	ⅦB9	M—74—c	(15.6)×14.3×5.9	(2050)	〃
255	〃	〃	N—76—b	20.4×30.8×6.8	5000	〃
256	〃	ⅦB2	N—74—c	(10.7)×10.9×2.8	(522)	〃
257	〃	〃	J—78—c	(8.3)×(10.9)×2.0	(274)	〃
258	〃	〃	N—81—a	(13.1)×7.5×2.6	(466.0)	〃
259	〃	〃	N—74—c	13.2×(10.6)×3.7	(700)	〃
260	〃	ⅦB9	L—81—c	(17.4)×(7.9)×6.1	(880)	〃
261	石核	ⅨA	M—83—d	4.1×4.0×2.8	40.2	黒曜石
262	〃	〃	J—70	2.7×3.3×2.1	17.2	〃
263	〃	〃	J—77—c	2.3×3.2×1.9	13.1	〃
264	〃	〃	L—75—c	2.1×4.4×3.8	24.8	〃
265	〃	〃	K—78—b	3.7×3.6×2.3	31.3	〃
266	〃	〃	J—77—c	(2.1)×2.9×1.7	(11.8)	〃
267	〃	〃	L—75—c	2.7×3.0×2.9	23.0	〃
268	〃	〃	K—78	3.7×2.8×1.7	15.8	〃
269	〃	〃	N—75—b	4.0×3.1×1.1	14.0	〃
270	〃	〃	J—77—c	4.8×(6.2)×2.5	(43.1)	〃
271	〃	〃	M—78—d	5.7×4.9×1.7	32.8	〃
272	〃	〃	K—74—b	7.2×3.1×1.2	20.2	〃
273	棒状原石	〃	J—77—a	2.5×3.3×1.9	17.9	〃
274	〃	〃	K—76—d	4.4×1.9×0.9	6.5	〃
275	〃	〃	L—75—b	6.0×2.7×0.6	5.4	〃
276	〃	〃	L—75—c	6.0×1.1×0.5	4.0	〃
277	〃	〃	M—75—b M—73—d	12.0×2.1×1.3	(36.1)	〃
278	〃	〃	K—73—c	3.8×0.8×0.5	1.6	〃
279	〃	〃	K—77—b	3.4×1.1×0.7	3.4	〃
280	〃	〃	L—76—c	4.3×1.0×0.7	3.2	〃
281	ピエスエスキーユ	ⅩA1	J—78—a	3.0×1.2×0.8	2.7	〃
282	石製品		M—73—d	2.1×1.6×0.6	3.2	滑石
283	〃		J—79—b	3.8×2.2×0.6	8.1	〃

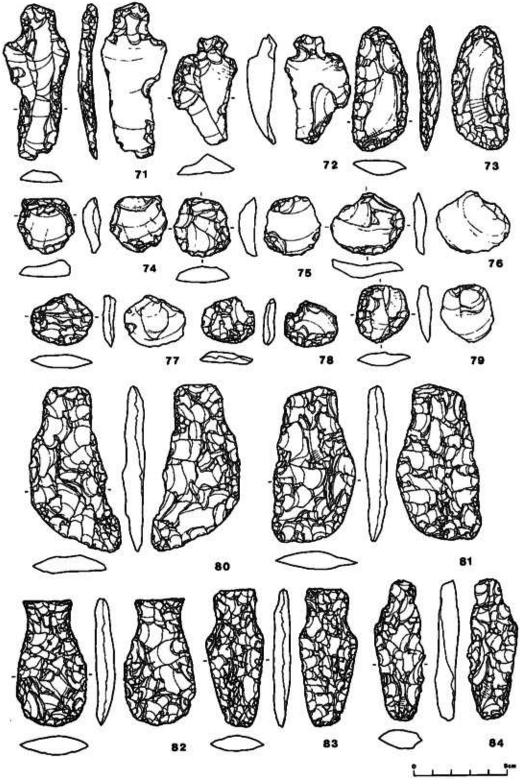
表Ⅴ－5　図示した石器の説明（その3）


1 2 3 4 5
6 7 8 9 10
11 12 13 14 15 16
17 18 19 20 21 22
23 24 25 26 27
28 29 30 31 32
33 34 35 36 37
0
5cm

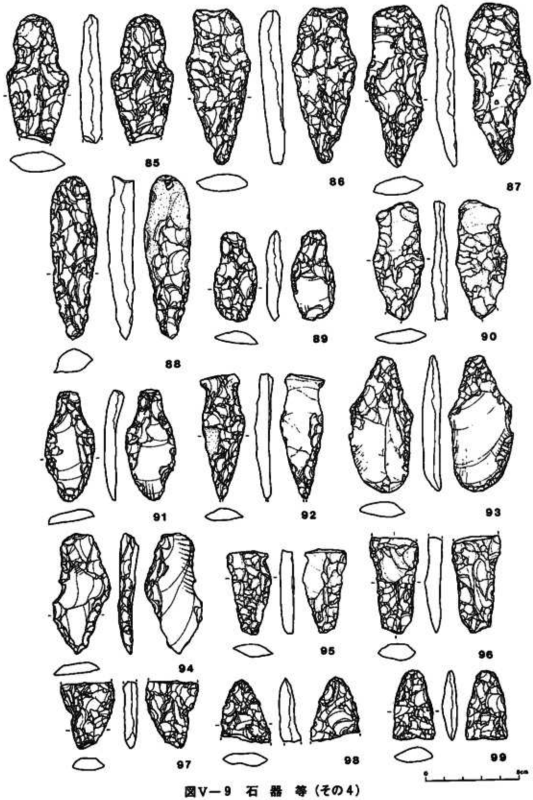
図V－6　石　器　等（その1）


38 39 40 41 42 43
44 45 46 47 48
49 50 51 52 53
54 55 56 57 58
59 60 61 62 63
64 65 66 67
68 69 70

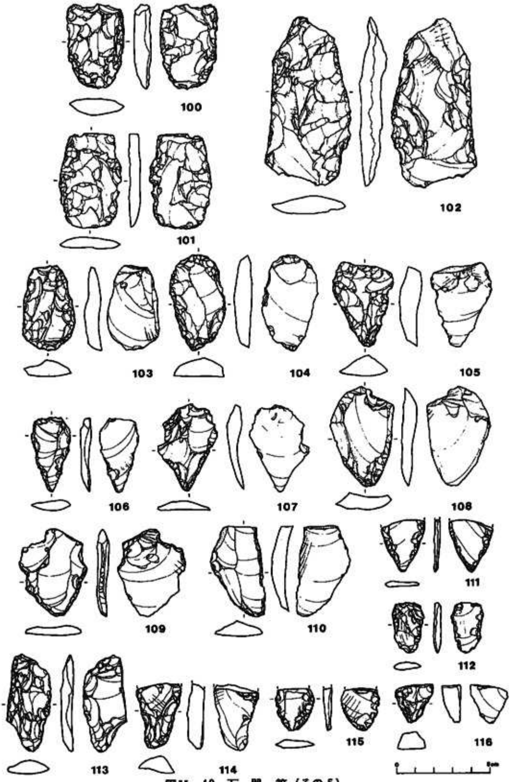
図V—7 石 器 等 (その2)



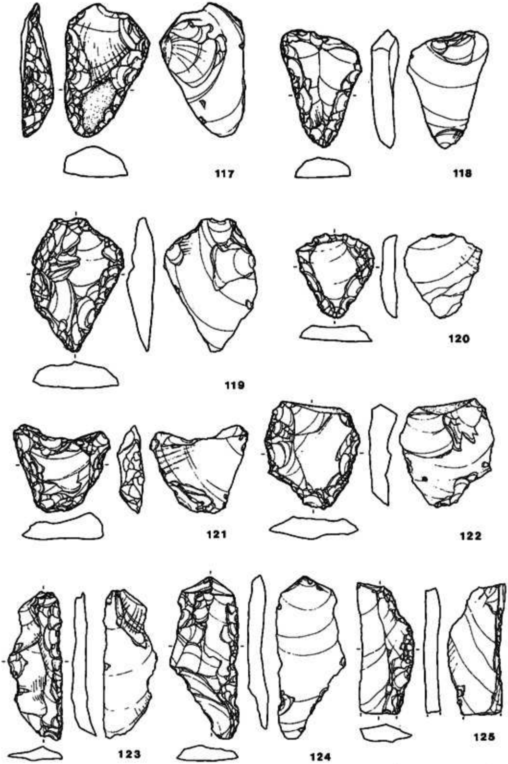
図V－8　石　器　等（その3）



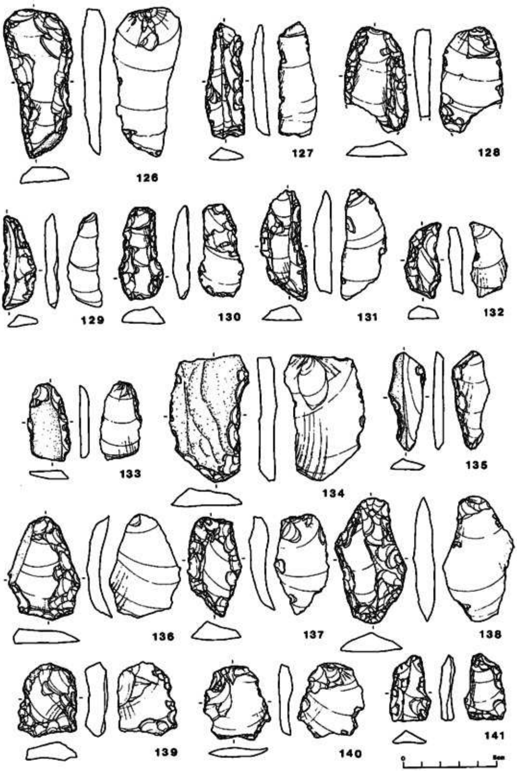
図V－9　石　器　等（その4）


100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116

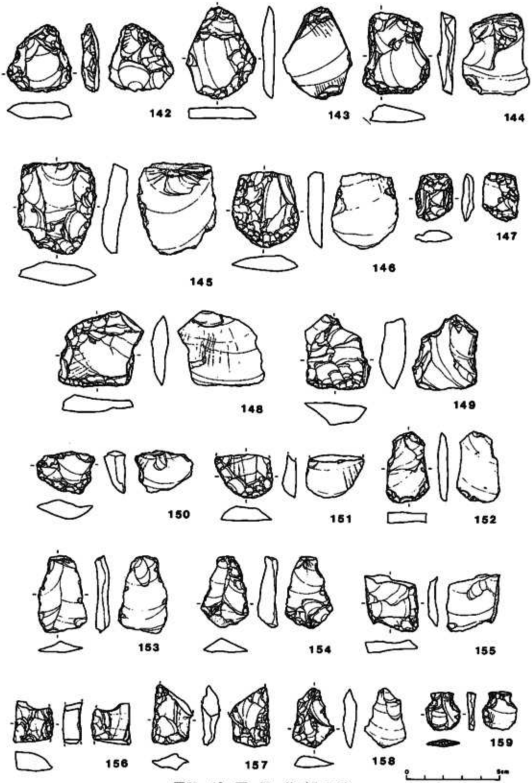
図V—10 石 器 等（その5）



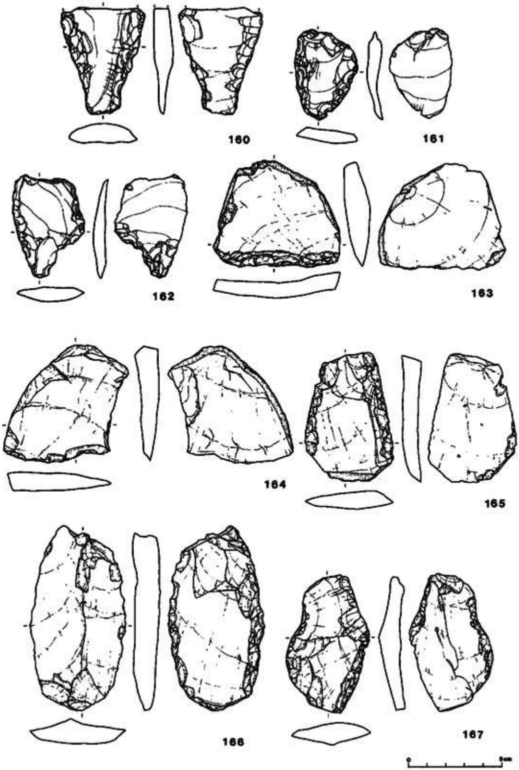
図V−11 石 器 等（その6）


126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
0
5cm

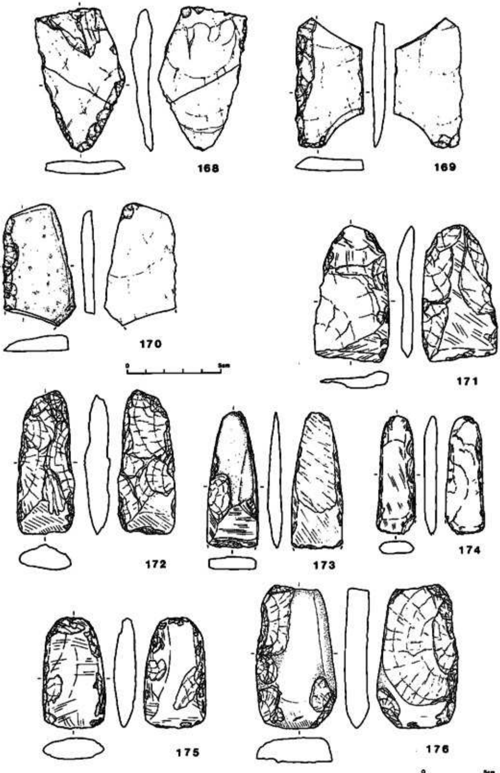
図V—12 石 器 等（その7）


142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
0
5cm

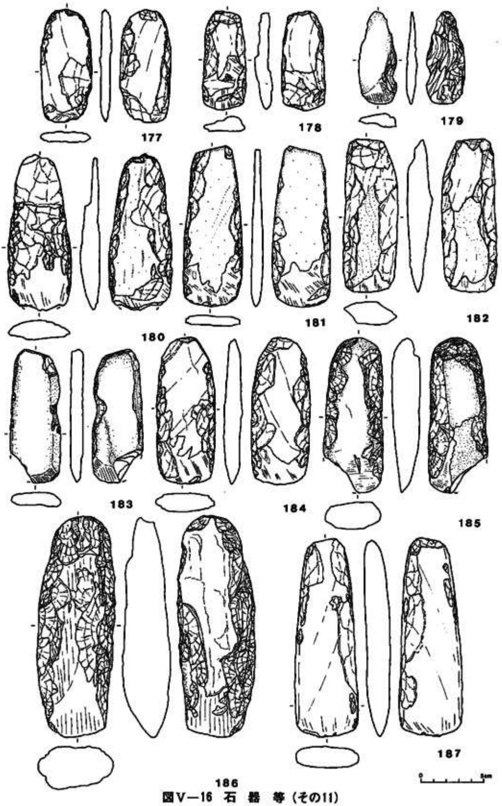
図V—13 石 器 等（その8）



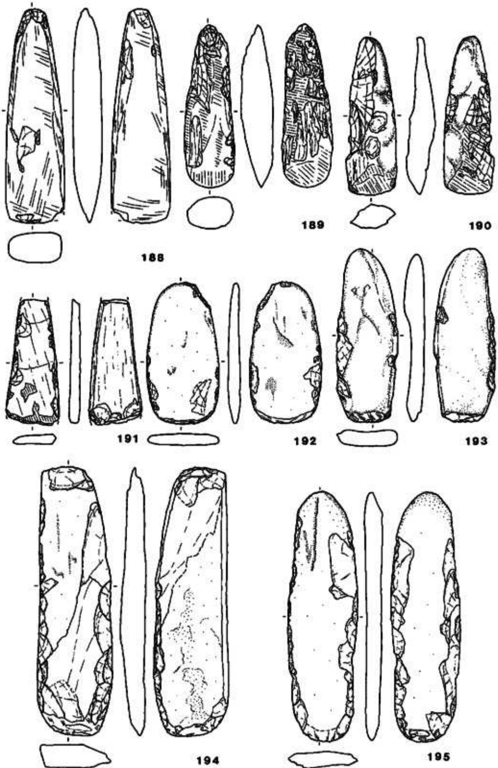
図V−14 石 器 等（その9）



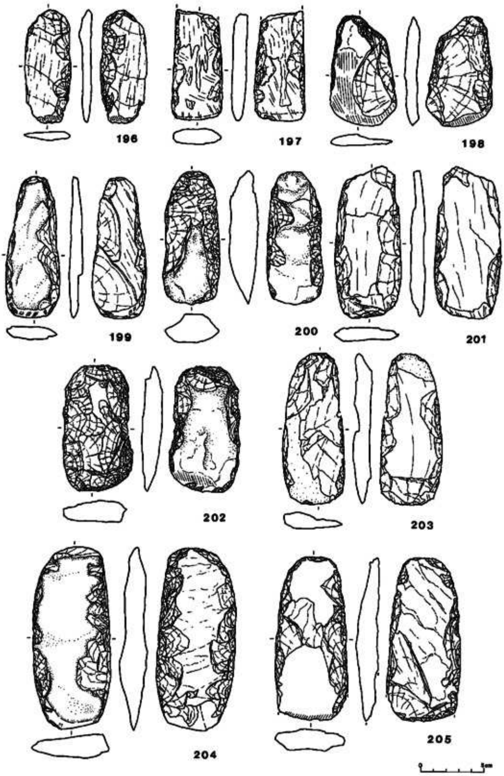
図V−15 石 器 等（その10）



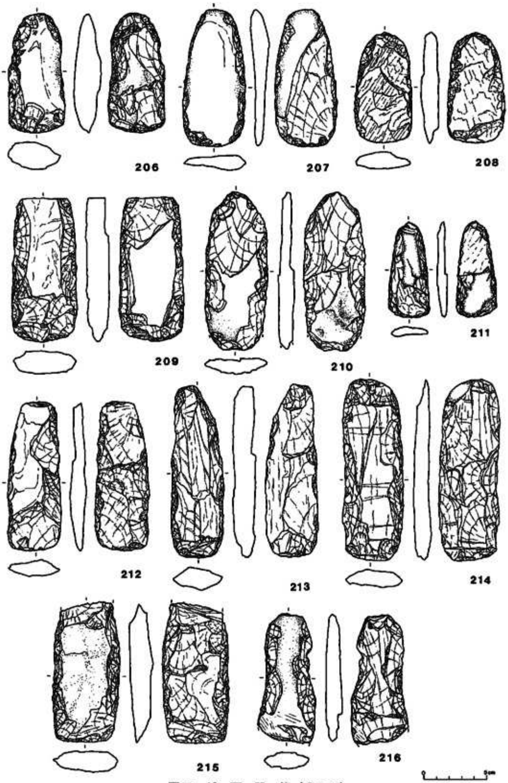
図V−16 石 器 等（その11）



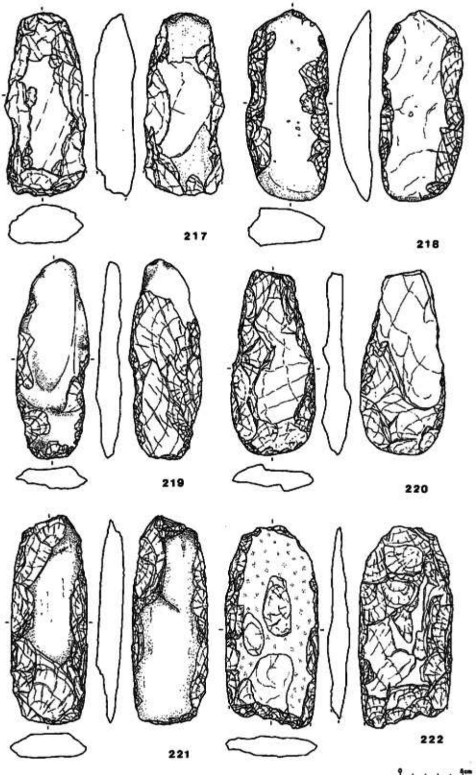
図V−17 石 器 等(その12)



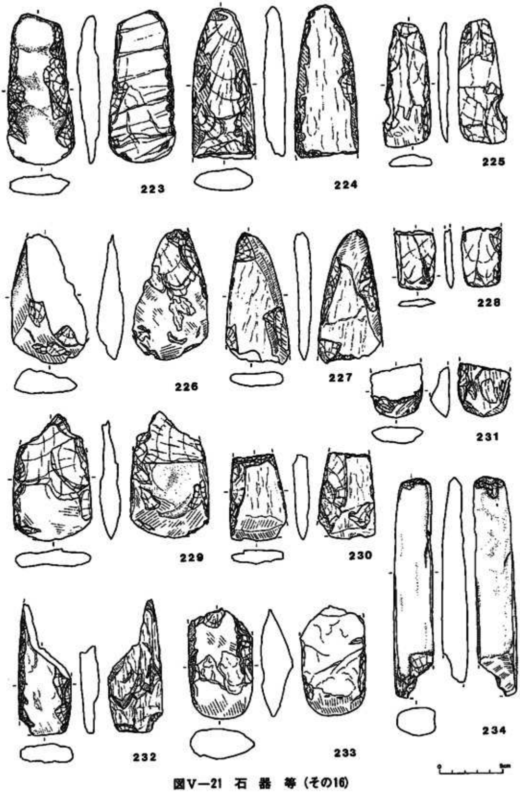
図V—18 石 器 等（その13）



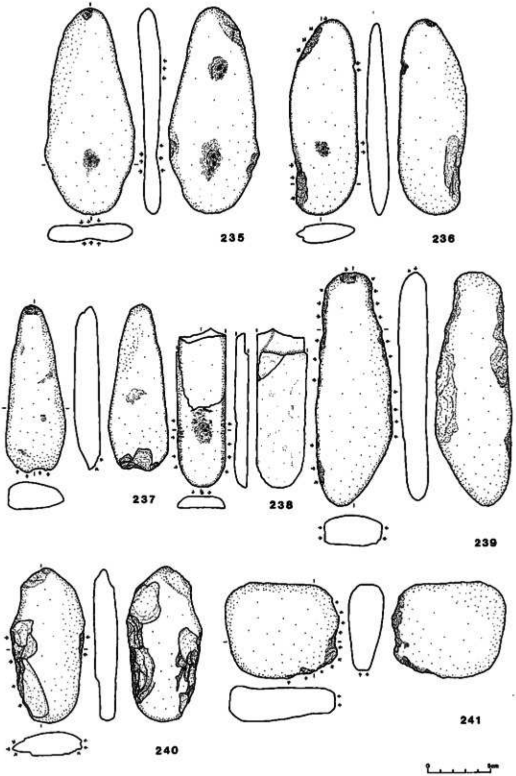
図V−19 石 器 等（その14）



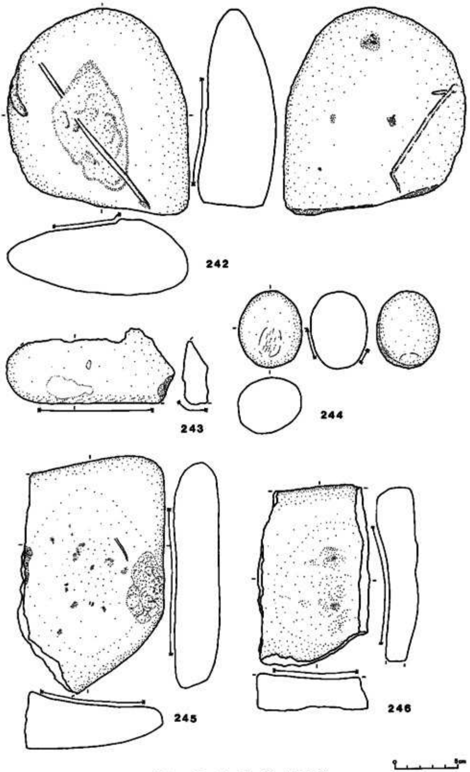
図V—20 石 器 等（その15）



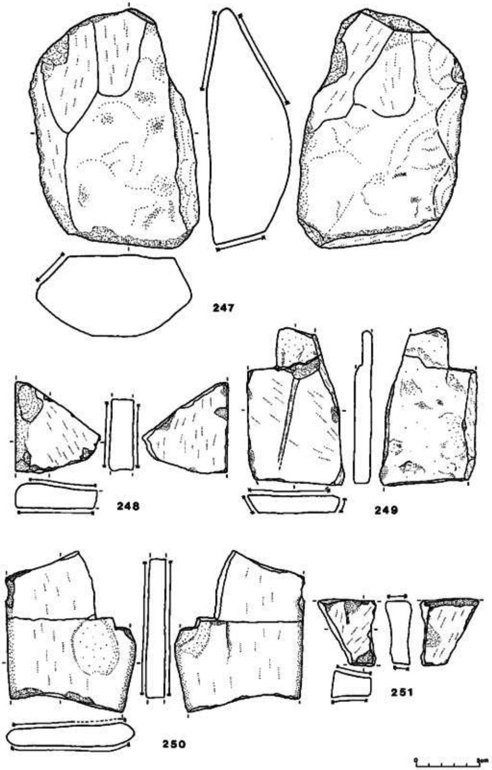
図V—21 石 器 等 (その16)



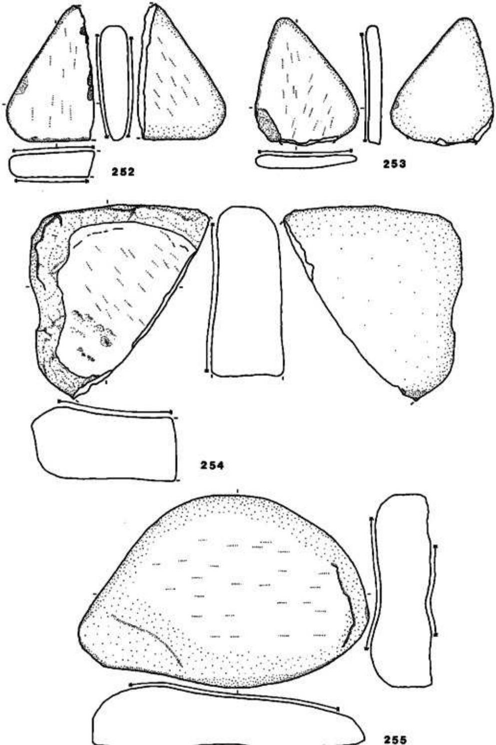
図V−22 石 器 等（その17）



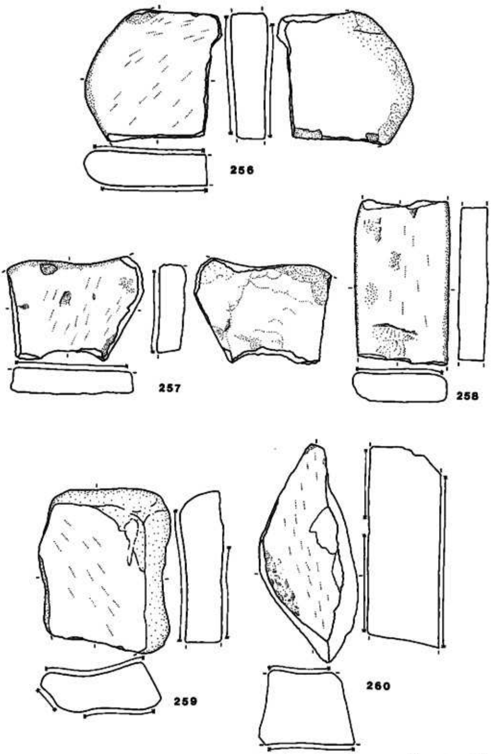
図V—23 石 器 等（その18）



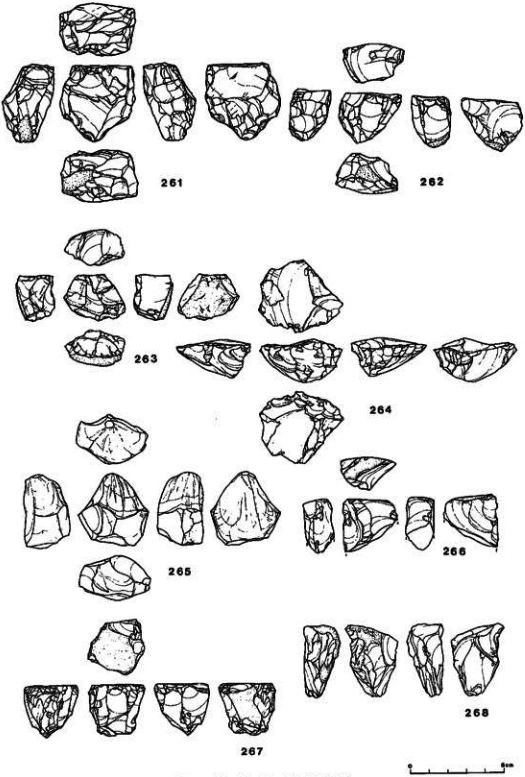
図V—24 石 器 等（その19）



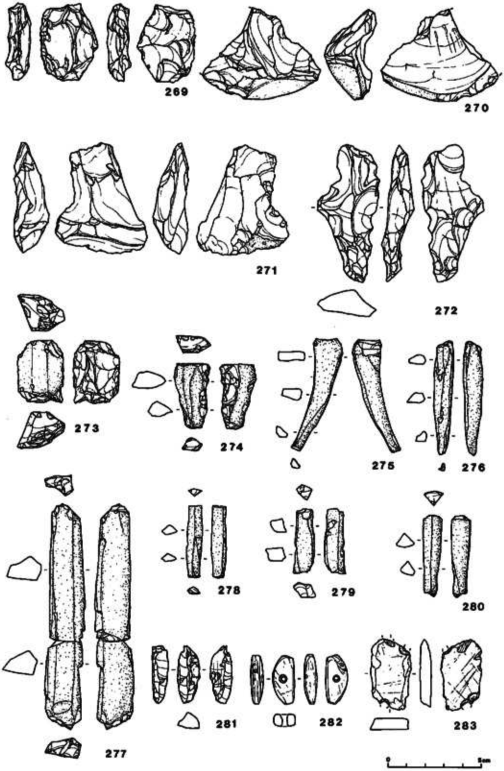
図V−25 石 器 等（その20）



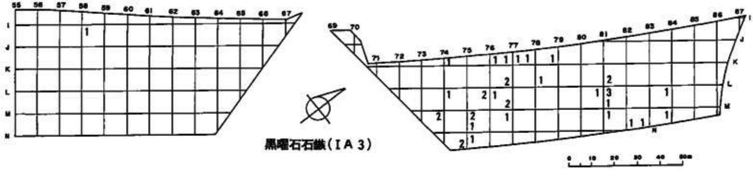
図V—26 石 器 等（その21）



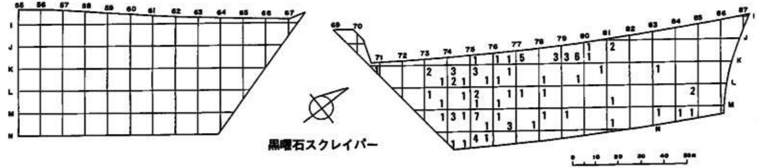
図V－27　石　器　等（その22）



図V―28 石 器 等（その23）

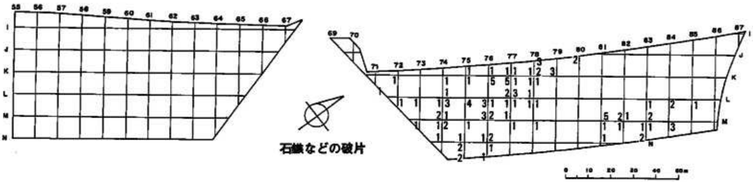


黒曜石石鏃（ＩＡ３）

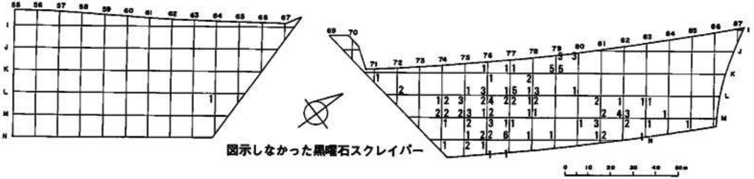


黒曜石スクレイパー

図Ｖ−29　石　器　の　分　布（その１）

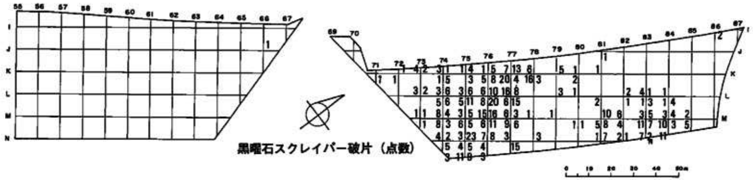


石鏃などの破片

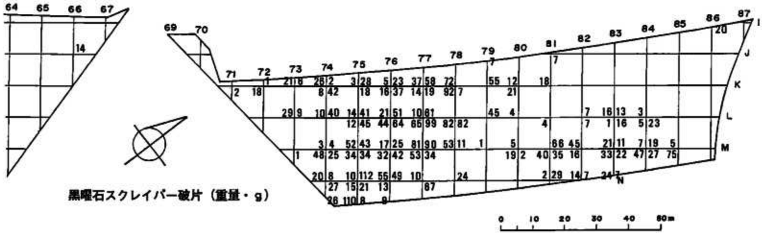


図示しなかった黒曜石スクレイパー

図V−30 石 器 の 分 布（その2）

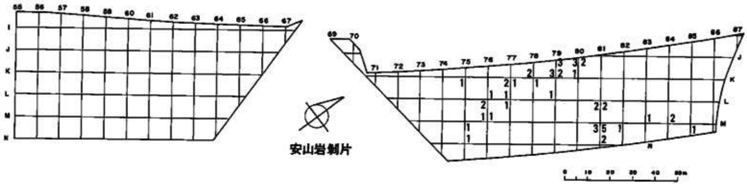


黒曜石スクレイパー破片（点数）

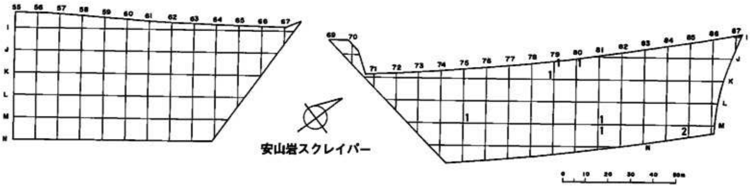


黒曜石スクレイパー破片（重量・g）

図V−31 石 器 の 分 布（その3）

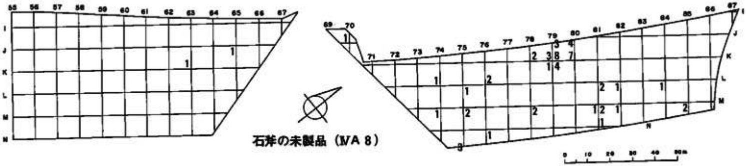


安山岩剥片

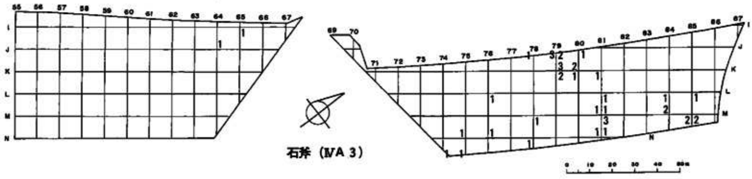


安山岩スクレイパー

図V—32 石 器 の 分 布（その4）



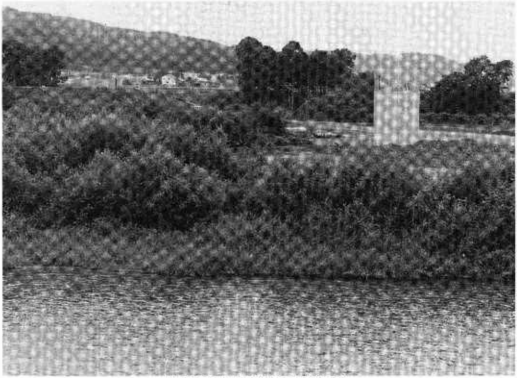
石斧の未製品（ⅣA 8）



石斧（ⅣA 3）

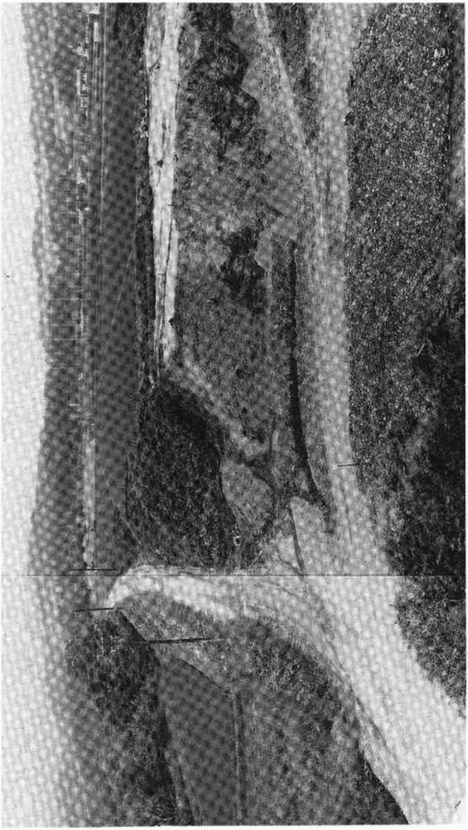
図Ⅴ—33 石 器 の 分 布（その5）

遺 跡 近 景 （北地区から）



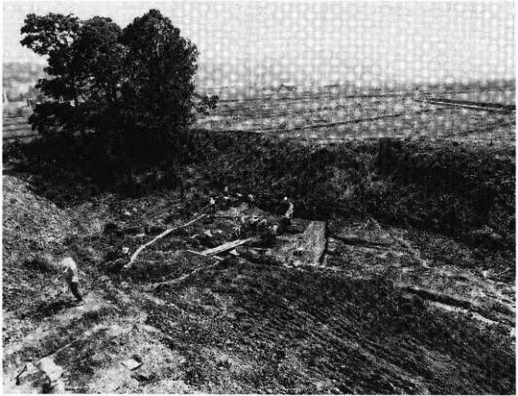
遺 跡 遠 景 （石狩川の対岸から）

図版Ⅰの2



チャシの丘近景（北地区から）

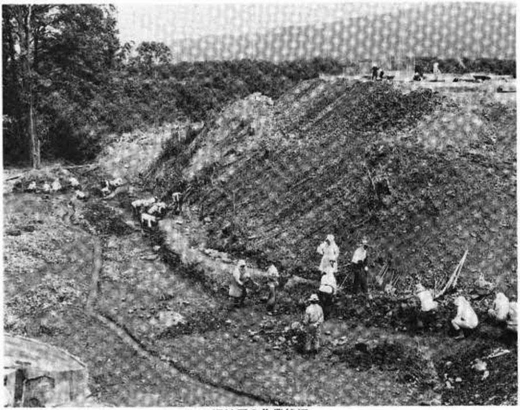
沢地区の作業状況



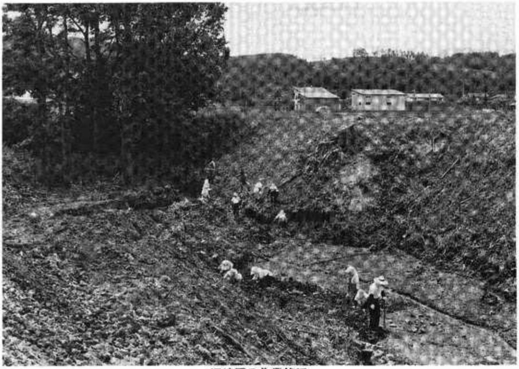
沢地区の作業状況

沢地区の作業状況

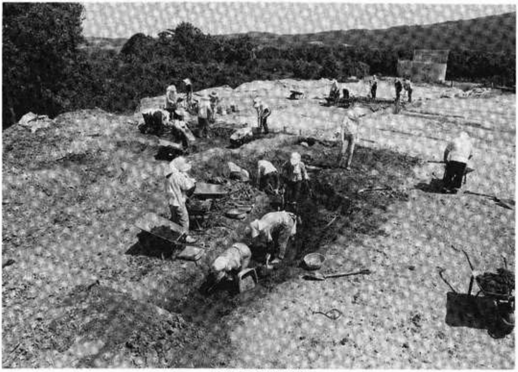
沢地区の作業状況



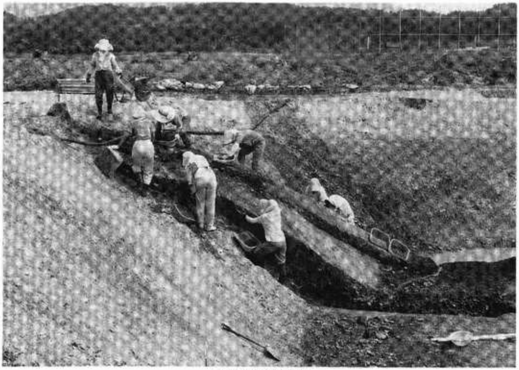
沢地区の作業状況



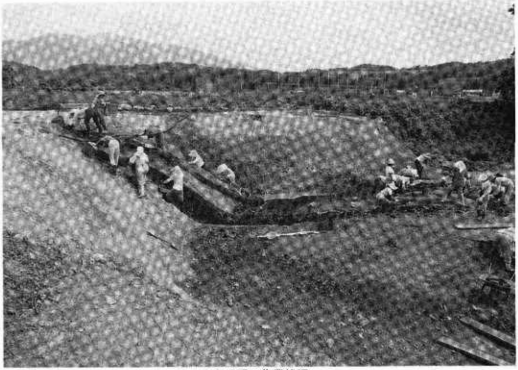
沢地区の作業状況



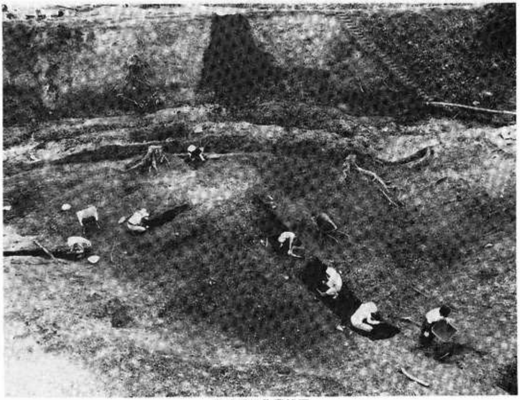
東地区の作業状況



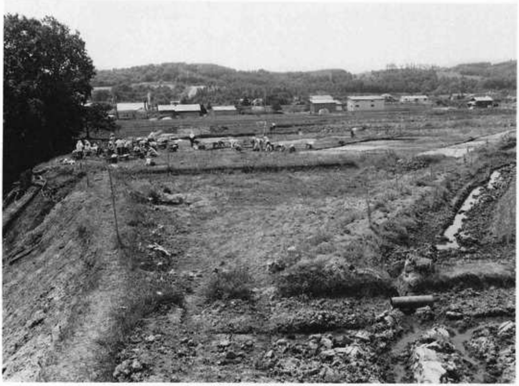
東地区の作業状況



東地区の作業状況

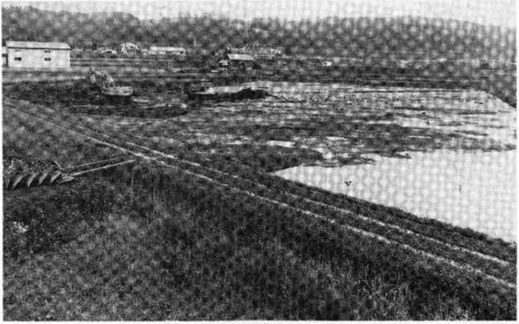


東地区の作業状況



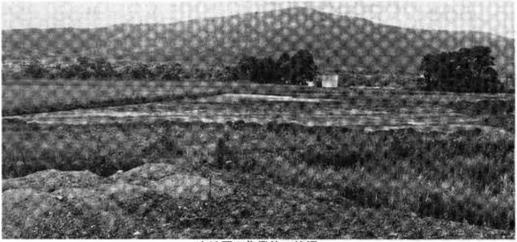
中地区の作業状況

中地区の作業状況（東地区から）



南地区の作業状況

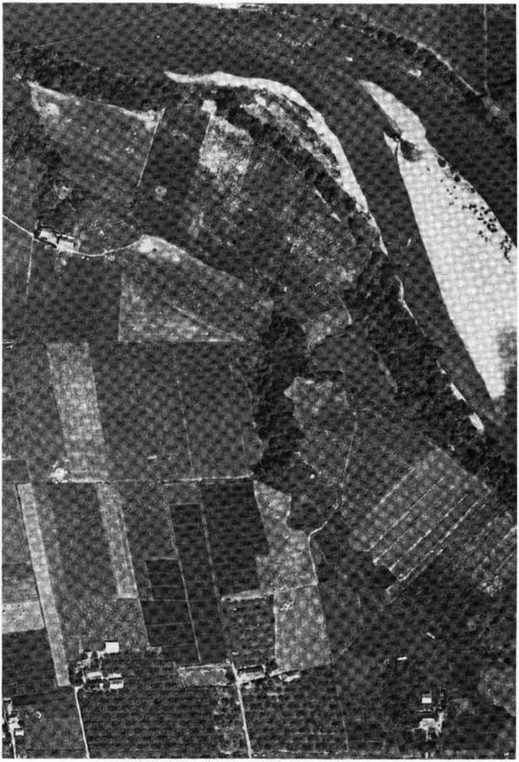
南地区の作業状況



南地区の作業終了状況

図版Ⅱの１

内園２遺跡周辺の空中写真（1948年８月撮影）
（これは、国土地理院発行の約15,860分の１を複製したものである）

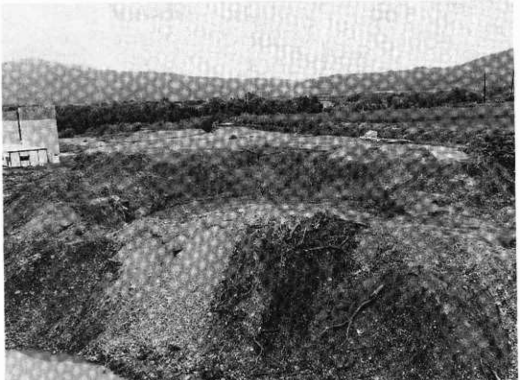


内園2遺跡周辺の空中写真（1948年8月撮影）
（これは左ページのものを約4.8倍に拡大したものである）

表面の雑物除去後の状況（沢地区）

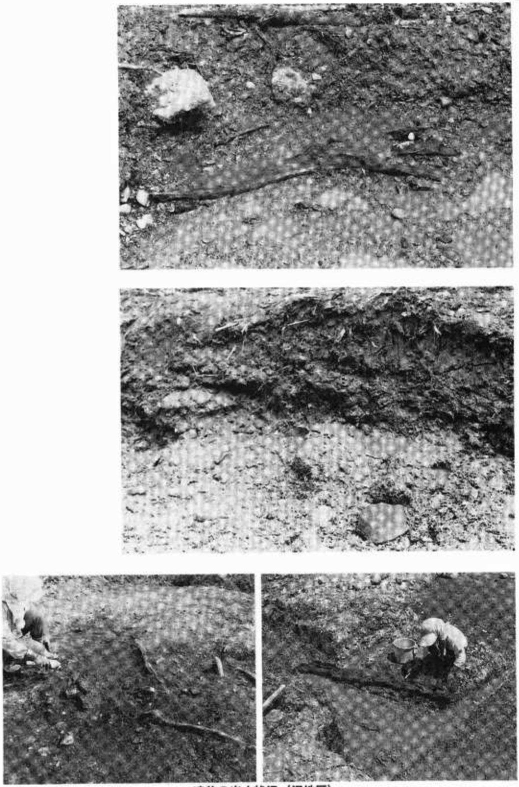
表面の雑物除去後の状況（沢地区）

東地区の作業終了状況

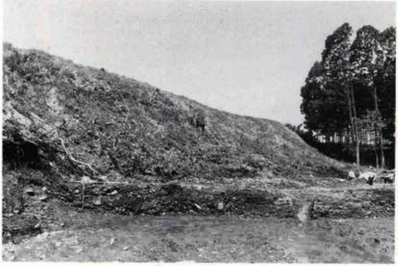

東地区の作業終了状況

中地区の作業終了状況

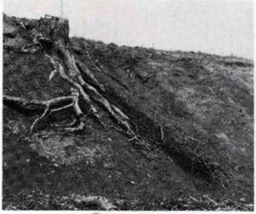
中地区の作業終了状況



遺物の出土状況（沢地区）



① M—78—a



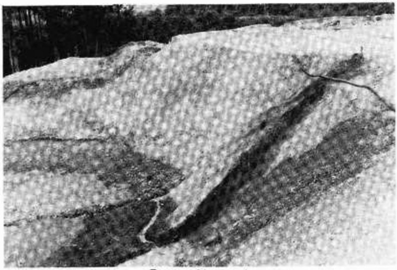
② M—77—d

③ M—78—a

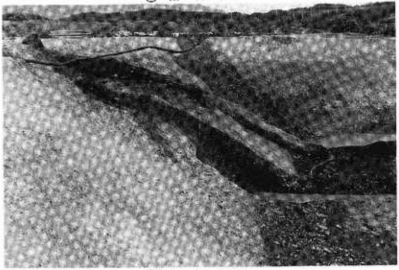
④ M—78—d

⑤ M—78—d、M—79—a

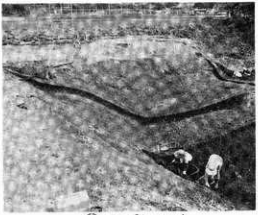
土層断面（沢地区）



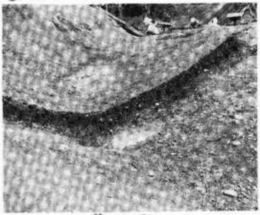
① M—81—a・d



② L—81—b・c



③ M—81—a・d



④ M—81—a

土 層 断 面（東地区）

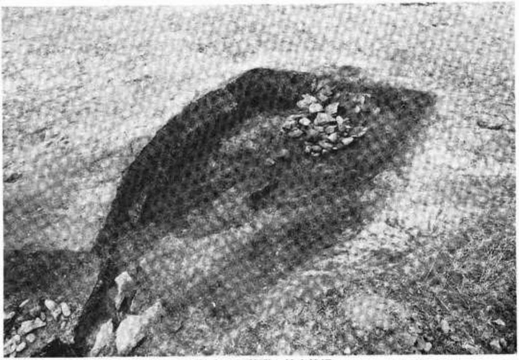
沢地区・樹木の状態

沢地区・樹木の状態

沢地区・作業終了状況

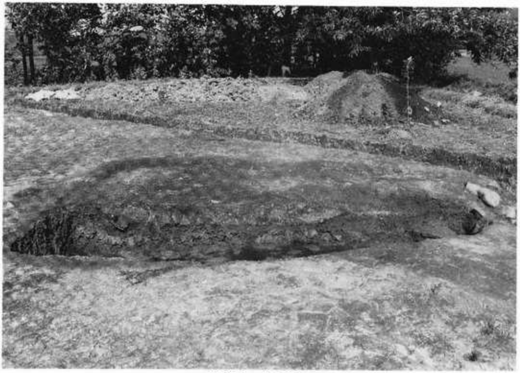
炭焼窯の確認状況

炭焼窯の完掘状況



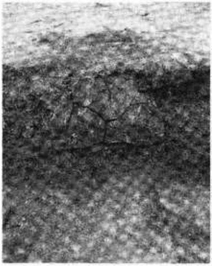
炭焼窯・埋積礫の検出状況

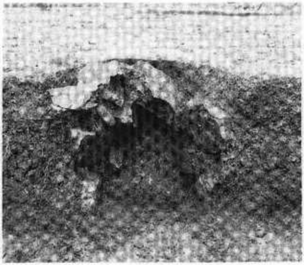
炭焼窯・埋積礫の検出状況



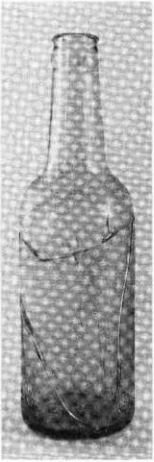
炭焼窯、土層断面

炭焼窯、たき口の付近


煙道のふさぎ石


煙道の検出状況

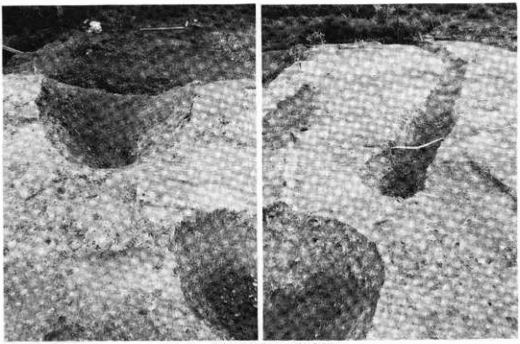
炭焼窯、完掘の状況


出土遺物

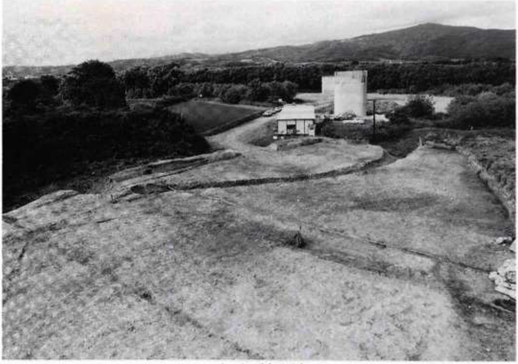
チャシ、壕の検出作業

チャシ、壕の検出作業

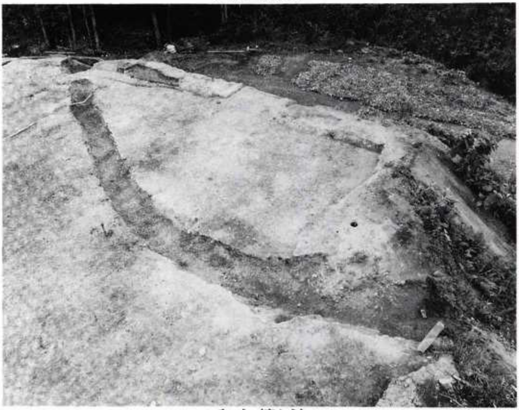
チャシ、壕の検出作業



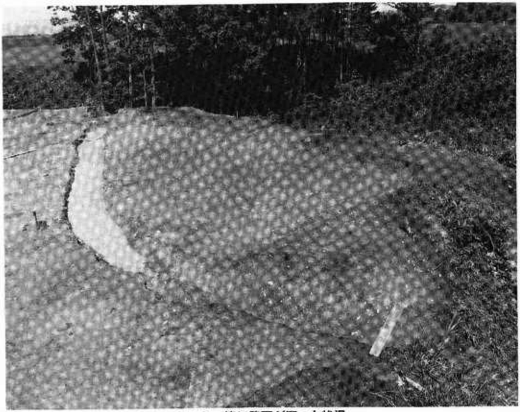
チャシ、橋状遺構部分の検出状況



チャシ（南から）

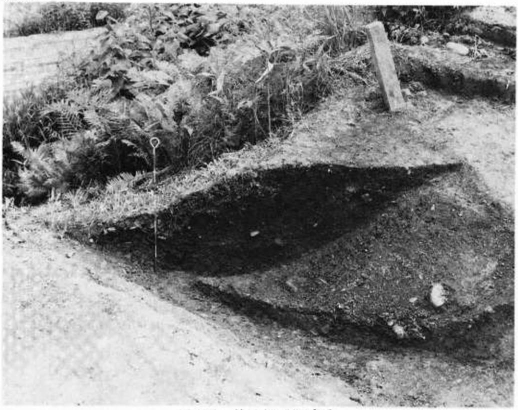


チャシ（東から）



チャシ、壕に降雨が溜った状況

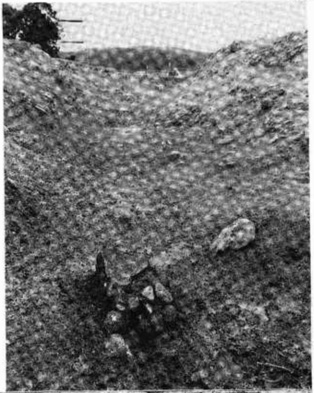
チャシ、壕の東端（北側の低地から見上げたもの）



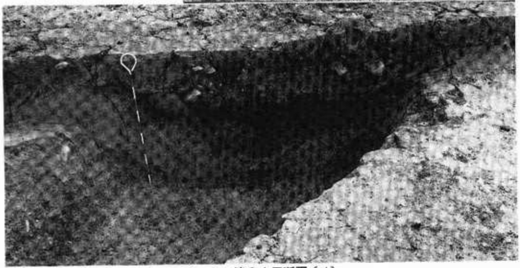
チャシ、壕の土層断面〔a〕

チャシ、壕底の遺物出土状況

チャシ、壕底の遺物出土状況



チャシ、壕の土層断面〔c〕

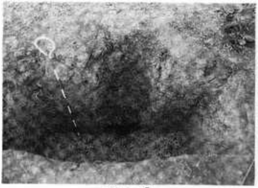


チャシ、壕の土層断面〔d〕

SP－7・8・9

SP－1

SP－2



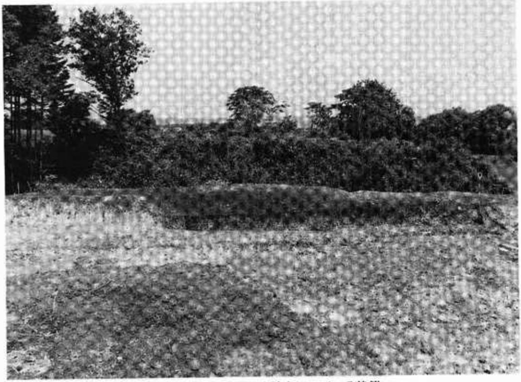
SP－5

SP－6

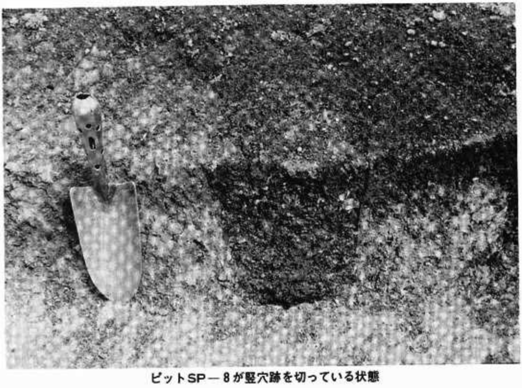
SP－8

SP－9

ピットの検出状況

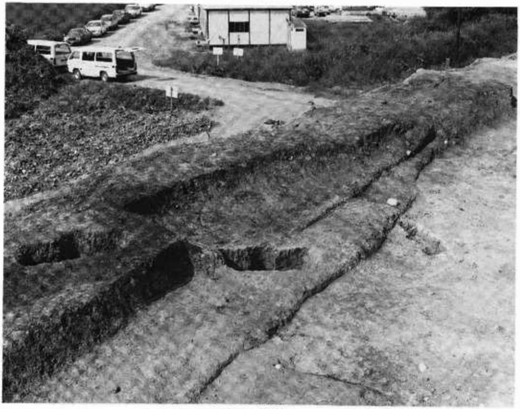


ピットSP－8が竪穴跡を切っている状態

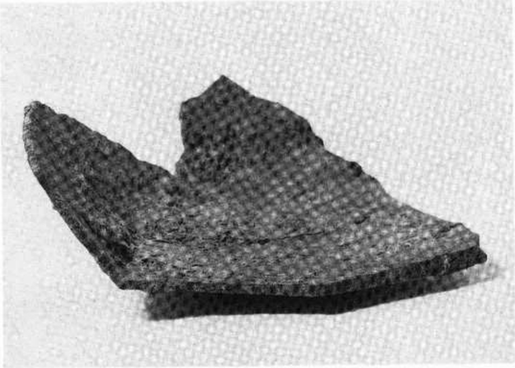


ピットSP－8が竪穴跡を切っている状態

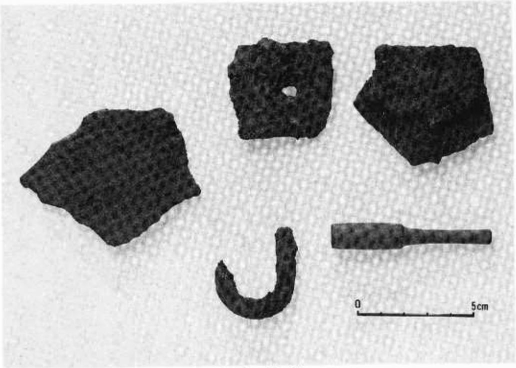
竪穴の確認状況



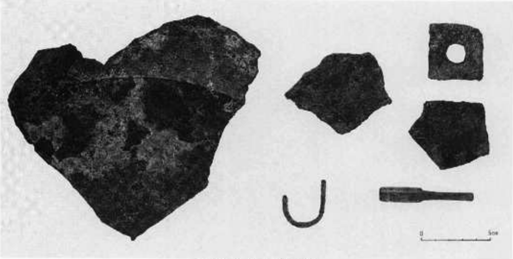
竪穴の完掘状況



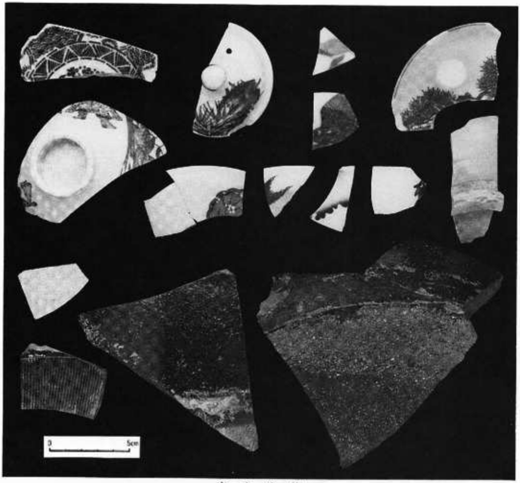
出 土 遺 物



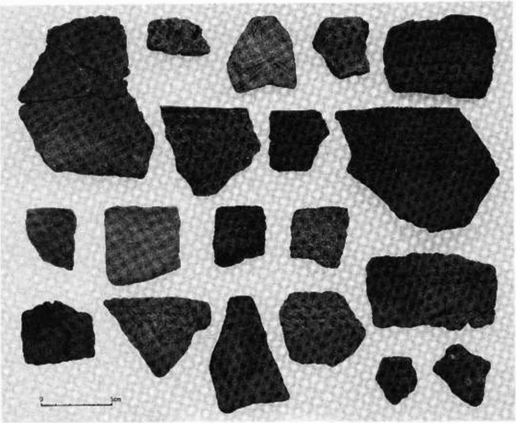
出 土 遺 物



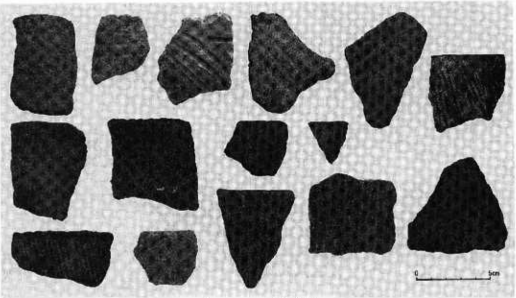
出土遺物（保存処理後）



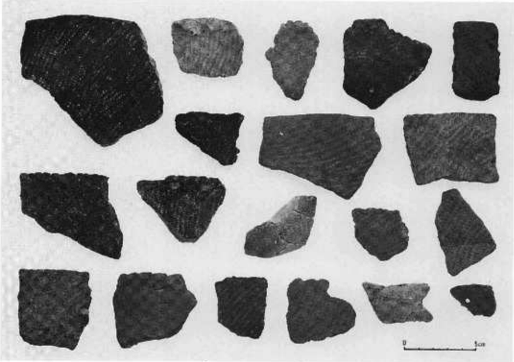
出　土　遺　物



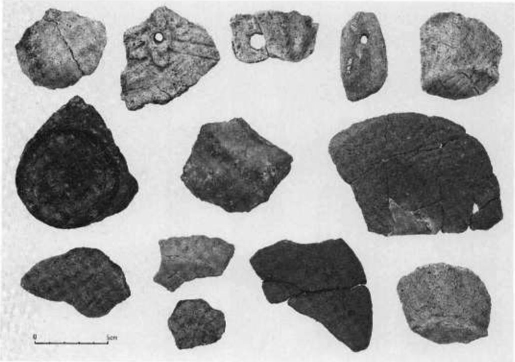
土　　　器 (1)



土　　　器 (2)



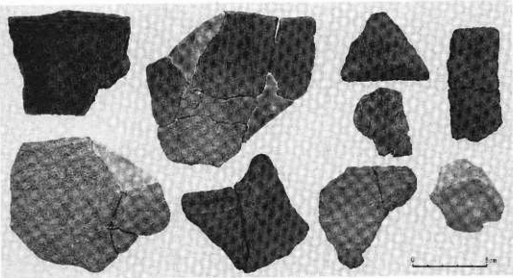
土　　　器 (3)



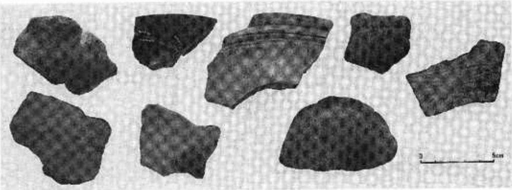
土　　　器 (4)

土　　器 (5)

土　　器 (6)

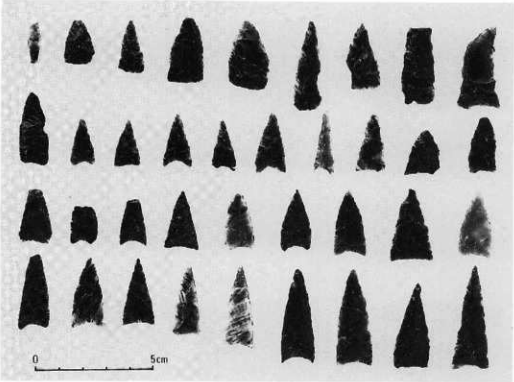


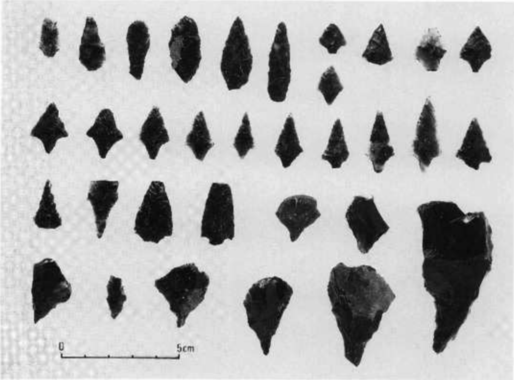
土　　器 (7)



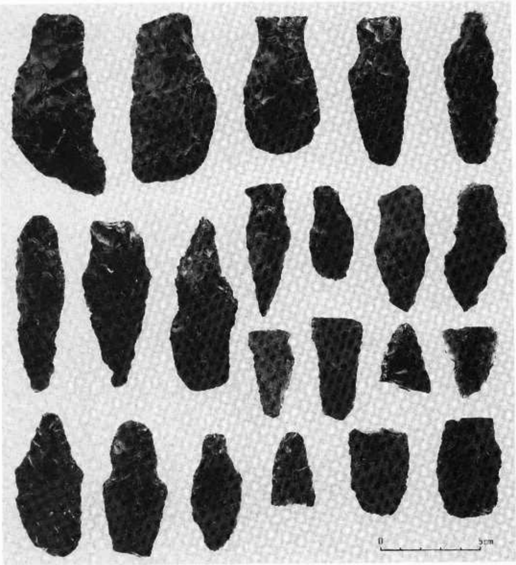
土　　器 (8)

図版Ⅴの4

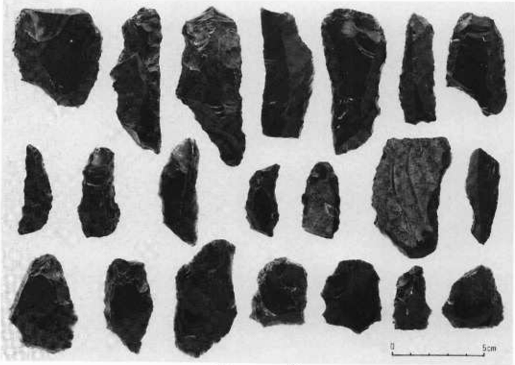




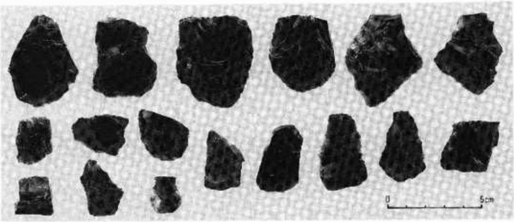
石　　　器



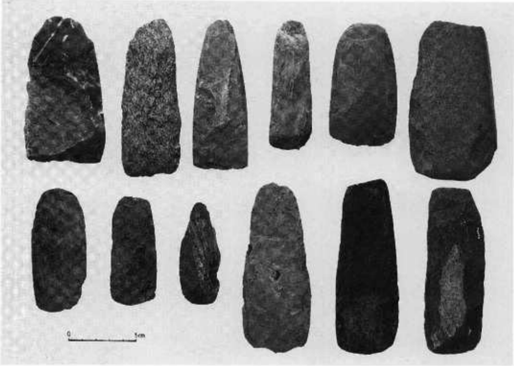
石　　器

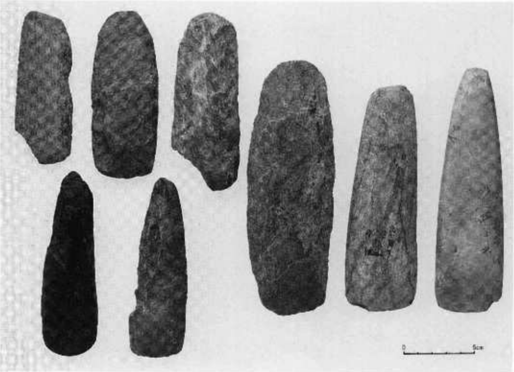


石　　　器

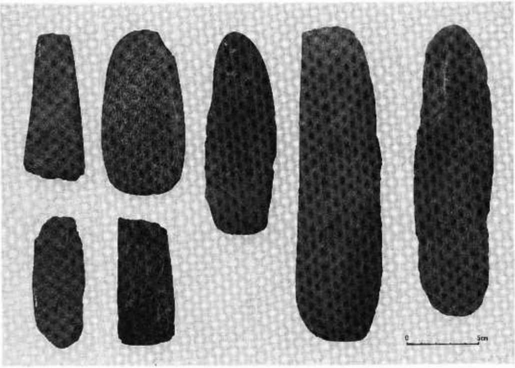


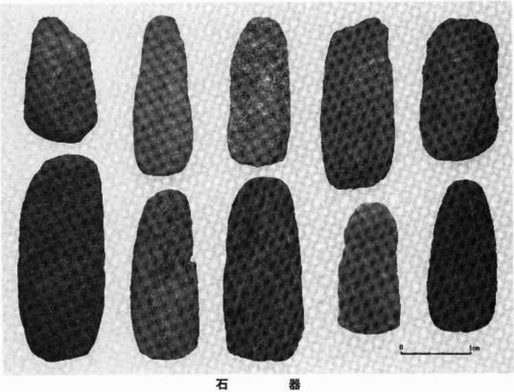
石　　　　器





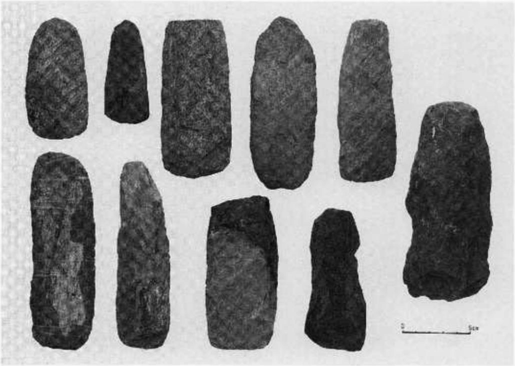
石　　　器

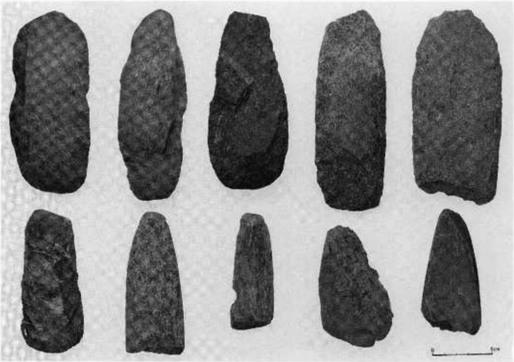




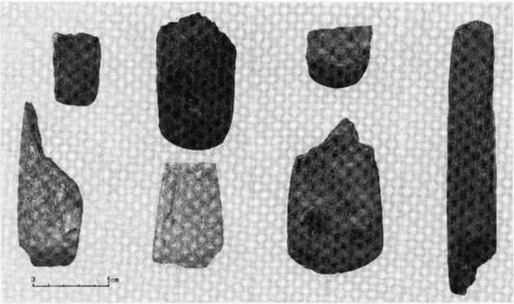
石　　　器

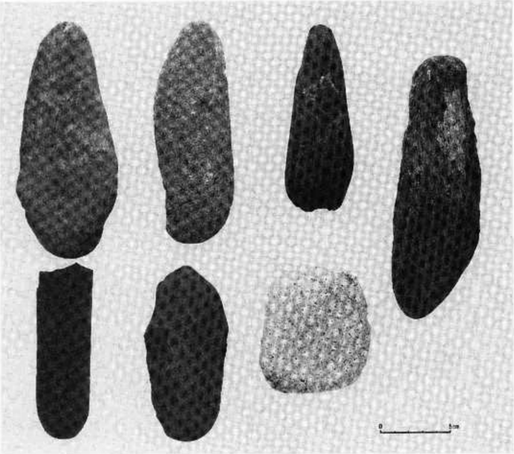
図版Ｖの10



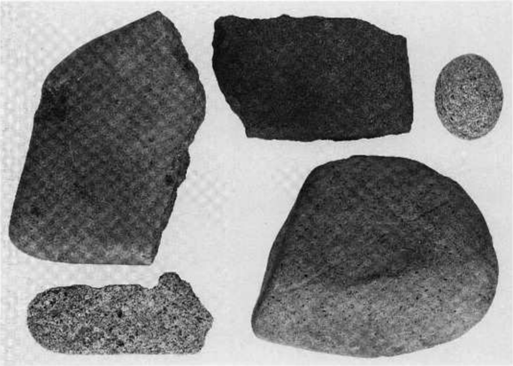


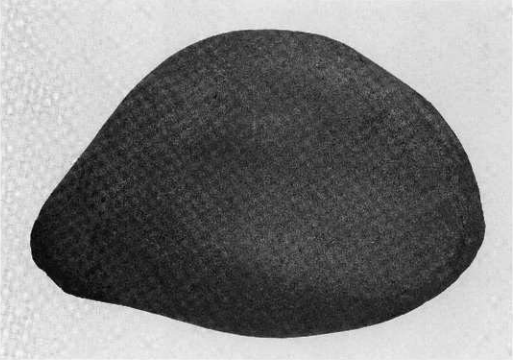
石　　　器



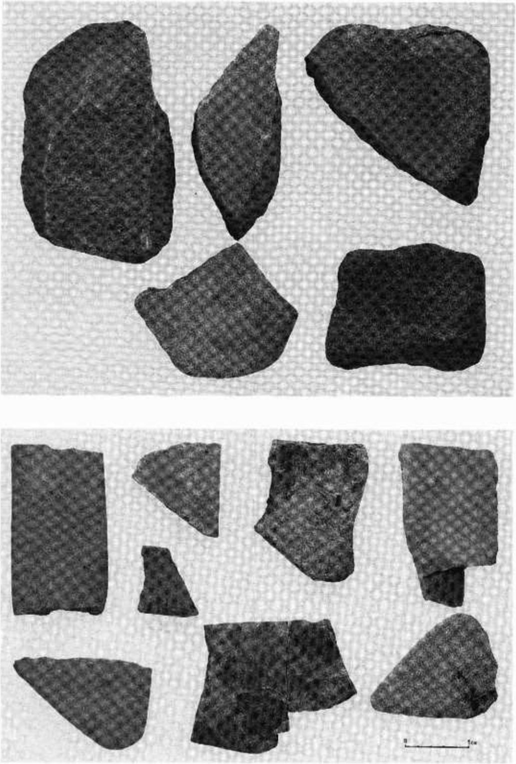


石　　器

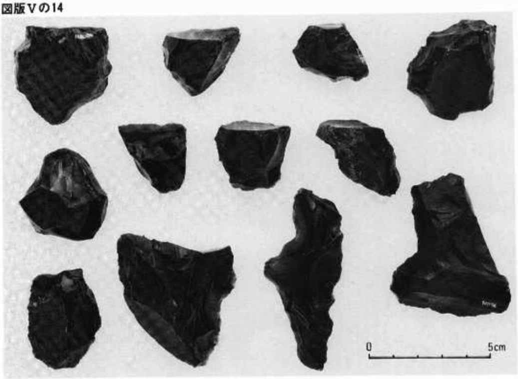


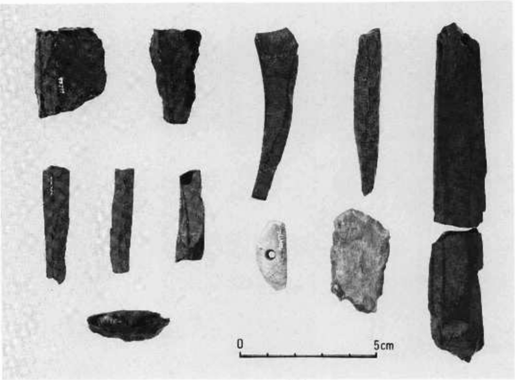


石　　　器



石　　器





石　　　器

Ⅵ　成果と問題点

はじめに

今回の発掘調査では、試掘調査の成果から予想していたこととは別の新しい知見を得ることができた。これらの具体的な内容については、Ⅳ章とⅤ章とに詳しく記してある。ここでは、調査に当たってもうけた「調査のねらい」（19ページ）の進展状況と、今回の調査で解明できたことがら及びそこから派生する問題点について述べる。

1．成果の要約

当初予想していた縄文時代・続縄文時代の遺構は検出されなかった。遺物は包含層の残存状態が悪く、その検出状態を有意のものとしてとらえ報告できるものは少ない。

沢のなかの基盤をなしている砂礫層は、予想以上に堅固であった。土器や石器・剝片が出土した層は源初的な包含層ではないものと判断される。台地のうえから投げ捨てられたものか、流れ込んだものであろう。倒木・流木と考えられるものはあったが木製品等はない。

縄文時代、続縄文時代、擦文時代、チャシの時代という四つの時代の遺物が出土している。土器の出土量は少なく、それらのうちでは縄文時代晩期と続縄文時代前半のものがほとんどを占めている。ごく少量であるが縄文時代中期と見なされるものと擦文時代中頃の土器も出土している。

縄文時代の土器は、晩期のものが相対的に多くしかも広い範囲から出土しており、本格的な遺跡の形成をみてとれる。この晩期の土器については、次の「Ⅵ－2縄文時代晩期の土器について」で上川・空知地方の類例との比較検討をおこなってある。そして、この晩期の土器の分布状態からは、沢にそった遺跡の広がりを予想できる。造田施工等に伴う表面消失を考慮すると本来の遺跡の範囲は調査区外にもっと広がるものであろう。

続縄文時代の土器は、前半期に位置付けられるものが出土している。分布状態は縄文時代晩期のものとほぼ重なっており、晩期に引き続いて人間活動があったことをうかがわせる。この時期の石鏃・幅広い茎のあるスクレイパー・石斧などの石器の形態は、縄文時代晩期のものと類似しており、たがいに明瞭に区別できない。このことからも、縄文時代晩期から継続した遺跡の形成が推定される。

擦文時代の中期に位置付けられる少量の土器が、沢の斜面や沢のなかから出土している。これは、台地上から流入したものと考えられる。しかし、造田施工等の影響のためか、この台地上から遺構の検出はなされていない。内園2遺跡の周辺には、石狩川の上流下流ともに擦文時代の竪穴跡であろうと予想される多くの遺跡が知られている。とりわけ石狩川対岸の納内6丁目付近遺跡においては、かつて竪穴住居群があって、その近くの円墳から蕨手刀が出土したという記録がある。本遺跡で出土した擦文式土器は、これらの遺跡との関連で理解されるべき遺物であろう。

発掘されたチャシは、一条の壕があり丘先式に分類できるものである。壕の一部がとぎれたかたちの『橋状遺構』が確認された。このチャシ跡に伴うものと考えられる遺物は、２か所から出土した鉄鍋の破片である。しかし、これらから詳細な時期を決めることはできない。またこのチャシに関する伝承も明らかではない。深川市内には、地表観察によってチャシと認められるものや伝承の残るチャシが石狩川にそっていくつか知られている。今回発掘されたものはこれらの遺跡との関連で理解されるべき遺構・遺物と考えられるので、「Ⅵ－４ チャシ跡について」で詳しくふれる。

石狩川の川原で礫の観察をおこない、内園２遺跡から出土した石器・剝片・破片との比較検討を行なった。

その大きさ、円磨度、黒色ないし緑色という色調などが石斧と類似している片岩の礫は、多数見られる。また、少量ではあるが石斧に使われる蛇紋岩や泥岩、砥石に使われる砂岩も認められた。出土遺物のうちで片岩の礫・石器・剝片が多数を占めていることは、本文に述べたとおりである。これらの遺物は、石斧製作に由来するものと考えられる。片岩や黒曜石の剝片・砕片の分布状態からは、石器製作活動が台地上でなされていたと見なされる。

さらに、スクレイパーに使われているものとほぼ同質の安山岩の礫も確認できた。これの多くは扁平な円礫であり、打ち剝がすと横に長い剝片が取りやすいものである。安山岩製のスクレイパーは、北海道中央部の縄文時代の遺跡で、量的には少ないがよく出土するものである。とりわけ、縄文時代晩期の遺跡に多い。南は白老町社台１遺跡・千歳市ママチ遺跡から北は鷹栖町嵐山２遺跡・富良野市無頭川遺跡などで報告されている。

北海道中央部の縄文時代の遺跡、とりわけ晩期の遺跡でよく検出される安山岩の原産地のひとつは石狩川の上流域に求められることになろう。（西田　茂）

２．縄文時代晩期の土器について

当遺跡から出土した縄文時代晩期の土器の器種組成は、深鉢・浅鉢・壷・舟形土器からなり、深鉢と浅鉢が多い。また、土器の文様には縄線文をもつものと外面が縄文のみのものが多く、沈線文の施されたものは少ないという特色がある。

縄線文をもつ土器は上川・空知地方では、従来、縄文晩期後葉から続縄文時代初頭に属するものとみられてきた。これは、上川郡東川町幌倉沼遺跡で工字状沈線文の施された土器が伴出している（佐藤　1966）ことや、縄線文が大狩部式を構成する主要な文様要素のひとつとしてとらえられている（藤本　1961）（註１）ことによると思われる。しかし、千歳市美々４遺跡など美沢川流域の遺跡群で、Ta－c層の下位から縄線文を多用する土器群が出土したことを契機として、晩期中葉から後葉のものもあることが認識されるようになった（北海道教育委員会　1977・加藤　1977）。千歳市ママチ遺跡の報告書では、斜里郡斜里町内藤遺跡（金盛・村田　1981）や標津郡標津町チシネ第１遺跡（椙田　1982）の調査結果などをふまえて、これらをさらにⅠ群とⅡ群に分離し、Ⅰ群（「縄線文土器」）を晩期中葉のものとしている（財北海道埋蔵

文化財センター編　1983)。

当遺跡の資料は、口縁部の断面形が切り出し状になっていないことや、口唇部に刻み目のあるものが多いことから、ママチ遺跡の1類（I群）(財)北海道埋蔵文化財センター編　1987 a）にほぼ相当するものと思われる（註2）。類例は、夕張郡由仁町東三川遺跡（図VI－1－1・2）（野村　1969)、深川市東納内2遺跡（図VI－1－4・5）（北海道教育庁振興部文化課編　1977)、上川郡鷹栖町嵐山2遺跡（図VI－1－8・9）(財)北海道埋蔵文化財センター編　1987 b）などにみられる。東三川遺跡や東納内2遺跡では大洞C_1式に相当する土器が出土している（図VI－1－3・6・7）。

縄文のみが施された深鉢や、外面が縄文のみで口唇部や口縁内面に文様をもつ浅鉢の多くは、口縁部の断面形や調整などからみて、縄線文をもつ土器に伴うものと思われる。ただし、図V－1－32、V－2－45・46のように口唇部に縄線文が施されたものはやや新しく、ママチ遺跡の2類（II群）に併行する可能性がある。

旭川市神居古潭8遺跡（図VI－1－10）（斉藤・福田・中谷　1979)、上川郡鷹栖町嵐山遺跡（図VI－1－11）（嵐山遺跡群調査会編　1968）などでは、口唇部に同心円状の撚糸圧痕文が施された土器が出土している。これらはママチ遺跡の2類（II群）に併行する資料と考えてよいだろう。この時期の主要な文様のひとつである円弧文が施された土器は、富良野市鳥沼遺跡（図VI－1－12）（杉浦編　1986）などで、断片的な資料がみられる（註3）。

当遺跡の土器に施された沈線文には口縁に平行なものと曲線的なものがあるが、このうち、平行沈線文をもつ土器は、旭川市永山4遺跡（斉藤　1985）からややまとまって出土している（図VI－1－13)。永山4遺跡ではこのほかに「沈線が組み合わさったもの」（図VI－1－14・15)、縄線文のあるもの、「縄文が中心のもの」、口縁部内面に文様のある浅鉢（図VI－2－16)、舟形土器（図VI－2－17）も出土している。「沈線が組み合わさったもの」の中には、横位連続工字文風の文様をもつもの（図VI－1－14）もみられる。また、無文地の上に沈線多重手法による文様の施された亀ヶ岡系土器の小片（図VI－2－18）も出土している。これらは、ママチ遺跡の3類（III群）～4類（IV・V群）に相当するもの（註4）であろう。ただし、器種組成の中に壺がみられない点に石狩低地帯やその縁辺の丘陵地帯とは異なった様相があらわれていると思われる。

当遺跡から出土した浅鉢のうち、図V－2－49・50は永山4遺跡の資料に類似している。深川市内では、内園峠遺跡からもこの時期の浅鉢が出土している（深川市　1977)。

一方、蛇行沈線文や弧線文などの曲線的な文様をもつ土器は、雨竜郡妹背牛町メム川遺跡（図VI－2－20・21）（高橋・野村　1972)、夕張郡栗山町鳩山遺跡第3地点（図VI－2－23）（野村　1965)、上川郡東川町幌倉沼遺跡（図VI－2－24・25）（佐藤　1966）などに例がある。メム川遺跡・鳩山遺跡第3地点では、図V－2－57のように屈曲部が無文になった舟形土器が伴っており（図VI－2－21・23)、ママチ遺跡の4類（IV・V群）にほぼ相当すると思われる。幌倉沼遺跡の舟形土器（図VI－2－24）は無文帯のないものがほとんどで、上川郡東神楽町沢田

の沢遺跡出土例(図Ⅵ－２－27)(斉藤　1981)と並んでやや新しいものといえよう。深川市一已町コップ山麓から出土した舟形土器もこの頃などのものであろう（深川市　1977)。

メム川遺跡（図Ⅵ―２―19）や幌倉沼遺跡では、口縁に平行な縄線文の施された深鉢や弧線文を縄線で描いたものが少数出土していることは注意される。前者は縄線の数が多いことや口縁部の断面形が切り出し状になるものが多い点で晩期中葉のものとは異なっているが、在地の伝統としてとらえることができるだろう。幌倉沼遺跡では、「胴部にレンズ状の空洞が突き抜けた」異形土器の出土も報告されている（佐藤　1966)。この頃には、亀ヶ岡系土器（図Ⅵ―２―22）の搬入は非常に少なくなるようであり、亀ケ岡系土器から影響を受けた土器も、くずれた工字文（図Ⅵ―２―26)にみられるように、地方化の度合いが強くなっている。これらの土器の編年的位置について不明確な点が多いのは、上述したことにも原因があるものと思われる。斉藤傑氏が、沢田の沢遺跡の土器を共伴する石器の組み合わせから続縄文時代初頭のものとしている（斉藤　1981）のは、注意すべきだろう。

以上、当遺跡の土器を上川・空知地方出土の土器と比較し、両地方の編年についても触れたが、資料が僅少なため、おおまかな位置づけを行い得たにすぎない。

上川地方では、続縄文時代初頭に属するものとして、富良野市鳥沼遺跡などから出土した口縁部に縄線文やボタン状貼瘤の施された土器が比定されている（工藤　1986）が、深川市内では、この時期の資料が欠落しているようである。今後の課題としては、当遺跡で出土した縄文晩期後葉の土器と宇津内Ⅱａ式併行の土器との間隙をうめる土器群を検出することが求められよう。

（中田裕香）

註１　大狩部遺跡では、縄線文をもつ土器と同じ層位から、ママチ遺跡の２類（Ⅱ群）にみられるような円弧文をもつ土器（Ｇ類）が出土している。同遺跡の縄線文をもつ土器がすべて同一時期のものであるかどうかについては、やや疑問が残るといえよう。

註２　ただし、図Ⅴ―１―９はこれらより新しいものかもしれない。

註３　岩見沢市野々沢Ｃ遺跡から出土した土器には、羽状縄文の地に円弧文に近い文様の描かれたものがある（㈶北海道埋蔵文化財センター編　1986)。

昭和61年度に調査が行われた富良野市無頭川遺跡では、縄文時代晩期から続縄文時代の土器群の出土が報告されている。Ａ地区では、ママチ遺跡の１類（Ⅰ群）・２類（Ⅱ群）に相当するものが主体を占め、「大洞C_2～Ａ式に比定される」壺形土器もみられる。Ｂ地区では、縄文晩期前葉・続縄文初頭の土器群が出土しており、後者の中には縦走する撚糸文をもつものもある（杉浦編　1988)。

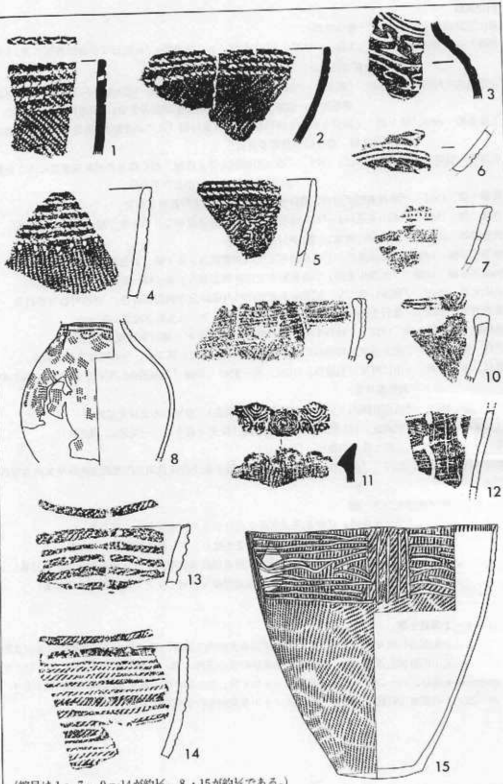
註４　これらは、従来、タンネトウＬ式（野村　1977）として一括されてきたが、ママチ遺跡での出土状況などからみても、細分することが可能と考えられる（鷹野　1977・㈶北海道埋蔵文化財センター編　1987ａ)。なお、林謙作氏は、タンネトウＬ式を「ヌサマイ式の地方型」、緑ヶ岡式を「タンネトウＬ式と同一型式内の時間差を示すもの」と理解し、ママチ遺跡の２類（Ⅱ群）に相当するものもタンネトウＬ式としてとらえている（林　1981)。

引用文献

嵐山遺跡調査会編　1968　『嵐山遺跡』
加藤邦雄　1977　「第2部　土器について」（内山真澄『N 199遺跡』『札幌市文化財調査報告書』XⅦ、札幌市教育委員会）
金盛典夫・村田良介　1981　「第Ⅱ部　内藤遺跡」（金盛典夫・村田良介・松田美砂子『斜里町文化財調査報告Ⅰ一須藤遺跡・内藤遺跡発掘調査報告書』、斜里町教育委員会）
工藤義衛　1986「第1節　土器群をめぐる諸問題」（杉浦重信編『三の山遺跡』『富良野市文化財調査報告』第2輯、富良野市教育委員会）
斉藤傑・福岡イト子・中谷良弘　1979　『旭川市神居古潭8遺跡　西丘農免農道整備事業に伴う発掘調査報告書』、旭川市教育委員会
斉藤　傑　1981　『東神楽町沢田の沢遺跡発掘報告』、東神楽町教育委員会
斉藤　傑　1985　『永山4遺跡』（『旭川市埋蔵文化財発掘調査報告』第8集、旭川市教育委員会）
佐藤忠雄　1966　『幌倉沼の墳墓』、東川町教育委員会
杉浦重信編　1986　『鳥沼遺跡』（『富良野市文化財調査報告』第1輯、富良野市教育委員会）
杉浦重信編　1988　『無頭川遺跡』（『富良野市文化財調査報告』第4輯、富良野市教育委員会）
椙田光明　1982　『標津の竪穴Ⅴ　昭和56年度標津町内遺跡分布調査報告書』、標津町教育委員会
鷹野光行　1983　「舟形土器について」（『お茶の水女子大学　人文科学紀要』第36巻）
高橋稀一・野村　崇　1972　『妹背牛町メム川遺跡』、妹背牛町・妹背牛町教育委員会
野村　崇　1965　「北海道栗山町鳩山の墳墓遺跡」（『石器時代』第7号、石器時代文化研究会）
野村　崇　1969　「由仁町東三川遺跡」（山代　熙・野村　崇編『北海道由仁町の先史遺跡』、由仁町教育委員会）
野村　崇　1977　『長沼町幌内タンネトウ遺跡の発掘調査』、空知地方史研究協議会
林　謙作　1981　「北海道」（鈴木公雄・林　謙作編『縄文土器大成――晩期』、講談社）
深川市　1977　「第三節　深川の遺跡」『深川市史』
北海道教育委員会、1977　『美沢川流域の遺跡群Ⅰ一新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書一』
(財)北海道埋蔵文化財センター編
1983　「ママチ遺跡」（『(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告』第9集）
1986　『野々沢C遺跡』（『(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書』第28集）
1987 a　『千歳市ママチ遺跡Ⅲ』（『(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書』第36集）
1987 b　『鷹栖町嵐山2遺跡』（『(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告』第40集）

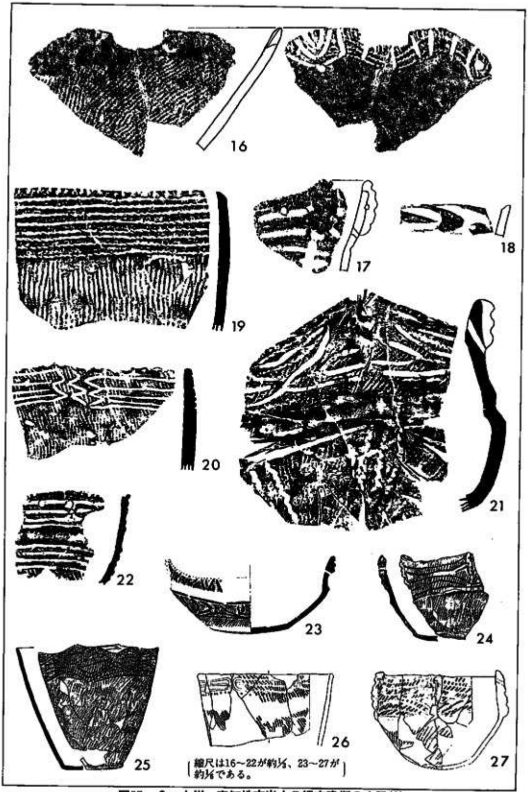
図Ⅵ－1・2掲載土器

1～3／夕張郡由仁町東三川遺跡、4～7／深川市東納内2遺跡、8・9／上川郡鷹栖町嵐山2遺跡、10／旭川市神居古潭8遺跡、11／上川郡鷹栖町嵐山遺跡、12／富良野市鳥沼遺跡、13～18／旭川市永山4遺跡、19～21／雨竜郡妹背牛町メム川遺跡、22・23／夕張郡栗山町鳩山遺跡第3地点、24・25／上川郡東川町幌倉沼遺跡、26・27／上川郡東神楽町沢田の沢遺跡



(縮尺は1～7、9～14が約1/3、8・15が約1/6である。)

図Ⅵ－1　上川・空知地方出土の縄文晩期の土器(1)



（縮尺は16～22が約1/3、23～27が約1/6である。）

図VI－2　上川・空知地方出土の縄文晩期の土器(2)

3．炭焼窯について

炭焼窯の検出状態は、図Ⅳ－1のとおりである。土層断面図によると、天井崩落後、未だ凹地であったとき礫が投げ込まれたことがわかる。その後も圃場整備工事によると考えられる埋め戻し（3層）まで、凹地であったとみられる。この窯の焚き口の外側からガラス瓶が1点出土しているが、あいにくこの焚き口の外側は急傾斜をなしており、検出状態からは、窯に直接関係する遺物なのかどうかを明らかにできなかった。本文でも触れたように（31ページ）この『シトロン』瓶の製造は1909年（明治42年）以降である。

ところで、昭和の初めに入植し、今回道路予定地になるまでこの炭焼窯付近の土地を耕作していた近藤長一氏は、炭焼窯の存在を承知していなかった。調査中にうかがった近藤氏の話は以下のようなものであった。

「もともと粘土の畑でたいへんやせたところでした。昭和43年からの道営圃場整備のとき、焼けたあく（灰）が出るところがありました。ここらは、先住民族が住んだあとだと聞いておりましたので、その住居のあとなのだろうと思いました。」

それでは、この炭焼窯はいつ作られたのであろうか。

時期推定の手掛かりとなる伝承が得られているので紹介しておきたい。内園地区在住の宮田正雄氏によるものである。

「私が父から聞いた話です。私の父梅治は、明治29年（1896年）7歳のとき香川県からその父（晋治）に連れられて、この内園に来ています。昭和42年に82歳でなくなりました。炭窯のことは、今の国道12号、以前上川道路と呼んでおりましたが、これを作るとき、作業をおこなった樺戸監獄の囚人が焼いたものだと云うことです。私は昭和2年の生れですから、話には聞いていたが、窯跡をみたことはなかった。遺跡の近くの片山さん（一家は大正2年入植）や近藤さん、村中さんが知らなかったのは、入植が遅いですから、そうかも知れませんね。」

また、炭焼窯の時期推定に可能性をもたらす、調査区内の切株の年輪数の観察記録もある。道路予定地になるまで沢地区に落葉広葉樹が繁茂していたことはⅡ－1（12ページ）に記したとおりである。調査に取りかかったとき沢のなかや斜面は、ヤチダモ、ハルニレなどの大きな切株が残っていた（図版Ⅲの6）。これらは前年夏（1986年）に伐採したもので、そのうち年輪数の最も多いものはM―77区斜面の黄蘗（キハダ）の、約85である（図版Ⅰの4下）。ヤチダモ、ハルニレなどは55程度のものが多かった。

空知地方では、開拓の初期にあっては冬の作業として炭焼きを行なった話はよく聞くところである。今回検出したものが伝承の残る上川道路開削に関連するものに該当すると考えられるならば、時期を限定しうる開拓初期の遺構といえよう。

上川道路の工事が行なわれた時期は、以下のとおりである。

1886年（明治19）市来知～忠別太間上川仮道開削開始。1887年（明治20）改修工事始まる。1889年（明治22）11月空知太～忠別太間の上川道路竣工。

（西田　茂）

下２段階の作業方法を遠矢第２チャシ跡で捉えている（西、1980）。本チャシ跡も西壕の断面をみると壁に傾斜角度がかわる部分があり、上下２段階の作業段階があった可能性がある。しかし、遠矢第２チャシ跡ほど傾斜角度の変化は急激なものではなく、東壕の大部分が削平を受けたこともあってはっきりとはしない。

チャシ跡主体部には、これよりも古いものとみられる竪穴が検出された。チャシ跡の壕との前後関係が発掘調査によって捉えられた竪穴には、枝幸町川尻チャシ跡の竪穴３軒（大場利夫ほか、1972）と平取町二風谷遺跡のⅢＨ—12（高橋和樹ほか、1986）がある。前者はオホーツク文化期のもの、後者はポロモイチャシより古いものであることが確かめられた。とくに後者については、打込み柱の存在や内耳鉄鍋の出土からチャシとそれほどの時間差のないものと推定される[3]（三浦正人、1986）。本チャシ跡の竪穴は大半が削平されている。方形のプランということも想定されるが、擦文時代のものとする積極的証拠はない。周辺の神居古潭遺跡では、擦文時代よりも新しいと推定される竪穴住居址も発見されている（河野・佐藤、1959）。本チャシ跡の竪穴も、擦文時代最終末から近世にかかる時間のものとされる「カマドのない竪穴住居」（宇田川、1980）の可能性も考えられる。

深川市周辺は、石狩川流域において、チャシ跡が集中する地域の一つである[4]。そこで、内園２チャシ跡および周辺のチャシ跡、とくに神居古潭から雨竜川合流点までの沖積平野に展開する石狩川本流域（すなわち石狩川両岸の分水嶺に挟まれた地域）にあるチャシ跡の立地と分布についてみていきたい。対象とするチャシ跡は10カ所で表Ⅵ—１のとおり[5]である。

これらのチャシ跡は、丘先式と面崖式（表Ⅵ—１・図Ⅵ—３）に分類される。前者の立地は石狩川左岸に限られている。左岸では山稜が石狩川に接近しているという地形によるものであろう。後者は納内５丁目チャシ跡を除き、蛇行を繰り返す石狩川に三方を囲まれた河岸段丘の上流側に位置する傾向がみられる。下流側に位置する納内５丁目チャシ跡は、複郭という点でも他の面崖式のものと異なり、その立地は段丘上を流れ集まる沢が石狩川に注ぎ出る部分に面している（図Ⅵ—４、Ⅵ—５の２）。このチャシ跡の場合、石狩川本流はもとより、沢を強く意識して造られたものと考えられる。この点から考えるならば、沢によって形成された舌状地に立地する内園２チャシ跡のような丘先式のチャシに相通じる部分があるのではなかろうか。この地域には、アイヌ語地名としてイチャン（ichan 鮭卵場）に関連するものが各所に残り（山田秀三、1977）、またチャシ跡のある国見出合沢では明治時代の話として、「夏から秋にかけてマスや鮭が川の底がみえないほどさかのぼった」と紹介されている（『深川市史』）。鮭・マスがかなり大量に溯上したことが窺え、この地域は恰好の生活の場となったと思われる。

チャシ跡の標高をみると、丘先式のチャシは石狩川の上流側・下流側を問わず、65～70ｍの範囲にはいっている。面崖式のチャシでは、これより低い所に立地するものがある。これは、北内園チャシ跡（55ｍ）と納内４丁目チャシ跡及び納内３丁目チャシ跡（60ｍ）である。とくに、北内園チャシ跡（図Ⅵ—４）と納内４丁目チャシ跡（図Ⅵ—５—１）は、低位の河岸段丘上に立地している。

4．チャシ跡について

今回の調査で発見されたチャシ跡は、沢と石狩川の段丘崖にはさまれた舌状地の先端部を一条の壕で区画したもので、丘先式のチャシに分類される（河野広道、1958)。このチャシ跡についての伝承や過去の調査記録は今のところみあたらない。石狩川流域の神居古潭から雨竜川合流点までには、これまで13カ所のチャシ跡が確認されているが、今回の調査によってまた一つが加わったことになる。本稿では、これを「内園2チャシ跡」と仮称する。

このチャシ跡は、石狩川と雨竜川との合流点から直線距離で22kmほど遡った地点に位置している。ここは、神居古潭の渓谷を出て西流する石狩川が一旦南に、そして北西方向へと再び流路を変えはじめる地点で、流速も緩やかになり砂州の形成もみられる。チャシが立地する台地は、現在石狩川と12mほどの比高があり、平均水位時の汀線から200mほど離れている。しかし、昭和5年作成の五万分の一地形図や昭和23年撮影の空中写真と現在の汀線を比較すると石狩川が右岸方向（納内側）へ徐々に流路を変えている様子がみられ、以前は今より左岸（内園側）に汀線が寄っていた可能性がある。チャシが立地する台地の南側にある沢は、『深川市史』(1977；P．261）の図にみられる「古川」に相当するものと思われる。

内園2チャシ跡の調査で得られた知見を列記すると次のようになる。

1．石狩川の段丘崖と沢で挟まれた台地の先端部を1条の壕で区画する丘先式のチャシ跡であること。
2．壕の一部を掘り残したかたちの橋状遺構が確認されたこと。
3．柵の配列と橋状遺構の位置関係からみると、ここに通路があった可能性があること。
4．壕底の等高線からみると、壕の掘削には少なくとも8工程があったと推定されること。
5．チャシ跡主体部に、チャシよりも古いとみられる竪穴が存在すること。

このチャシ跡は河野広道氏の分類を基本として、これをさらに細分した後藤秀彦氏による分類（後藤、1984）にあてはめると、第Ⅳ群a類（突出する台地の広がりが大きいもので、単壕のもの）に相当しよう。また、橋状遺構についても後藤氏がまとめられており、内園2チャシ跡のものは、ruyka-A（壕の一部を完全に断ち切って作出するもの）の臨川性にあたる[1]（後藤、1980)。同様の橋状遺構は、弟子屈町のサンペコタンチャシ跡に発掘例があり[2]、チャシ主体部からみた位置にも内園2チャシ跡と共通点がみられる。サンペコタンチャシ跡では、壕に沿った柵列跡が検出されている。そして、橋状遺構に対応する部分の柱穴間隔が他よりも広いことから、主体部への通路と考えられている（松田猛、1977)。前述したように内園2チャシ跡の柵列に通路と想定される部分があるが、本例の場合、橋状遺構から続くその形はカギ状となっている。あたかも、城郭でいう「桝形」を想起させる。

本チャシ跡の壕の掘削には8工程があったと想定される。1工程の長さは3m前後のものが多い。釧路町遠矢第2チャシ跡（福田友之、1975）の平均1.73m、サンペコタンチャシ跡の平均約1.5mよりも長い。東壕東端部では壁に凹凸がみられることから、より細かい掘削工程があった可能性もある。壕の掘削工程について西幸隆氏は「遠矢パターン」として位置付けた上

丘先式のチャシは各々4～5kmの距離をおいて分布している。これに対し、面崖式のチャシは1km内外の距離しかもたず、納内3丁目チャシ跡から神居古潭チャシ跡までの4.5kmの間に集中している。

後藤秀彦氏はチャシの分類の細分化を試みる中で、「(チャシの) 形態は立地を規制し、立地は形態を規制することになり、同時に形態と立地は、目的・用途・機能等を基礎とした強い規範の中で決定される」ものであり、チャシを考えるにあたって、立地のほか、人為的関連（コタン・入会地・交通路・イオルなど）からの検討やチャシを取りまく小地区の検討が基礎となると述べている（後藤、1984)。また、チャシの変遷については、丘頂式・孤島式→丘先式→面崖式というおおまかな流れが考えられている（宇田川、1980・後藤、1984)。ここでは、丘先式と面崖式との対比の中で、この地域にあるチャシ跡の立地と分布をみてきた。丘先式のものにくらべ、面崖式のものがかなり集中していることが明らかとなったが、面崖式の中にも納内5丁目チャシ跡のように形態や立地に違いをみせるものがあり、この地域にあるチャシ跡がすべて同時期の所産かどうか検討する必要があろう。内園2チャシ跡についてみれば、主体部の面積が約130㎡と規模が小さく[6]、音江チャシ跡（約700㎡）・出合沢チャシ跡（約1,200㎡）と同列に扱うことができるかという問題が残る。また、三方を石狩川に囲まれた河岸段丘の上流側に位置するという立地からも、面崖式のそれと共通する部分があり、内園2チャシ跡と分水嶺を挟んである内園チャシ跡との関係も考えなくてはならない問題である。　　(田中哲郎)

注1　後藤氏のあと、小山田真弓氏がルイカ構造をもつチャシの機能について、チャシの面積に着目して論考している（小山田、1980)。内園2チャシ跡は、小山田氏の ruyka-A の a 群（1条壕）に相当する。この a 群については、面積が小さいことが指摘されている。

注2　平取町ポロモイチャシ跡で2条の壕が発見されている（田中哲郎・寺崎康史、1986)。この2本の壕は、1.6mほどの間隔を残しており、連続していない。これも橋状遺構と捉えられようか。

注3　『ユオイチャシ跡・ポロモイチャシ跡・二風谷遺跡』(高橋ほか、1986) で、ⅢH－7（田中、P. 130）の事実記載と、建物跡についての総括の記述と食い違う部分がある。ⅢH－7については、覆土中にみられた白色火山灰を苫小牧火山灰と考え、10世紀以前のものとした。

注4　本堂寿一氏は、石狩川流域にあるチャシ跡について、漁猟域との関連のほか、交易路との関係を示唆している（本堂、1977)。

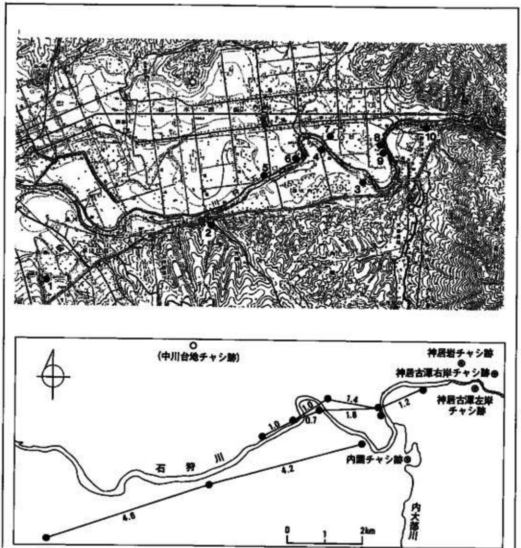
注5　中川台地チャシ跡は、道教委文化課包蔵地カードに登載されている（本報告書P. 15を参照）が、不確実さが残るため、加えていない。

注6　本チャシ跡の西側・東側がそれぞれ削られていることは、前に述べたとおりであるが、地形からみて旧状の面積が現状より大幅に広かったとは考えられない。

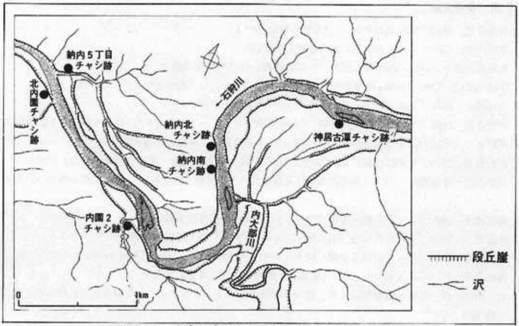
番号	チャシ跡名	形　態	壕の形状と数など	立　　地	標高	比高
1	音　江	丘先式	直状・1条	石狩川左岸・待合川右岸・段丘舌状部先端	67 m	15 m
2	出合沢	〃		石狩川左岸・出合沢に開析された舌状台地北端	70	10
3	内園 2	〃	弧状・1条・橋状遺構	石狩川左岸・沢に開析された舌状地の先端	71	12
4	北内園	面崖式	半円形・2条	石狩川左岸・段丘縁辺部	55	20
5	納内3丁目	〃	〃・1条	石狩川右岸・段丘縁辺部	60	10
6	納内4丁目(注)	〃	〃・2条	石狩川右岸・段丘縁辺部	60	6
7	納内5丁目	〃	鉤形の壕とくの字状に区画された2郭	石狩川右岸・段丘縁辺部	70	20
8	納内北	〃	半円形・1条	石狩川右岸・段丘縁辺部	65	20
9	納内南	〃	〃・1条	石狩川右岸・段丘縁辺部	65	20
10	神居古潭	〃	〃・1条	石狩川左岸・段丘縁辺部	70	10

(注)　阿部正巳 (1918) の論文では、壕は3条と紹介されている。

表VI－1　チャシ跡一覧表

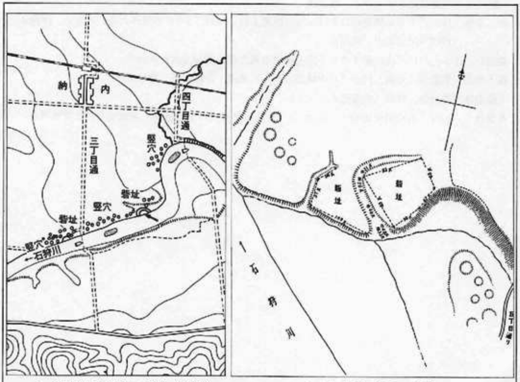


図VI－3　周辺のチャシ跡とその距離（この図は昭和5年大日本帝国陸地測量部発行の5万分の1地形図「深川」を使用したものである。）



図Ⅵ－4　空中写真からみた地形とチャシ跡の位置

（地形図作成にあたっては現地踏査や偏位修正を行なっていない。）



1．納内4丁目チャシ跡（矢印）　　2．納内5丁目チャシ跡

図Ⅵ－5　河野常吉氏の測量図（『北海道史』1918）にみられるチャシ跡（一部再トレースした）

引用・参考文献

阿部正巳、1918「北海道のチャシ」『人類学雑誌33―3』

宇田川洋、1980『アイヌ考古学』教育社歴史新書102

大場利夫ほか、1972『枝幸町川尻チャシ調査概報』枝幸町教育委員会

小山田真弓、1980「ruyka 構造をもつチャシの機能について」『北海道チャシ学会々報7』

海保嶺夫、1970「文献史料より見たるチャシ」『北海道考古学9』

河野常吉、1906「チャシ即ち蝦夷の砦」『札幌博物学会報1―1』(1974『河野常吉著作集Ⅰ』所収)

河野常吉〔宇田川洋校註〕1981『河野常吉ノート考古篇1』北海道出版企画センター

河野広道、1953「先史時代篇」『網走市史』(1972『続々北方文化論・河野広道著作集Ⅲ』所収)

河野広道・佐藤忠雄、1959「神居古潭遺跡発掘報告―132号竪穴住居址―」『旭川郷土博物館研究報告(人文科学)第2号』

後藤秀彦、1980「チャシの橋状遺構について」『浦幌町郷土博物館報16』

後藤秀彦、1982「チャシの形態分類に関するメモ」『浦幌町郷土博物館報19』

後藤秀彦、1983「チャシの形式分類に関する予察」『十勝考古6』十勝川流域史研究会

後藤秀彦、1984「北海道のチャシ」『北海道の研究2考古学篇Ⅱ』清文堂

沢　四郎・西　幸隆・豊原熙司ほか、1975『釧路市桂恋フシココタンチャシ調査報告』釧路市立郷土博物館

沢　四郎・西　幸隆・松田　猛ほか、1977「弟子屈町矢沢遺跡調査報告―第1次調査―』弟子屈町教育委員会

高橋和樹・三浦正人・田中哲郎・寺崎康史、1986『ユオイチャシ跡・ポロモイチャシ跡・二風谷遺跡』㈶北海道埋蔵文化財センター　第26集

西　幸雄、1980「チャシ構築時における壕の掘進工程について」『日本城郭大系1北海道・沖縄』

―――、1977『深川市史』深川市

福田友之ほか、1975『遠矢第2チャシ跡遺跡調査報告書』北海道教育委員会

藤本英夫・名嘉正八郎編、1980『日本城郭大系　北海道・沖縄』新人物往来社

北海道教育委員会、1983『北海道のチャシ』

本堂寿一、1977「石狩川流域のチャシコツ」『石狩川中流域の先史遺跡』空知地方史研究協議会

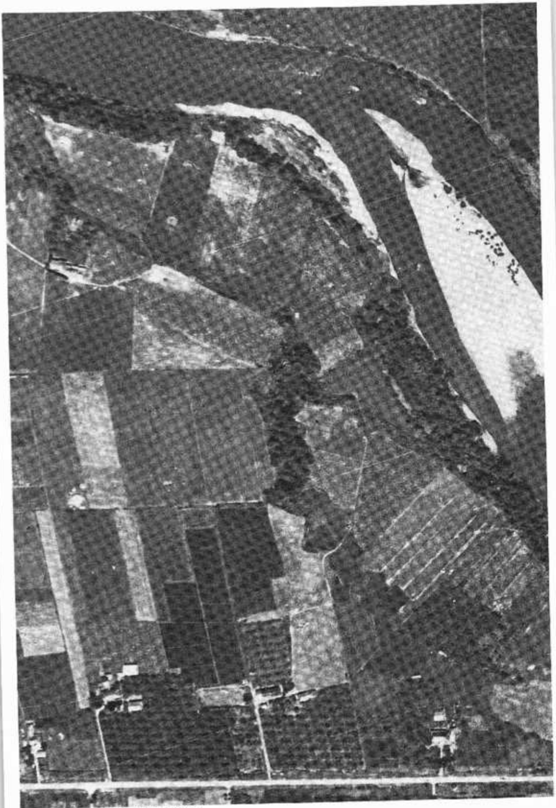
（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第51集

深川市 内園 2 遺跡

昭和63年 3 月31日 発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒064 札幌市中央区南26条西11丁目
TEL (011) 561-3131

印 刷 中西印刷株式会社
〒065 札幌市東区東雁来 3 条 1 丁目 1 番34号
TEL (011) 781-7501



内園 2 遺跡周辺の空中写真〔右〕
（これは図版Ⅱの２とあわせて立体視するためのものである）

40540